

モノグラフ調査を振り返って

深谷昌志 深谷和子

1. モノグラフの始まり

モノグラフ・シリーズは小学生、中学生、高校生の3シリーズが刊行されてきた。その中で、最も発刊が早かったのは、「モノグラフ・中学生の世界」の1978（昭和53）年4月だった。次いで、1980（昭和55）年2月に「モノグラフ・高校生」、さらに、1981（昭和56）年6月に「モノグラフ・小学生ナウ」が発刊された。それから、現在にいたるまで、20年以上にわたって、「モノグラフ・中学生の世界」は79号、「モノグラフ・高校生」は73号、「モノグラフ・小学生ナウ」は年間12本の時期があったので181本に達し、児童や生徒を対象とした333本の調査レポートを発表してきた。

本シリーズのきっかけは1977（昭和52）年にさかのぼる。現在では、大企業の仲間入りをしているベネッセコーポレーションも、当時は岡山に本社を持つ福武書店という名前の小さな受験産業だった。家庭に配布された国語や算数（数学）の問題を解いて送ると、赤ペン先生の添削が返送されるという家庭教育教材のシステムを開発し、それが子どもや親の支持を得ていた。

創業者である故福武哲彦社長とお会いした際、赤ペン先生は通信教育の教材なので、目の前に子どもがいない。それだけに、きちんとしたマーケットリサーチをして、難易度や子どもの充足感を分析してほしいという依頼を受けた。

福武哲彦社長の熱意に押される感じで、マーケットリサーチを引き受けることにしたが、今から25年以上昔のことなので、研究者として、企業の内部調査を手がけるのに抵抗もあった。

その頃、現場の教師たちと子ども調査を実施する研究会を組織し、毎年の学会などで調査結果を発表していた。子どもを対象とした調査だから、現場で子どもと接している教師たちの問題意識と研究者の分析技法とをドッキングさせて、研究を進めたいという気持ちからの研究組織だった。「子どもの行動学研究会」という名称で、1975（昭和50）年9月から、月例会を持って、調査項目を検討し、調査票を印刷し、手作りの感じの調査研究を続けていた。

しかし、調査を実施し、集計ができ、学会発表もできるのだが、何百人の子どもに協力してもらった貴重な調査結果を社会的に還元することができなかった。そこで、福武哲彦社長に、「依頼のあったマーケットリサーチは研究者ベースで全力をあげて取り組む。分析にかかる費用は実費程度でよい。その代わりに、調査結果を印刷し、配布してもらえないか」と頼んだ。

2. モノグラフの運営

福武哲彦社長は、創業者らしく、決断の人だった。子ども調査の説明を聞いて、すぐに関心を示してくれた。そして、そうした研究活動なら積極的に支援しようと確約してくれ、1か月もしないうちに、モノグラフの骨格が固まった。

- ① 研究者や現場の教師を中心とした同人会組織を作り、同人会で、調査テーマの決定や調査票の作成、調査結果の分析、報告書の作成を行う。
- ② 福武書店の教育研究所は、調査の実施や調査結果の配布などを行う。
- ③ 調査結果は、結果配布後、同人と研究所とで自由に利用できることにする。
- ④ 同人会は研究ベースで運営するので、福武書店から調査関係の実費と会合費、報告書の原稿料を支援してもらいが、同人の日当や交通費、資料費などは要請しない。

こうしてモノグラフは、福武哲彦社長と深谷昌志との信頼関係に基づいて発足し、その後、20年以上にわたって、継続されることになったが、ここまで永く続けられた成功の鍵は、ベネッセコーポレーション（福武書店）と同人会との関係の持ち方だったように思う。

同人会サイドからすると、テーマ設定から調査票の作成、データの分析など、研究ベース（原稿料と会合費以外無償）で行ったデータを一般企業に提供する感じがする。また調査にかかる実費を負担してもらえるので、積極的に調査に取り組める。さらに、同人と福武書店との共同研究の形をとっているので、研究プロジェクトに参加し、良質のデータをまとめることができれば、研究者として貴重な体験ができる上に、質的に高い資産を入手することにもなる。

福武書店からすると、調査研究が研究ベースで行われるので、コスト的に安くすむ。そうはいっても、モノグラフを印刷し、全国規模で報告書を配布するので、かなりの支出が必要になる。しかし、研究者と現場の教師で構成された研究同人が報告書を作成しているという認識が定着するにつれて、モノグラフを安心して利用する雰囲気が広まり、マスコミも、積極的に結果を取り上げるようになり、そのため、社会的に役立つデータを提供する企業として、福武書店の企業イメージや知名度が高まるという効果をもたらした。このPR効果をカウントすれば十分にペイできるという計算も成り立つ。

3. 「モノグラフ・小学生ナウ」の成果

「モノグラフ・小学生ナウ」は、当初、毎月1本、年間12本の報告書を発表していた。その後、1992（平成4）年から年間6本の作成に体制が変わり、1996（平成8）年からは年間3本の刊行となり、これまでに181本の報告書を発表してきた。

この間、本特別号で紹介するように、様々な研究テーマを取り上げ、考察を加え、提言を行ってきた。こうしたモノグラフの歩みを振り返ってみると、子ども問題に多くの足跡を残してきたことがわかる。

① 子どもを対象とした調査を定着させた

現在では、子どもを対象とした調査は当たり前になっているが、モノグラフが刊行された当時、子どもにアンケートを実施しても、子どもは幼いだから、信頼できる回答を得られないという見方が一般的だった。しかし、モノグラフ調査が広まるにつれて、子どもを対象とした調査の有効性が認められ、様々な形の子ども調査が実施されるようになった。モノグラフは子ども調査の先駆的な役割を果たしたと考えている。

② 子ども調査の形式を確立した

モノグラフでは、巻末に集計表と同時に、調査票を添付してきた。これも、当時としては画期的な試みだが、調査の透明性を確保し、他の研究者や教師が追跡調査を可能にすることを目的としていた。特別号の編集にあたって、古いモノグラフを読み直してみた。現在のレベルからすると、調査票のワーディングに手直したい項目が目につく。モノグラフを通して、ワーディングも含めて、調査票の形式を確立してきた感じがする。

③ 子どもからの視点を提起できた

モノグラフの結果は、予想した以上にマスコミに取り上げられた。そして、モノグラフのデータは我々の手を超え、様々な形の情報として社会的に広まった。そして、子どもからの視点に立った分析が広く定着したように思われる。

④ 研究者と現場教師とが連携する1つの形を作った

すでに触れたように、モノグラフは現場教師と研究者とのジョイント・スタディの形で運営された。現場の教師の持つ問題意識と研究者の方法論的な技法とを合体させたものである。モノグラフに現実の子どもの心をふまえた信頼できるデータという評価が与えられているとすれば、こうした研究会の仕組みが効果を上げたと考えられる。

⑤ 企業と研究者との共同研究に1つの形を作った

現在でも、企業と研究者との共同研究は難しい。理想を追求する研究者と現実的な利益を求める企業とでの間に一致点を見いだしにくい。そうした意味では、すでにふれたような枠組みで、20年以上にわたって、プロジェクトを組んできたのは奇跡に近い。

⑥ 昭和から平成にかけての子どものドキュメントを残せた

例えば、昭和60年の子どもは何をを考えていたのかは、今になると実証しにくい。しかし、モノグラフはそれぞれの時期に子どもの意識を追い続けてきた。そうした意味では、モノグラフは昭和から平成にかけての子どものドキュメントであり、これから先、ますます貴重なものになると考えられる。

こうした歴史的に意味のあるプロジェクトに参加できて、研究者冥利に尽きると思っている。そして、長年にわたり、モノグラフを支援してくれたベネッセコーポレーション関係者にも感謝したい。

1

子どもは変わったか

深谷昌志

1. 時系列調査の試み

1) 育ちの地域差がなくなった

「子どもが変わった」と言われる。変わったのは確かであろうが、どういう面がどの程度変化したのかがわかりにくい。特に子どもたちの世界から地域差が消え、どこの子どもも同じような成長をたどっている。

かつては東京でも山手と下町の育ちがあり、下町でも浅草と日本橋、佃とでは育ちに違いがあった。筆者は東京の上野育ちだが、親は家業に忙しく、子どもをしつけることは少なかった。こづかいをもらっては、友だちと群れて遊ぶ毎日で、駄菓子屋と紙芝居屋が親しいおとなだった。現代流に言えば、地域を舞台に育っていった時代である。隣家の祖母がうるさく、自分の孫はむろん、我々も見境なしに叱られた経験を持つ。

そうした「どこどここの育ち」があれば、浅草の子どもの育ちは深川や日本橋と比較すれば捉えやすい。しかし、現在では、そうした「地域に根ざした育ち」がなくなってしまった。

もっとも、地域差の消滅も当然のように思う。テレビ番組は全国共通だし、ヒット曲のCDも各地で同時に発売される。テレビゲームのソフトは全国一斉に発売されるし、コンビニのスナックも同じ時期に店頭に並べられる。そうした意味では、子どもたちは全国的

な商品流通の渦に巻き込まれている。それだけに、現在という社会では、どの子どもも同じような成長のスタイルをたどるようになった。そうすると、子どもたちの成長に歪みが生じても捉えにくくなる。

2) 2つの基準のとり方

そうしたとき、子どもたちの現在を捉えるためには、比較をする基準が必要になる。何かの基準に照らして、どこが歪んでいるか、あるいは、どこが長所なのかがわかる。ただ、基準として何をとるかが問題になる。

基準のとり方に2つが考えられる。1つは海外の子どものデータと対比する横断的な方法であろう。東京の子どものデータをミルウォーキーや北京、ソウルの子どもと比較すれば、子どもの生活にそれぞれの開きが生ずる。そうした他の社会の子どもの成長を手がかりとして、東京の子どもを捉えるもので、本誌の15章「国際比較」に結果の一端を示してある。

もう1つの基準のとり方は過去のデータと対比させて、現在の子どもの姿を捉える縦断的な方法であろう。この場合、適切な過去のデータを見つけるのが難しい。30年くらい前だと、子ども調査そのものが少ない上に、コンピュータ集計以前の時代なので、集計を簡

単にしたいから、調査の設計が現在と異なる。加えて、研究にも流れがあって、どうしてもその時の関心で調査をしてしまう。そうした事情が重なって、時系列的な比較調査は基準となる調査を入手しにくい。

vol.19－3「子どもは変わったか」では、調査時点が1999（平成11）年だった。そこで、20年近く比較の期間を開けたかったので、本モノグラフが発刊された頃のデータに戻って、それとの比較を試みることにした。具体的には、vol.1とvol.2に刊行された22冊のレポートに目を通して、現在でも有効な項目を拾い出すことにした。しかし、1本の調査だけでは全体像を捉えるのは難しく、1979（昭和54）年から1982（昭和57）年にかけて実施した調査から9本の調査を選んで1つの調査票を作る形をとった。

3）1980～1981（昭和55～56）年頃

それでは、既調査が実施された頃はどのような時代だったのか。調査の中心時期の1980～

1981（昭和55～56）年について、当時の歌やテレビ番組などを参考に時代を参照しよう。音楽を例にとると、谷村新司「昴」、シャネルズ「ランナウェイ」（1980年）、寺尾聰「ルビーの指輪」（1981年）がヒットした時代だし、テレビでは、「笑ってる場合ですよ」（1980年）や「オレたちひょうきん族」（1981年）が人気を集めていた。1980年10月には山口百恵の引退や巨人の長嶋監督辞任があり、1981年の3月にはピンクレディさよなら公演があった。

こうみてくると、1980～1981（昭和55～56）年頃は、40歳代以上のおとなにとって過去というには新しいが、現在ではない。懐かしさを感じる最も近い過去という感じである。しかし、テレビゲームが発売される以前だし、携帯電話などもない時代だから、過去であることは間違いない。生徒指導面では校内暴力がさかんだった時代で、いじめが問題になるのはこれから数年後になる。

2. どこが変わったか

1）子どもらしさが消えた

① 食欲が低下した

子どもたちに好きな食べ物を尋ねた結果を図1－1に示した。図のように1980年から1999年になるにつれて、食べ物を「とても好き」と答える割合が低下している。「お寿司」を例にすると、77.3%から69.9%へ、7.4ポイントも減少している。また、「焼き肉」も76.0%から69.0%へ、7.0ポイント低下している。図から省略したが、「エビフライ」は64.8%から48.8%へ、「おでん」は50.1%から35.3%へ変化している。

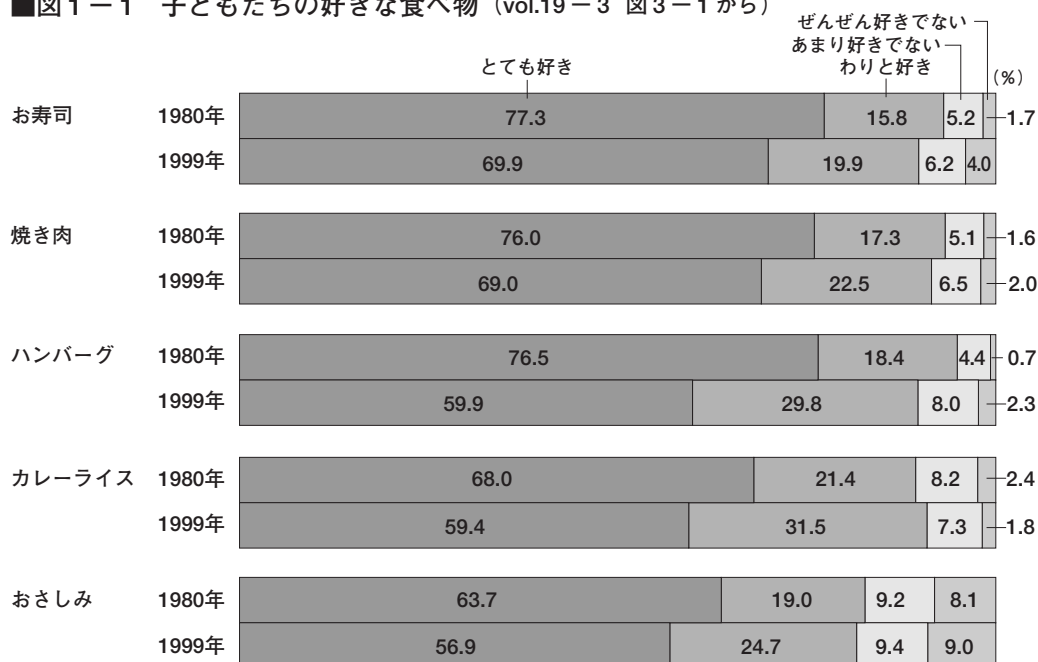
② 生活体験が低下した

1980年から1999年にかけて、「カエルにさわったこと」が「ほとんどない」子どもが

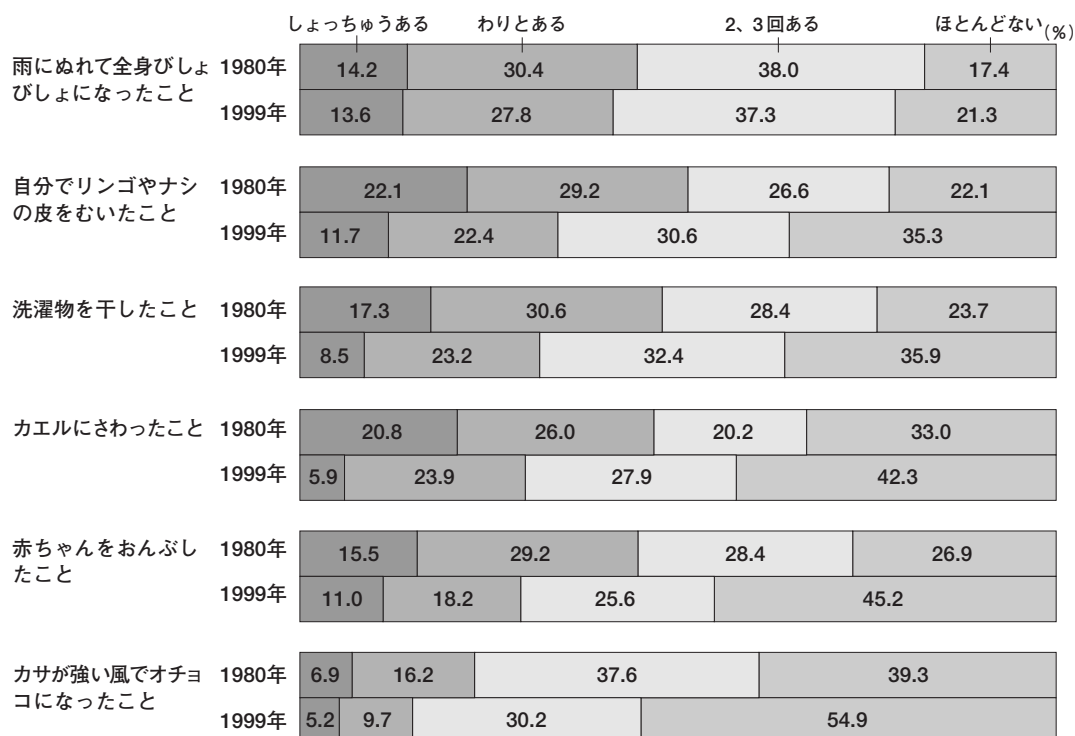
33.0%から42.3%へ、9.3ポイント増加している。「カサが強い風でオチョコになったこと」の経験の「ほとんどない」子どもも39.3%から54.9%と、15.6ポイント増えている。そうした自然体験に加え、「ほとんどない」割合において、「自分でリンゴやナシの皮をむいたこと」が22.1%から35.3%、「赤ちゃんをおんぶしたこと」が26.9%から45.2%へ増加したように、生活体験も低下している（図1－2）。

「お腹が空く」や「元気に動き回る」のが子どもらしさであろう。しかし、食欲が低下し、生活体験も減った。子ども部屋にこもったまま、子どもらしさが消えた子どもが増加している印象を受ける。

■図1-1 子どもたちの好きな食べ物 (vol.19-3 図3-1 から)



■図1-2 生活体験 (vol.19-3 図4-2 から)



2) 達成意欲が低下した

① 固定化された性差が消えた

学級の中の性差についての変化を表1-1に示した。「学級会の司会」は男子（「絶対十やや」男子に向いている割合）が54.8%から40.6%へ、「学級新聞づくり」も男子は35.9%から16.3%に減少している。それと同時に、「学級会の書記」は女子（「絶対十やや」女子に向いている割合）が60.9%から50.6%、「プリントを配る」も38.0%から22.9%へ減少している。このように男子は司会で、女子は書記のように、性差と役割とを固定して捉えるような見方が減少している。子どもの世界から、ジェンダー的な見方がすがたを消しつつあるのがわかる。

② 職業的な達成を断念した

図1-3は、子どもにビッグな目標を示して、達成が可能かと尋ねたもので、図は「ぜんぜんなれないだろう」と思う割合を示している。図が示すように、「難病を治す医者」に「ぜんぜんなれないだろう」と思う子ども

は、1980年の44.7%から1999年の50.0%、「ジャンボ・ジェット機のパイロット」は55.2%から61.1%に変化し、約20年の間に、達成を断念する子どもが増加している。

③ 幸福感が低下した

表1-2に示したように、「幸福（「とても十かなり」幸せ）」と思う割合が1980年の58.1%から43.6%へと低下している。そして、自分を「不幸（「やや十かなり十とても」不幸せ）」と感じている子どもは5.1%から11.1%へと増加している。

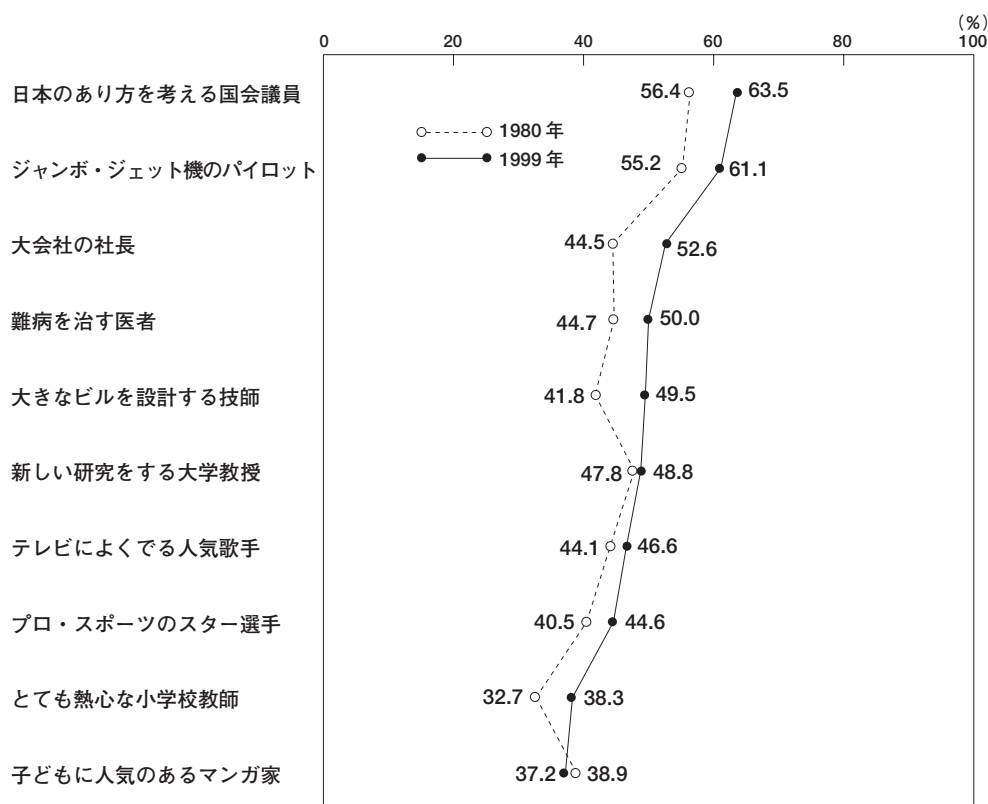
3) 全体として

この20年の間に、自然体験や生活体験が減り、食欲が低下したなど、子どもらしさが失われた感じがする。それと同時に、幸福感が低下し、社会的な達成意欲も弱まっている。素直で、よい子どもだと思うが、子どもから生き生きとした感じがなくなり、ひきこもる感じの子どもが増えた。子どもの成長にとって、幸せといえない20年だったような気がする。

■表1-1 学校（教室）での性役割観（vol.19-3 表4-6から）

		(%)				
		絶対男子に 向いている	やや男子に 向いている	どちらとも いえない	やや女子に 向いている	絶対女子に 向いている
学級会の書記	1980年	4.9	7.4	26.8	41.1	19.8
		12.3			60.9	
	1999年	2.7	9.5		36.7	13.9
		12.2			50.6	
学級新聞づくり	1980年	11.6	24.3	47.8	9.4	6.9
		35.9			16.3	
	1999年	4.5	11.8		26.6	12.9
		16.3			39.5	
プリントを配る	1980年	3.8	4.4	53.8	27.2	10.8
		8.2			38.0	
	1999年	6.3	16.6		15.6	7.3
		22.9			22.9	
学級会の司会	1980年	21.0	33.8	35.1	5.7	4.4
		54.8			10.1	
	1999年	12.7	27.9		11.2	7.6
		40.6			18.8	

■図1-3 将来の仕事（断念率…「ぜんぜんなれないだろう」の割合）（vol.19-3 図6-1 から）



■表1-2 現在の幸福感（vol.19-3 表7-1）

		(%)								
		とても 幸せ	かなり 幸せ	小計	やや 幸せ	ふつう くらい	やや 不幸せ	かなり 不幸せ	とても 不幸せ	小計
全 体	1980年	36.6	21.5	58.1	14.8	22.0	3.5	0.7	0.9	5.1
	1999年	26.6	17.0	43.6	20.7	24.6	5.6	2.1	3.4	11.1
男 子	1980年	31.8	21.3	53.1	16.4	24.1	4.1	0.9	1.4	6.4
	1999年	22.8	15.4	38.2	21.3	28.1	5.4	2.7	4.3	12.4
女 子	1980年	42.3	21.8	64.1	12.9	19.5	2.7	0.4	0.4	3.5
	1999年	31.0	18.8	49.8	20.2	20.6	5.8	1.2	2.4	9.4

〈この章で用いた号〉

深谷昌志・夏秋英房・遠田瑞穂・中澤智恵・島田美佐江・土橋稔・戸塚智（2000）「子どもは変わったか」

vol.19-3

2

遊びと友人・クラス

土橋 稔

犯罪の低年齢化が憂慮されている。子どもたちの問題行動の根底には、子どもたちの人間関係の希薄さが指摘される。核家族化、少子化、そして地域が崩壊していく中で、子どもたちの人とかかわる力が、確実に低下してきている。

この章では、子どもたちの人間関係、特にクラスの友だち関係や、それらを支える子どもたちの遊びをとりあげる。

〈この章で用いた号〉

深谷和子・石川洋子・田村毅・山根はるみ・中原美恵（1994）「子どもと人間関係」vol.14－1

深谷和子・中澤智恵・猿田恵一・小川正代（1998）「友だち関係」vol.18－2

深谷昌志・井上健・三枝恵子・遠田瑞穂・及川研・夏秋英房・中澤智恵（1999）「子どもたちの遊び」vol.19－1

1. 子どもと人間関係

1) 家族

子どもたちの周囲にいる人たちとの心理的距離をみるために「あなたがケガをして入院したら、みんなはどのくらい心配してくれるか」と質問したのが、表2－1である。母親が「とても心配」してくれると思う割合が82.1%と一番高い。

母親とのかかわりについては、「いつも十わりと」する割合が「誕生日や母の日にプレゼントをする」「学校であったことを話す」が6割、「よく十だいたい」知っている割合が「友だちの名前」や「得意な科目」も7～8割と、母親との一体感の強さを示す結果となっている【vol.14－1 図5】。父親については、「いつもする」割合について母親と大きな差がみられたのは「学校であったことを話す」であった【vol.14－1 図4】。

2) 人間関係を作り出す力

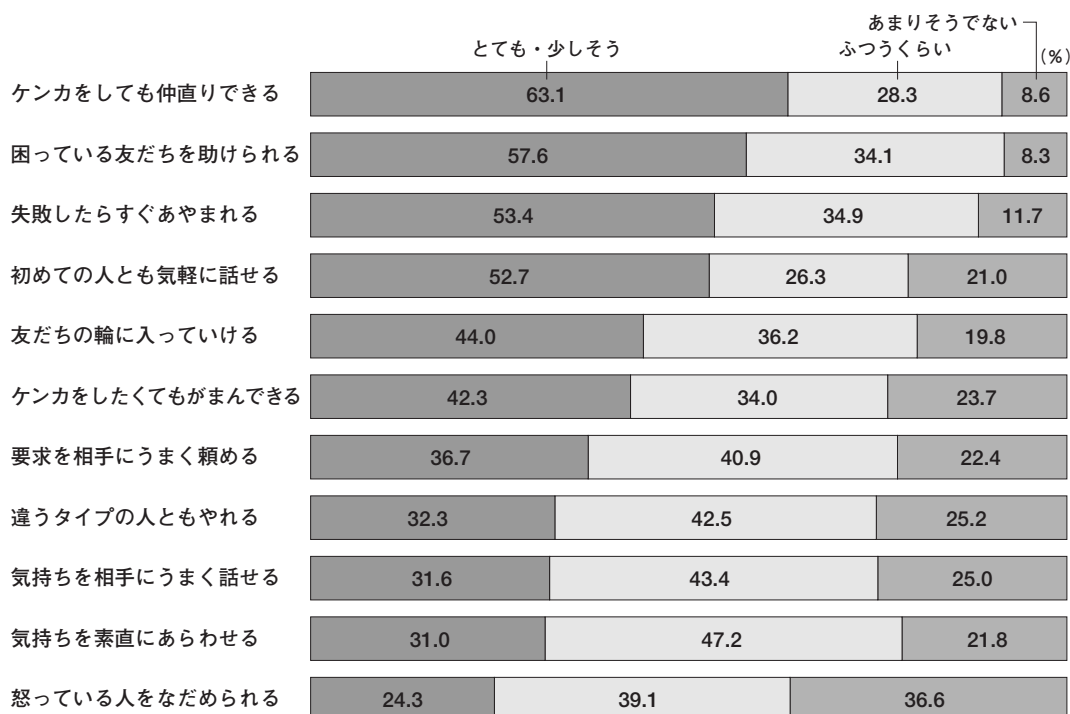
子どもたちが、自らの「人間関係力」についてどのように評価しているかを図2－1に示した。「ケンカをしても仲直りできる」「困っている友だちを助けられる」など多くの項目で、比較的自信を持っているように見受けられる。

友だちとのつきあい方をみると、「友だちの相談にのるのが好き」「家族より友だちといる方が楽しい」の2項目は、「とても十わりと十少し」そう思う割合で7～8割に達している。その一方で、「友だちにイヤといえない」65.4%、「リーダーにはさからわない」39.5%など、なるべく対立やトラブルを避けようとする傾向もみられる【vol.14－1 表6】。

■表 2－1 「あなたがケガをして入院したら、みんなはどのくらい心配してくれるか」
(vol.14－1 表 4)

					(%)
	とても心配	まあまあ心配	あまり心配しない	ぜんぜん心配しない	(いない)
母 親	82.1	14.4	2.1	0.6	0.8
祖父母	75.0	16.2	2.1	1.1	5.6
父 親	66.8	24.5	3.8	1.3	3.6
一番仲よしの友だち	57.7	33.4	5.6	2.5	0.8
親戚のおじ・おば	44.9	41.9	8.8	2.4	2.0
担任の先生	43.4	39.8	11.8	5.0	—
きょうだい	40.9	36.0	12.3	5.9	4.9
いとこ	40.6	42.3	11.4	3.7	2.0
養護教諭	28.1	47.4	17.4	7.1	—
校長先生	26.1	39.0	22.1	12.8	—
近所の人たち	21.5	46.5	21.0	9.2	1.8
塾や習い事の先生	19.4	35.1	17.7	9.6	18.2
クラスみんな	18.7	44.9	27.8	8.6	—
友だちの父や母	14.4	38.5	31.7	13.7	1.7

■図 2－1 人間関係を築く力 (vol.14－1 図 18)



2. 友だち関係

1) 友だちはどこにいる

表2-2によれば、子どもの自己像のうち最も肯定的な側面は、「友だちがたくさんいる」で、2位の「明るい」と共に他を圧している。さらに3位は「初対面でもすぐに仲良くなれる」、6位には「友だちを笑わせるのが上手」と、人間関係にオープンで、ノリのいい子ども像が浮かび、しばしば人間関係に過敏で、友だちに気を遣っていると指摘される最近の子どもからは、距離の感じられる結

果となっている。

その友だち関係の基盤となるクラスの人間関係をみると、「みんなの気が合う」「まとまっている」では「とてもそう」とする割合が1割程度である【vol.18-2 図1】。クラスでの友だち構成は、友だちが6割、「あまり関係のない人」と「何となく気が合わない人」を合わせて4割と、クラス風土はそれほど温かいものの、親密なものではなさそうな結果となっている【vol.18-2 表6・図2】。

■表2-2 自己像 (vol.18-2 表1)

(%)

	とても そう	わりと そう	小計	あまり そうでない	ぜんぜん 違う
友だちがたくさんいる	43.2	41.3	84.5	13.8	1.7
明るい	34.0	48.2	82.2	15.6	2.2
初対面でもすぐに仲良くなれる	26.1	42.2	68.3	26.5	5.2
運動が得意	25.7	30.0	55.7	27.9	16.4
流行に敏感	18.1	35.7	53.8	35.9	10.3
友だちを笑わせるのが上手	17.7	30.4	48.1	38.1	13.8
勉強が得意	9.6	26.0	35.6	38.9	25.5
心が傷つきやすい	11.3	23.4	34.7	41.2	24.1
わがまま	7.5	27.1	34.6	47.6	17.8
まじめ	5.6	21.9	27.5	46.5	26.0
目立ちたがり	10.2	17.2	27.4	43.5	29.1
リーダー的	7.3	16.0	23.3	40.5	36.2
よくケンカをする	6.4	16.2	22.6	42.4	35.0
おとなしい	4.2	18.2	22.4	41.1	36.5

2) 仲良しグループと親友

仲良しの友だちという言葉の定義が難しい。vol.18-2では、「休み時間のときによく一緒に遊ぶ仲間」を「仲良しグループ」とし、その関係について考察している。

「仲良しグループ」はクラスに平均5.8グループある。男子では2～3グループ、女子では3～4グループが多い。仲良しグループに入っている子は、男女とも9割を超えている【vol.18-2 図3・表8】。グループの友だちのつきあい方についてみると、学校では「隣

の席に並びたい」「学習の班を組みたい」と、様々な場面での一緒に生活を望んでいる【vol.18-2 図8・図10】。ところがいったん学校を離れてしまうと、放課後や休日に一緒に遊ぶことは少なく、また、塾やおけいこごとに一緒に行くことも少なく、一緒に過ごす時間は格段と少なくなる。学校外では必ずしも仲良しグループの関係が延長されない実態がみえてくる。グループの親密さは学校内に限られている。

3. 遊び

1) 子どもたちの遊び方

表2-3の結果から、休み時間に子どもたちが遊ぶ場所の様子を「たくさん遊んだ」割合でみていくと、「運動場や校庭」では4割、「教室」が2割弱、「廊下や階段」と「校舎の裏やすみっこ」などを合わせると1割弱となる。

放課後はどうか。学校が終わってから友だ

ちと遊ばなかった子が7割、家に帰ってから外に出て遊んだ子は2割にすぎない【vol.19-1 表1-5・表1-6】。学校が終わると家の中で「テレビを見たり、マンガを読んだり、ごろごろしたりのんびりする」子どもたちの姿がある。子どもたちの群れ遊びをしない傾向が読みとれる【vol.19-1 図1-1】。

■表2-3 きんのう、学校の休み時間にどこで遊んだか (vol.19-1 表1-1)

	(%)			
	たくさん遊んだ	少し遊んだ	あまり遊ばなかった	ぜんぜん遊ばなかった
運動場や校庭	41.7	18.0	8.5	31.8
教 室	18.3	37.2	20.6	23.9
廊下や階段	5.9	14.8	16.4	62.9
校舎の裏やすみっこ	1.6	2.6	6.6	89.2
くつ箱のところ	0.9	1.1	6.4	91.6
トイレ	0.2	1.8	2.3	95.7

2) 遊びの条件は整っているか

表2-4で、学校が終わってから遊ばないのはどんなときかを尋ねている。「遊ぶ時間がないとき」「塾や習いごとがあるとき」が高い数値を示している。塾や習いごとに追われて忙しく過ごしている子どもたちの姿が浮かんでくる。

放課後に遊ぶ友だちについては、子どもたちの遊び友だちは、圧倒的にクラスの友だちであり、同じ学年の友だちである【vol.19-1 図4-3】。また、それらの友だちと学校や、電話で約束をしてから遊んでいる。また、「約束しないが、友だちが遊んでいそうなところに行く」ことは極めて少ない。公園などの遊び場所がいくら整備されても、子どもたちが群がり遊ぶ〈遊び空間〉はほとんど消滅している【vol.19-1 図4-4】。

3) 遊び意欲の変化

子どもたちの遊び意欲はどうか。「家

の中と外でどちらで遊ぶのが好きか」を尋ねると、「家の中（ぜったい＋わりと）」が36.3%で、「家の外（ぜったい＋わりと）」19.1%の2倍の数値を示している【vol.19-1 表3-3】。内遊びへの進行が進んでいる結果といえよう。

子どもの遊び意欲全般をみってみる。「よく＋ときどき」ある割合に着目してみると、「もっと長い時間遊びたい」88.0%、「もっと広い場所で遊びたい」72.8%、「もっといろいろな遊びをしてみたい」72.2%、「外で思いつき遊びたい」64.6%と遊び意欲がみられる。しかしその一方で、「1人で好きなことをしたい」51.1%、「大勢よりも2～3人で遊びたい」48.1%と、内遊びや少人数遊びへの気持ちもわりと強いようである【vol.19-1 図6-3】。

vol.19-1では、そのほかにも「遊びの種類」「遊びによる充足感」「遊び仲間」などを、地域差を視野に入れながら考察している。

■表2-4 学校が終わってから遊ばないとき (vol.19-1 表2-1)

	(%)			
	よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない
遊ぶ時間がないとき	54.2	26.0	10.0	9.8
塾や習いごとがあるとき	54.0	17.9	8.8	19.3
疲れているとき	29.8	24.9	21.0	24.3
宿題や勉強があるとき	24.2	21.3	26.9	27.6
なんとなく遊びたくないとき	18.3	27.8	26.5	27.4
遊ぶ相手がいないとき	16.7	25.2	29.4	28.7
学校でいっぱい遊んできたとき	8.3	11.9	26.2	53.6

3

学校と学級

深谷昌志

1. 学校の制度疲労

明治初期の校舎といえば、松本の開智学校や岩村田（長野県）の中込学校を連想する。いずれも、学制発布直後に建てられた西洋風の二階建て校舎で、「身を立て、名を上げ」に象徴される学制の理念にかけける人々の熱気が伝わってくる思いがする。

もちろん、明治時代は財政的に貧しく、学制の理念に近い校舎を建てるのは困難だった。そのため、多くの学校は寺子屋から転身したもので、開智学校などは教育にかけける政府の意気込みを示すモデルスクールだった。

その後、各地で、地域の総力を結集する形で、西洋風の学校が建てられるようになる。そして、明治30年代の半ばを超える頃から、どの地域へ行っても、中心部に学校があり、その学校が地域に新しい時代の文化を発信するセンターとしての機能を果たしていた。

子どもたちがオルガンに合わせて小学唱歌を歌う。女の子がブルマーをはいて、校庭を走る。あるいは、地球儀を通して、日本の小ささを知る。そして、これまでの「寸」や「匁」の和算に代わって、「センチ」や「グラム」などの洋算を学ぶなど、当時の人にとって、革命的なできごとであった。学校はいわば西洋文化を伝達してくれる「聖域」（サンクチュアリ）で、地域の文明開化は学校を通

して進んでいった。

明治30年代の後半になると、就学が実質的に定着し、津々浦々で学校教育が展開されるようになる。「学校」というと、教室や担任の先生、教科書、黒板、通信簿、運動会、修学旅行といったものを思い起こす。教育史的に言えば、このどれをとっても、明治30年代半ば頃に、学校に定着している。

学級を例にすると、明治20年代までの学校は、学期ごとの試験の結果で進級する制度がとられていたので、学級的な感覚はなかった。しかし、明治24年に、学期の試験を廃止し、小学校は、同じ年度に入学した子どもが、原則として同じ年度に卒業するようになった。そうした背景から、何十人かの子どもが担任と2年間生活をともにする学級が誕生する。

こうした設備面だけでなく、明治30年代の後半から40年代にかけて、各県で児童管理規則が制定されている。その中に、「授業中に、質問する時は指をまっすぐに揃えて、右手をあげる」や「教室の出入りにあたって、『気をつけ』、『前へ進め』『右向け右』などの指示に従う」などの規定がみられる。

こうした史実が示すように、建築だけでなく、学校行事や教室内の行動にいたるまで、現在の学校文化を象徴するもののほとんどが

明治末期に作られているが、その多くは、当時として革新的な性格が強かった。学級や担任、そして、黒板や机、さらに、教科書を中心とした授業や学校行事などは、現在の学校

にも受け継がれている。家庭や地域で明治が遠くなってしまったのに、現在の学校には明治が数多く残存している。学校は制度疲労を起こしている印象を受ける。

2. クーラーをつけてほしい

「学校ってどんなところ？ ―子どもたちの学校評価―」(vol.20-2)では、子どもの目から、学校に対する評価を求めたものだが、調査結果の中で注目したいのは、「学校に注文したいこと」と「学校でしていることでおかしいと思うこと」との2問だった。

この質問は、プリテストを兼ねて、ヒアリングをしているとき、子どもたちが、冗談交じりに話したことを中心に作られている。それほど数値が高くなるとは思えないが、どういう数値が出るか調べてみたい。そんな気持ちからの設問だった。

「学校に注文したいこと」の結果は表3-1の通りになる。「とても十わりと」そうしたい割合に着目すると、「クーラーを入れる」への要望は80.0%に達する。次いで、「自由に使えるパソコンがある」74.7%で、以下

「教室の整理整頓をする」「教室をもっと広くする」「ロッカーをもっと大きくする」が続く。

学校改革にあたって、子どもの声を生かすとするなら、「クーラー」や「パソコン」は7割以上の子どもの支持を得ている。さらに、「教室を広く」「ロッカーをもっと大きく」の支持も6割となる。いずれも、すぐにでも実現するのが必要な課題となる。

この数値をどう考えたらよいのか。教室に「クーラーを入れる」が代表例だが、同人会の席でも、結果の解釈で盛り上がった。「そんなのはぜいたくだ。がまんさせることも大事だ」という先生もいたが、「家にも、電車でもクーラーがあるのだから、学校だけクーラなしというのは、おかしい」「夏など蒸し風呂状態だ」という声もあった。

■表3-1 教室への要望 (vol.20-2 表2-4)

	(%)			
	とても そうしたい	わりと そうしたい	あまり そうしたくない	今の ままでよい
クーラーを入れる	62.8	17.2	4.8	15.2
自由に使えるパソコンがある	55.4	19.3	6.1	19.2
教室をもっと広くする	38.5	22.5	6.9	32.1
ロッカーをもっと大きくする	37.6	23.2	6.9	32.3
水道がある	34.9	16.1	5.5	43.5
動物をもっと飼う	31.1	28.6	14.1	26.2
机をもっと大きくする	29.2	21.9	10.7	38.2
教室の整理整頓をする	28.4	35.8	10.8	25.0
教室の壁をクラスの希望の色にする	26.4	14.1	6.5	53.0
掲示物をきれいに工夫してはる	23.2	35.9	10.9	30.0
植物をもっと育てる	19.2	36.3	13.5	31.0

少なくとも100年前には文化の発信センターであった学校は、現在では社会の中で遅れた地域になっている。クーラーに限らず、色彩や音などの多くの面で、教室は子ども部屋の条件より劣っている。テレビやパソコンなどの情報面でも、平均的な家庭より遅れている。

「子どもにぜいたくをさせるな」というのはよいが、学校が社会の生活水準より遅れて

いることを認める必要があろう。子どもの成長を大事に考えるなら、子どもたちが登校を楽しみに思えるような魅力的な学校を作ってはどうか。明治初期の開智学校や中込学校と同じレベルの学校を考えるなら、21世紀の到来を感じさせるような、斬新で意欲的な学校作りを試みるのが重要なのではないかと思った。

3. 学校文化の見直し

もう1問、学校でしていることで、子どもからみて、「ヘンだな」と思うものがあるかを尋ねてみた。結果は、表3-2のような数値となる。「とても十少し」ヘンの割合に着目すると、「1人が悪くてもみんなで怒られる」では72.3%が「ヘン」だと感じている。そして、「『体育座り』をする」45.2%、「『気をつけ』『前へならえ』をする」43.7%となっている。

学校内で行われていることなので、子どもは当たり前だと思い、疑問に思うことは少ないと考えていたが、「ヘン」と思う子どもが

かなりの割合を占める。

「気をつけ」を例にすると、確かに現在では、学校以外でそうした号令を聞くことはほとんどない。「先生の質問に手を挙げさせる」や「決められた体操着で運動する」も、学校に特有の文化なのであろう。これまでの学校では、子どもを教える対象として捉え、管理の対象とみなしがちだった。それだけに、一人ひとりの子どもの心情を配慮することに欠けがちだった。

子どもへの接し方は、学校の雰囲気を作る。学校文化と呼ばれるものが、学校内での集団

■表3-2 「ヘンだな、おかしいな」と思うこと (vol.20-2 表3-3)

	(%)			
	とてもヘン	少しヘン	小計	ヘンではない
1人が悪くてもみんなで怒られる	33.3	39.0	72.3	27.7
「体育座り」をする	17.7	27.5	45.2	54.8
「気をつけ」「前へならえ」をする	16.6	27.1	43.7	56.3
先生の質問に手を挙げさせる	13.4	28.9	42.3	57.7
決められた体操着で運動する	8.7	24.4	33.1	66.9
宿題が出される	12.4	14.8	27.2	72.8
運動会の練習をたくさんする	7.7	17.8	25.5	74.5
児童会の活動をする	5.4	16.8	22.2	77.8
給食当番が白衣やマスクをつける	4.5	14.9	19.4	80.6
日直の仕事や係活動がある	4.5	10.6	15.1	84.9
校内では上履きにはきかえる	4.7	10.0	14.7	85.3
掃除当番や給食当番がある	4.6	9.0	13.6	86.4
授業の始まりや終わりにチャイムが鳴る	2.5	5.5	8.0	92.0

の扱いや子どもへの接し方に工夫をこらすことも大事であろう。

すでにふれたように現代の学校は20世紀の初めに誕生した。そして、革新的な雰囲気を持ち、多くの子どもを魅了した。しかし、1世紀にわたって、学校内外に抜本的なメスが加わることがなかった。その結果、21世紀を迎えた現在、学校は古さを残す場となり、子

どもから見てもおかしい場になりつつある。

子どもたちの心をうきうきさせるような色彩感覚の豊かな校舎を造る。あるいは、現代風の音楽をアレンジして、時間帯ごとに流す。さらに、親たちに協力を求めて、学校に家庭的な雰囲気を持ち込むなど、学校の再生には、いくつかの手法があるように思われる。

4. 学級による開き

子どもは学校に通っている。そして、多くの時間を学級の中で費やしている。学級には担任とたくさんの友だちがいる。そして、そうした人間関係がもたらすものなのであろうが、学級にはそれぞれの雰囲気がある。楽しい学級もあれば、暗い学級もある。しかし、子どもは学級に配属されるので、学級を選択

できない。それだけに、楽しい学級にいれば幸せだが、暗い学級にいと学校生活が苦痛になりやすい。

そこで、55学級を対象として、学級の楽しさを調査してみた。結果の一部を紹介すると、表3-3の通りとなる。

この表には多くの示唆に富む内容が含まれ

■表3-3 学級への満足度 (vol.16-3 表18から)

順位	子 ども					教 師				
	学年	クラス 人数 (人)	学級への 満足度(%) (A)	担任への 満足度(%) (B)	満足度の差 学級-担任 (A)-(B)	性別	年齢	経験 年数 (年)	出身 大学	クラス評価 普通を 60点
①	6	20	100.0 (75.0)	95.0 (90.0)	5.0	女	30代後半	16	短大	90
2	5	28	96.4 (85.7)	96.4 (85.7)	0.0	男	40代後半	20	普通	80
③	6	34	91.2 (79.4)	76.5 (50.0)	14.7	女	40代前半	21	短大	80
④	6	32	90.7 (43.8)	38.7 (12.9)	52.0	女	40代後半	26	教育	70
⑤	4	25	88.0 (60.0)	84.0 (60.0)	4.0	女	40代後半	25	短大	70
6	4	33	87.8 (63.6)	97.0 (69.7)	- 9.2	男	30代後半	7	短大	60
50	5	38	50.0 (23.7)	46.2 (15.4)	3.8	男	40代前半	13	普通	80
⑤1	6	31	49.6 (22.6)	93.5 (38.7)	-43.9	女	40代後半	22	教育	70
52	5	31	45.1 (16.1)	67.8 (45.2)	-22.7	男	30代前半	8	教育	70
53	5	26	34.6 (15.4)	77.0 (38.5)	-42.4	女	30代前半	8	普通	70
⑤4	6	33	24.2 (12.1)	25.0 (3.1)	- 0.8	女	40代前半	20	教育	70
55	5	30	13.4 (6.7)	36.6 (23.3)	-23.2	女	30代後半	16	短大	80

学級への満足度・担任への満足度は「とても」＋「わりと」よかった割合 () 内は「とても」よかった割合
出身大学 教育……4年制教育系大学 普通……4年制普通大学
順位の○数字は持ち上がり担任のクラス

ているが、まず、学級の楽しさに大きな開きが認められる。「とても」と「わりと」を加えて、学級の楽しさ（満足度）は100.0%から13.4%へ広がる。満足度が5割以下は55学級のうち6学級で、6割以下を含めると10学級になる【vol.16－3 表18】。

それと同時に、注目すべき点は学級の楽しさが担任への評価と密接に関連する事実であろう。今回のサンプル55学級の中で、学級の

楽しさ（満足度）No.1は100.0%だが、「とても＋わりと」よかった割合でのこの学級の担任への満足度は95.0%で、担任への評価も高い。

それに対し、学級への満足度が最下位は13.4%で、担任への満足度も36.6%にとどまる。また、下から2位の学級への満足度は24.2%、担任への満足度も25.0%にとどまる。したがって、学級への不満と担任への不満とは結びついているように見える。

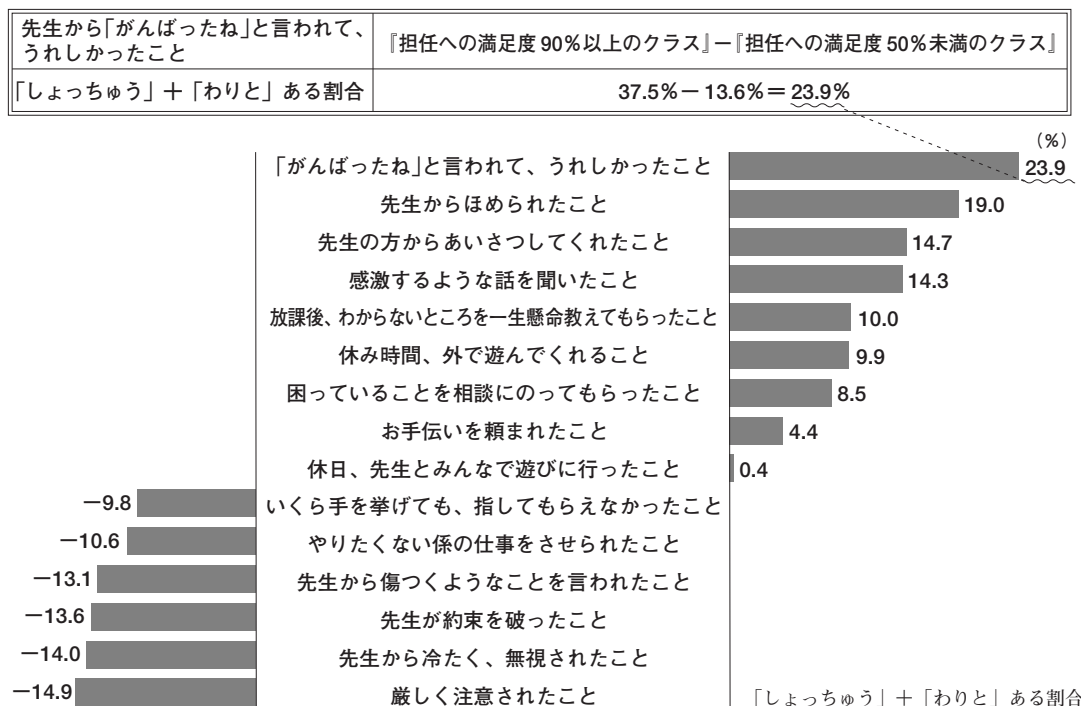
5. 教師の励ましが鍵

表3－3にみられたような学級による開きは、どうして生じたのか。詳しくは「子どもにとっての学級」(vol.16－3)、「学級担任と子どもたち」(vol.14－6)を参照してほしいが、そうした中で、参考になるのが、図3－1の結果であろう。この図は、担任のどうい

う行動が、子どもからの満足度の高い学級と高くない学級との差を生み出すのかを示したものである。「しょっちゅう＋わりと」ある割合をみると「『がんばったね』と言われて、うれしかったこと」「先生からほめられたこと」「先生の方からあいさつしてくれたこと」「先生の方からあいさつしてくれたこと」

■図3－1 担任との接触 × 担任への満足度 (vol.14－6 図1)

(『担任への満足度 90%以上のクラス』－『担任への満足度 50%未満のクラス』)

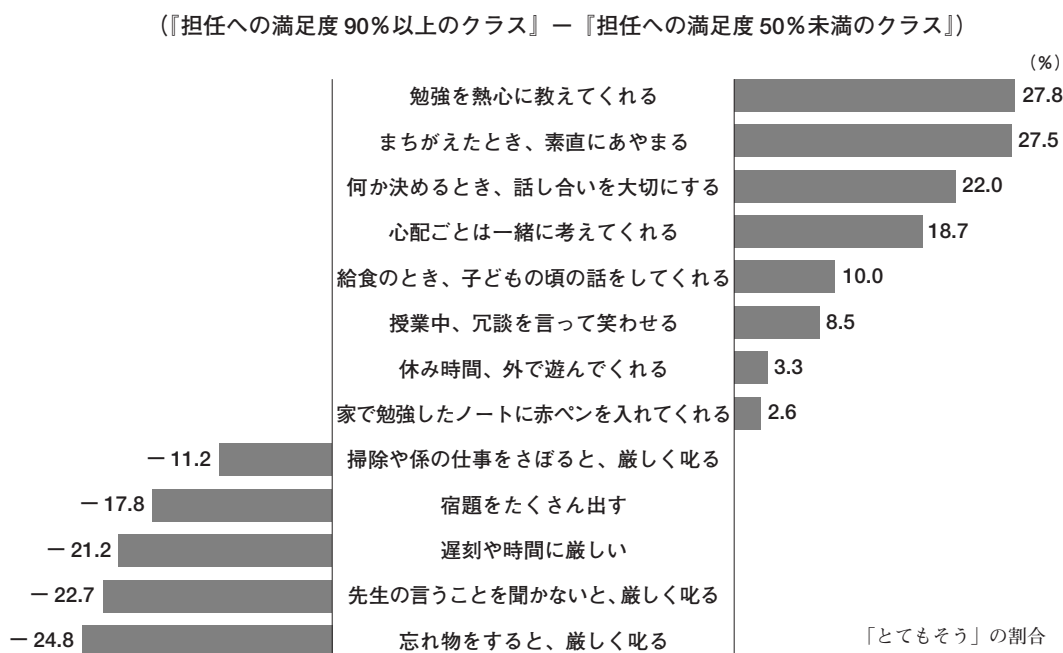


など、担任から人間味のある励ましの声をかけてもらえると、学級が楽しく明るくなるらしい。それに対し、「先生から冷たく、無視されたこと」「先生が約束を破ったこと」のある学級は楽しさに欠けるらしい。

また、図3-2は、子どもからの満足度が高い担任と低い担任との違いを示したものだが、「まちがえたとき、素直にあやまる」「何か決めるとき、話し合いを大切にする」など、

人間味のある魅力に富んだ教師だと子どもからの満足度が高い。こうしてみると、学校といっても、つきつめていうと、担任の持つ意味が大きい。そして、子どもを支える担任がいると、子どもが楽しい学校生活を過ごすことができる。そうした意味では、教師にとって学校は勉強を教える場であると同時に、人間性が問われる場であるように思われる。

■図3-2 担任の教師像 × 担任への満足度 (vol.14-6 図2)



〈この章で用いた号〉

深谷昌志・土橋稔・矢部崇・戸塚智・三枝恵子 (1995)「学級担任と子どもたち」vol.14-6

深谷昌志・三枝恵子・土橋稔 (1996)「子どもにとっての学級」vol.16-3

深谷昌志・島田美佐江・土橋稔・戸塚智・三枝恵子 (2000)「学校ってどんなところ? —子どもたちの学校評価—」vol.20-2

4

子どもとメディア

平野真穂

子どもの生育環境を変えた、最も大きな要因のひとつはメディアの発達である。この半世紀、子どもに関する悲惨な事件の報道と共に、メディアが子どもに与える影響が伝えられてきた。その中では主に、①対人関係の変化、②現実感覚の希薄さ、③情報過多やメディアの影響力の大きさなどが憂慮され、教育的配慮の必要性が述べられてきた。

実際のところ、メディアの発達に人間の営み（倫理や、心と体）が追いつかない面も見受けられる。本誌で取り上げたメディアをみても、電話・手紙、テレビ、まんが、ゲームウォッチ、テレビゲーム、マイコン、パソコン、電子手帳、携帯電話と急激に進化していったことがわかる。

同じメディアでもその役割や、社会的な意味は変化している。例えばテレビは、昭和30年代前半頃から家族団欒に役立ったが、保有台数の増加によって、家族が別々の番組を見るような状況も生まれている。テレビの機能も、視聴するだけでなく、他のメディアと組み合わせて能動的に活用できるものに変化しつつある。

そうした変化の中、子どもたちはメディアとどのようにつきあってきたのだろうか。

〈この章で用いた号〉

深谷和子・広森滋（1989）「電話・手紙」vol.9－8

深谷昌志・上杉賢士（1990）「子どもとまんが（2）」vol.10－2

深谷昌志・新井誠・広森滋・島田美佐江・鶴巻景子（1992）「テレビ」vol.12－1

田村毅・遠田瑞穂・中澤智恵・井上健・夏秋英房（1997）「子どもとメディア」vol.17－2

1. 長時間・多様化

子どもたちがテレビを見ている時間は相当に長いようで、1日に3時間以上テレビを見るという子どもは4割を超える【vol.12－1巻末集計表】。また、テレビゲームをはじめとした他のメディアも利用している【vol.17－2 図1－2】。

子どもたちはメディアを着実に受け入れて

きた。メディアが生活の一部になり、何かをしながらかを含め、接触時間は伸びてきているのであろう。メディアの種類をみてもテレビ・テレビゲーム・CD・ビデオ・パソコン・本・電話と多様になっている。これらのうち、何を使うかが生活環境志向によって分化している可能性も考えられる。

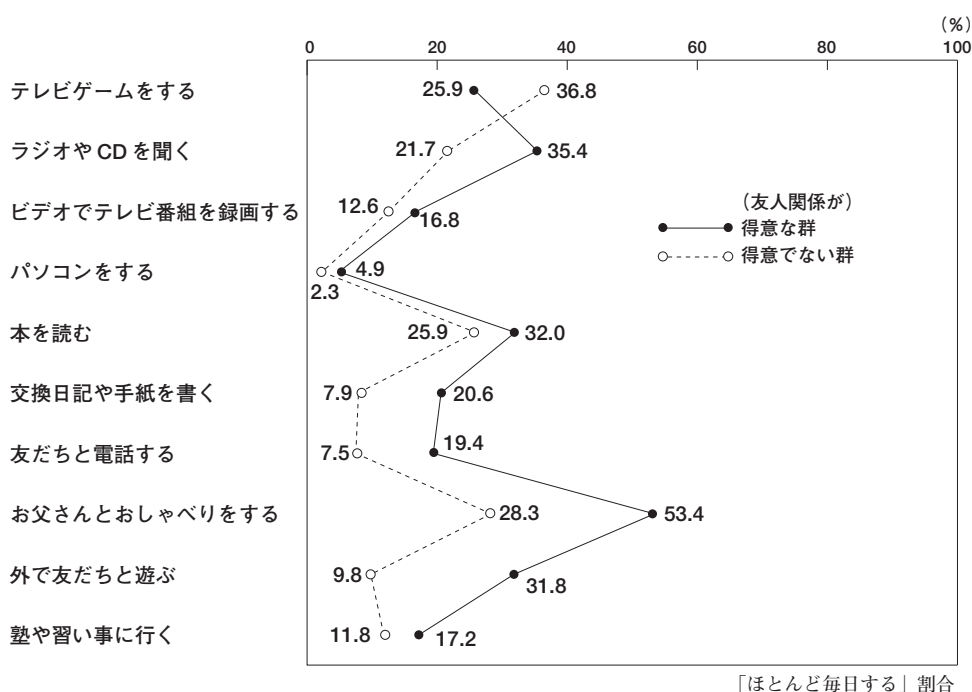
2. メディアとのつきあい方教育の必要性

図4-1で子どもの友人関係と直接および間接体験の関連をみると、「(友人関係が)得意な群」は、全てにおいて積極的にメディア体験についても例外ではないことがわかる。気になるのは「得意でない群」は「一日中、

ゲームをしたい」(「とても+少し」その割合)が5割で、人との接触が少なくなること懸念を感じる。まわりの働きかけが必要だろう(表4-1)。

子どもたちは好奇心旺盛で、新しいものの

■図4-1 子どものメディア体験 × 友人関係 (vol.17-2 図4-1)



■表4-1 テレビゲームの遊び方 × 友人関係 (vol.17-2 表4-1)

	友人関係	
	得意な群	得意でない群
裏技やバグを見つけるのが好き	67.1	61.1
同じゲームを何度も繰り返しやって、すみずみまで知りつくしたい	58.1	57.7
ゲームネタの本やアニメを見るのが好き	56.4	56.3
キャラクターの性格や物語を想像するのが好き	50.7	43.7
一日中、ゲームをしたい	35.8	49.5

「とても」+「少し」その割合

受け入れがよい。しかしバランスのとれた成長をするためにおとなの配慮は必要だ。

メディアと一口に言っても、それぞれのメディアの特性により子どもにもたらす影響は異なる。まんがの好みや接触量が自己像に与える影響をみると、好みや接触量により、自己像が違ってくる【vol.10－2 表6・表7・表8】。共通しているのは、まんがと

の接触が少ない子が、学校生活を楽しんでいると感じ、家の手伝いをよくすることだ。接触が少ない子の家庭は、まんがに限らず教育的な配慮がなされているのかもしれない。まんがによく接する子は、学校以外の文化をより吸収しているために学校の楽しさを感じなくなっているのか、あるいは学校がつまらないからまんがに接するのだろうか。

3. 憂慮から配慮へ

子どもがメディアにどっぷり漬かっているかということ、そうでもない。図4－2で、自由な時間の使い方を聞くと、時間があれば外で遊びたいと思っている。もちろん外遊びの質もみていく必要があるが、外遊びへの願い

は持っている。しかし時間・場所・仲間が確保しにくくなっている。

加えて、手近に楽に遊べるメディアがあっても、「気持ちはあるが、動かない」状態にある子もいると思われる【vol.10－2 図9】。

■図4－2 自由な時間の使い方（30分と2時間の比較）（vol.10－2 図16）

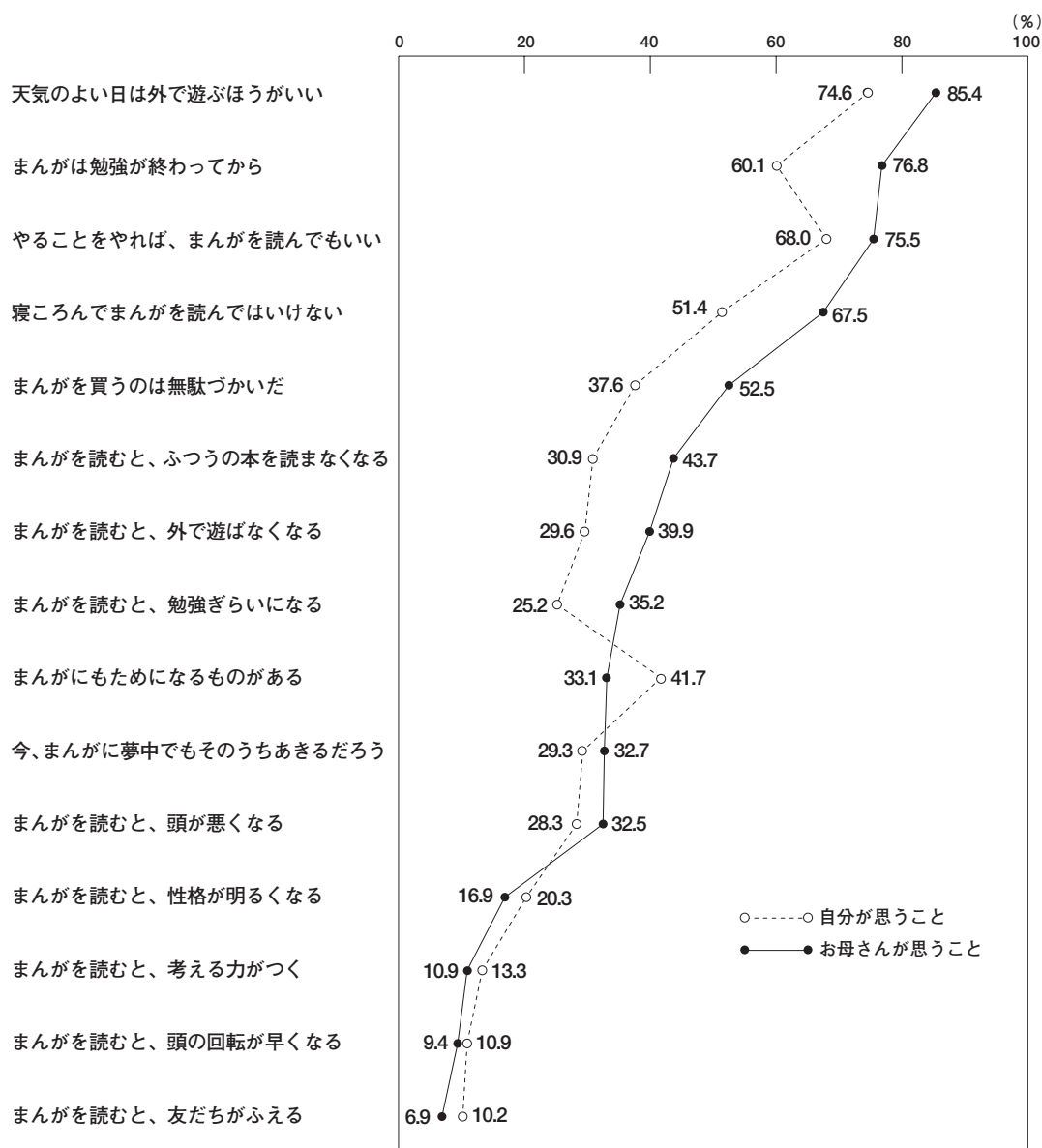


図4-3は親子の意見のずれを示しているが、お母さんが思うことをよく汲み取っているとも読めるが、テレビ視聴のきまりは、あまりないようである【vol.12-1 図30】。

家庭から社会に目を移しても、子どもの発達のバランスを十分考えたメディア環境になっ

ているとはいえない。メディアの発達はいくらも進み、おとなも対応に苦勞するだろう。しかし、未来を託す存在である子どものメディア環境をどうするか。もっと子どもに、具体的に働きかけられるようにしたい。

■図4-3 親子の意見のずれ (vol.10-2 図13)



「とても」＋「わりと」そう思っている割合

4. 研究の成果と課題

「新しいメディアの登場により子どもの生育環境が…」という文言を聞いて久しい。確かに、登場するメディアは毎回変わるが、生活の中に入っていく順序は似通っている。先駆的な層が受け入れ、どのようなものか調査をしているうちに、一般化し、次のメディアが登場する頃には先のメディアは「ふつう」の家電として家庭に収まっていく。

「小学生ナウ」でも戸惑いながら、手探りでメディアが子どもの生育環境に与える影響の調査を続け、実態把握に努めてきた。

その結果、①実態をタイムリーに捉え、②メディアの影響による子どもの変化を、「子ども社会」すなわち周囲の関係の中で捉え、③メディアの特性や受け手の子どもによって受ける影響が違ふことを具体的に示してきた。

課題として、①調査間の関係がみえにくく、他のメディアとの比較をしにくい。②調査間の連続性がみえにくく、同一メディアでも時

系列を追いにくいといったこともみえてきた。もちろん調査票で同一の言葉を用いても、社会の変化が激しいので単純に比較をすることはできないという問題もある。それは、折々のテーマについての報告書という「小学生ナウ」の性格上からくるものであろう。

子どもへの配慮が進まない原因を考えると、次のようなことが思い浮かぶ。①メディアに子守をさせると楽なため、無条件・無制限にメディアに接触させてしまう。②メディアが「簡単・便利・おもしろい」という消費社会の価値観を具現しており、親の世代もこの価値観を享受している。また、つい「子どもがゲーム好きで困る」と言い、我が身を振り返ることから逃げてしまいがちである。メディアの便利さや利点をうまく活用しながらも消費社会の悪影響から子どもを守ろうと思うならば、おとながメディアとの接し方を振り返ることも必要だろう。

5

学校と学力

石川芳子

完全学校週5日制が実施されて2年が過ぎた。完全学校週5日制は、子どもたちの生活に何をもたらしたのだろうか。学校は5日間という短縮された生活の中で、「総合的な学習の時間」の導入などを背景として、教科の学習時間が大幅に減少し、学力の低下が大きな教育問題となっている。そのため、学習の基礎・基本をどこで保障していくか、学校はそれぞれ知恵を絞って授業を増加し時数の確保に努めたり、漢字・計算を重視した「15分学習」を取り入れたりなど、苦慮している。

そのような状況の中で、子どもたちは完全学校週5日制の実施でゆとりを持った生活や勉強をしているのだろうか。また、子どもたちにとって学校は居心地のよいところとなっているのだろうか。この章では、学校と学力を中心に考えてみる。

〈この章で用いた号〉

深谷昌志・三枝恵子・土橋稔・鶴巻景子（1998）「学校の『居心地』を考える」vol.17-3

深谷昌志・夏秋英房・土橋稔・三枝恵子（2003）『『完全学校週5日制』と小学生』vol.23-1

深谷昌志・土橋稔・戸塚智・三枝恵子・夏秋英房・木村治生（2004）「小学生にとっての『勉強』」vol.24-1

1. 子どもにとっての「勉強」

「完全学校週5日制」「総合的な学習の時間」などの導入による教科の時間の減少。学力低下が叫ばれる中、子どもたちは、「勉強」についてどう考えているのかを5、6年生に調査している。

1) 勉強する意味とは

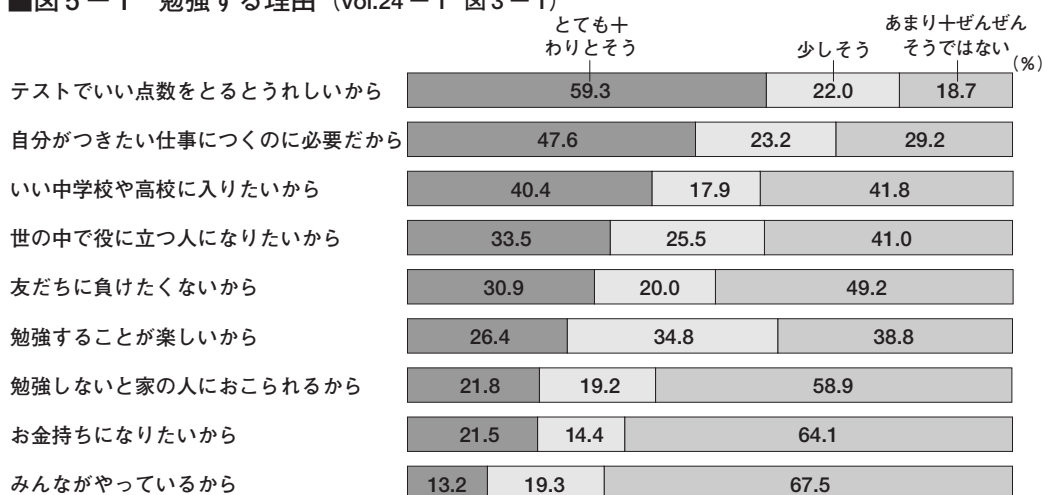
勉強する理由として図5-1を「とても十わりと」その割合でみると、「テストでいい点数をとるとうれしいから」が最も多く、次に、将来の仕事や中学・高校への進学、世の中の役に立つこと、友だちに負けたくないから、勉強することが楽しいから、と続いで

いる。成績にこだわる子どものすがたがみられるが、勉強することに自発的な意味も見いだしている。

2) 将来必要な力とは

現在の勉強が将来どのように役立つと思っているのかを尋ねてみると、表5-1 (vol.24-1の表1-14を「とても必要」の割合でまとめたもの) の通りである。子どもたちは、進学や就職には、計算力や文章問題を解く力などの算数の学力が必要だと考えている。社会で活躍したり、幸せな家庭を築くためには、漢字を書いたり文章を読む力を必要としている

■図5-1 勉強する理由 (vol.24-1 図3-1)



■表5-1 将来必要な力 (vol.24-1 表1-15)

	難しい漢字を書いたり、文章を読んだりする力	難しい計算をしたり、文章問題を解いたりする力	「総合的な学習の時間」に学んだことで身につく力	ピアノを上手に弾いたり、うまい絵を描いたりする力	速く走ったり、鉄棒をうまくやったりする力
望みの高校や大学へ入学する	②45.9	①58.3	③27.4	19.8	21.7
つきたい仕事につく	②42.7	①45.1	③31.7	23.2	22.0
社会で活躍する	①38.2	②37.1	③33.2	16.5	18.0
幸せな家庭を作る	②29.7	③29.4	①34.6	19.8	17.1

「とても必要」の割合
①②③は順位

る。同時に「総合的な学習の時間」に学んだことが「とても必要」と答えた子は3割を超える。一方、芸術や体育の力は、高校や大学進学、就職、社会での活躍、幸せな家庭を作る

ために、あまり必要とは思っていないようである。将来必要な力とは、算数や国語などの基本的な力だと思っている子どもたちが多い。

2. 居心地のよい学校

学校は、子どもたちにとって居心地のよい場所でありたい。学校がどれだけ居心地のよい場となっているのか、小学校6年生に尋ねている。

1) 子どもたちがホッとする場所

学校の中のどの場所が、子どもたちの居心地のよい場所になっているかをみると、「とてもホッとする」場所は「図書室」38.2%、

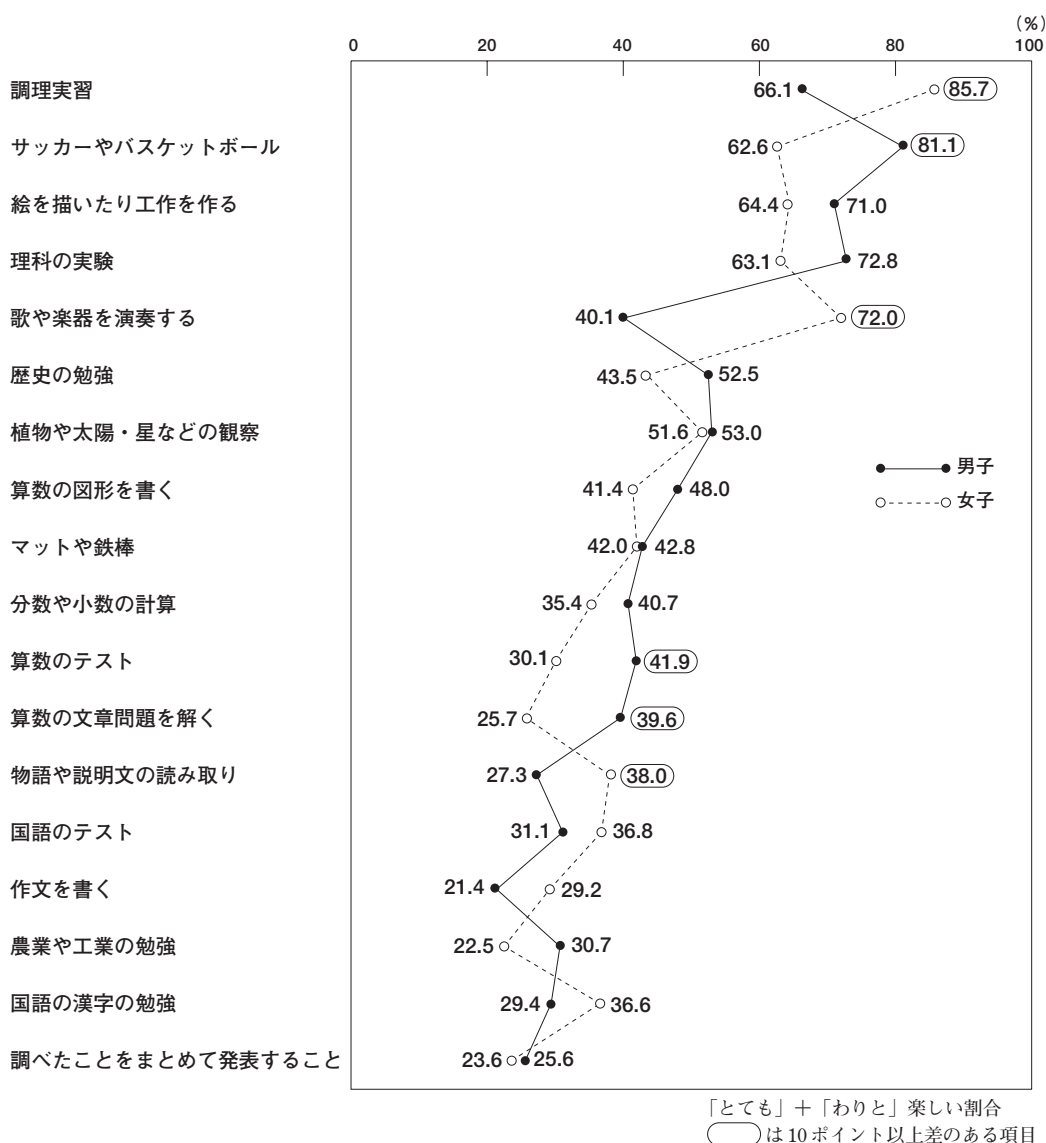
「屋上」31.6%、「飼育している動物のそば」26.4%、「校庭や体育館」23.7%、続いて「保健室」15.9%、「図工室などの専科の教室」14.0%である。「教室」がホッとできる場所と感じる子どもは、「とても十わりと」ホッとするを合わせても43.1%、「とても十あまり」落ち着かない子どもも17.0%いる【vol.17-3 図4】。

2) 学習の楽しさ

子どもたちにとって楽しい学習は、1位「調理実習」が「とても楽しい」52.8%、2位「サッカーやバスケットボール」52.4%で、「わりと楽しい」を合わせると7割を超える。逆に、「ぜんぜん楽しくない」学習は、「調べたことをまとめて発表すること」「算数のテスト」「算数の文章問題を解く」などである【vol.17-3 表2】。また、図5-2の性別でみると、「サッカーやバスケッ

トボール」「算数の文章問題を解く」「算数のテスト」などは男子が、「調理実習」「歌や楽器を演奏する」「物語や説明文の読み取り」などは女子の数値が高く、男女差が顕著である。子どもたちは、実際に体を動かして活動する学習に楽しさを感じていることがわかる。学校を楽しいものにするためには、子どもの活動性を高めていく学習が必要なのかもしれない。

■図5-2 学習の楽しさ × 性 (vol.17-3 図7)



3. 完全学校週5日制で変わったこと

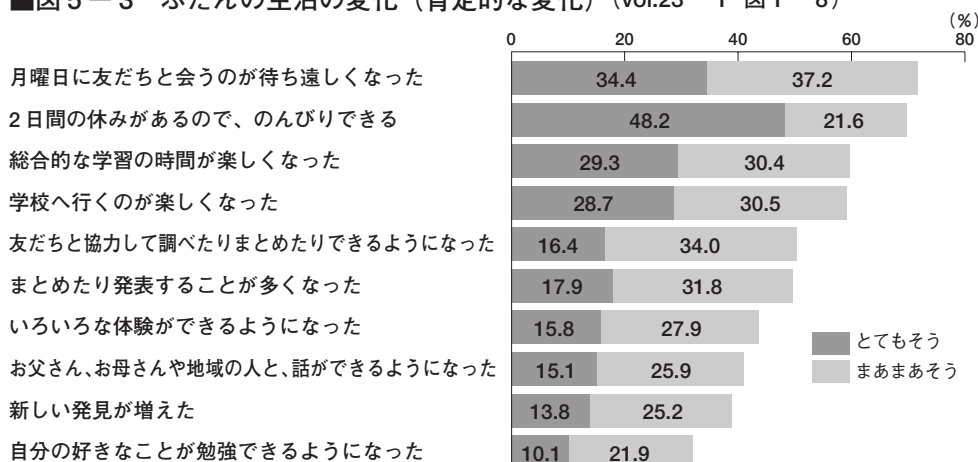
完全学校週5日制の導入により、子どもたちの学習や生活は変化したのだろうか。子どもと親にとって、完全学校週5日制でよかったことや困ったことは何かを尋ねている。

1) ふだんの生活の変化

「土曜日が休みになって、ふだん、学校がある日で変わったことはありますか」と尋ねたところ、肯定的な回答として図5-3をみ

ると、「とても十まああ」その割合では「月曜日に友だちと会うのが待ち遠しくなった」「2日間の休みがあるので、のんびりできる」の回答が約7割であった。一方、否定的な回答として図5-4をみると、「学校から遅く帰るようになって、疲れるようになった」「授業の時間が増えて、大変になった」が5割を超えている。

■図5-3 ふだんの生活の変化（肯定的な変化）（vol.23-1 図1-8）



■図5-4 ふだんの生活の変化（否定的な変化）（vol.23-1 図1-9）

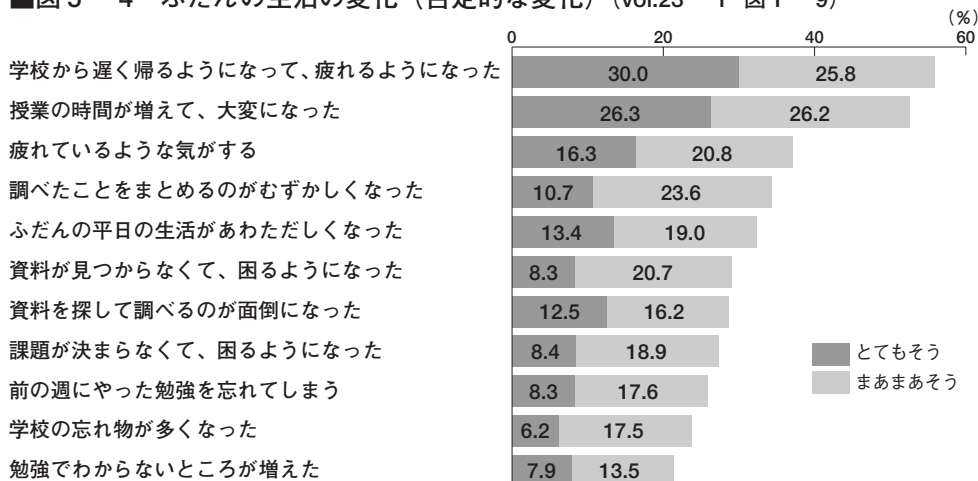


表5－2は、ふだんの生活の変化と成績の自信をみている。成績に自信のある子は、日頃の学習に能動的に取り組んでいる様子がみられるが、成績に自信のない子は、学習についての困難を訴えている。また、「課題が決まらなくて、困るようになった」「資料を探して調べるのが面倒になった」など学習活動の入り口でのつまずき傾向も現れている。生活面においても「学校の忘れ物が多くなった」など影響が出ている。日頃の勉強への自信の差が、土曜日の過ごし方の質に格差をもたらしているといえよう。

2) 完全学校週5日制でよかったこと・困ったこと

土曜日が休みになったことでよかったことがあったのか、困ったことの方が多かったのか、親たちに尋ねている。表5－3によれば、下段の否定的な項目では「テレビを見たりゲームをする時間が増えて心配」と答えた親が最も多く、「とても十わりと」そう思う割合で50.7%と半数を占める。次に、「ごろごろしていることが多く心配」34.5%、逆に肯定的な項目では、「子どもと過ごす時間が増えて、子どもの新しい面を発見できた」と答え

■表5－2 ふだんの生活の変化 × 成績の自信 (vol.23－1 表1－6)

		成績の自信 (%)			
		よくできない (あまり十ぜんぜん)	どちらとも いえない	よくできる (とても十まあまあ)	
総合的な学習の時間が楽しくなった	52.2	<	58.3	<	65.4
まとめたり発表することが多くなった	39.9	<	48.7	<	55.9
お父さん、お母さんや地域のひとと、話ができるようになった	31.9	<	41.1		45.3
自分の好きなことが勉強できるようになった	23.9		28.2	≪	40.5

授業の時間が増えて、大変になった	62.1	>	54.3	>	46.3
前の週にやった勉強を忘れてしまう	46.3	≫	27.9	≫	12.0
調べたことをまとめるのがむずかしくなった	46.2	>	37.8	≫	23.9
勉強でわからないところが増えた	41.4	≫	22.2	≫	9.0
学校の忘れ物が多くなった	38.8	≫	21.1		18.7
資料を探して調べるのが面倒になった	38.5	>	30.4	>	21.9
課題が決まらなくて、困るようになった	36.6	>	30.7	≫	19.3

「とても」＋「まあまあ」そうの割合
 <は5ポイント、≪は10ポイント以上の差

た親が30.9%もいる。完全学校週5日制で心配な面もあるが、子どもと接する時間が増え、親子関係にプラスの効果を与えていることも注目できる。

3) 完全学校週5日制と子どもたちの「力」

親に「今後、計算力や文章表現力などの子どもたちの『力』はどのように変化するのか」を予測させている。「計算力」「文章表現力」「読書量や読解力」が「大幅に＋わりと」低下すると答えた割合は6割を超えている。一方、「友だちや他人を思いやる気持ち」「集団

としてのモラル（道徳性）」「ゲームや学習を計画実践する力（企画力・実行力）」「基礎的な運動能力」は、6～7割が「変わらない」と答えている。また、向上する「力」の予想は、「わりと＋大幅に」向上する割合が一番多い「友だちや他人を思いやる気持ち」でも2割にも満たない。それ以外の項目も、向上することが期待できないようである【vol.23－1 表3－19】。

完全学校週5日制による子どもたちの「力」の向上には、悲観的に考えている親が多いようである。

■表5－3 土曜日が休みになったことで、よかったことや困ったこと
(vol.23－1 表3－15)

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない	(%) (通って いない)
子どもの自由時間が増えてよかった	8.3	39.4	37.6	14.7	—
	47.7				
子どもと過ごす時間が増えて、子どもの新しい面を発見できた	3.8	27.1	52.4	16.7	—
	30.9				
土曜日は塾やおけいごとと、日曜日は休養に使えるのでよかった	3.4	14.1	23.9	10.6	48.0
	17.5				
土曜スクールなどに生き生き通っているので安心できる	0.7	4.4	7.2	3.6	84.0
	5.1				
テレビを見たりゲームをする時間が増えて心配	17.3	33.4	32.3	17.0	—
	50.7				
ごろごろしていることが多く心配	9.3	25.2	42.7	22.8	—
	34.5				
塾やおけいごと、スポーツクラブで家計の負担が大きい	7.5	13.0	28.1	10.2	41.2
	20.5				(共働きでない)
土曜日も両親共働きなので、子どもだけで家にいるのが不安	9.0	10.8	14.8	6.9	58.4
	19.8				
おけいごとや塾に依存することが多くなった	4.1	9.1	17.9	14.3	54.5
	13.2				

6

地域と放課後

夏秋英房

完全学校週5日制が導入され、新たなカリキュラムが実施されたことにより、子どもの休日や放課後の過ごし方と地域社会との関係は、この10数年の間に大きく変化した。本章ではその様相を捉えたい。

〈この章で用いた号〉

深谷昌志・土橋稔 (1984) 「学習塾」 vol.4－8

深谷和子・矢部崇 (1990) 「地域の教育力」 vol.10－7

深谷昌志・土橋稔 (1991) 「休日」 vol.11－7

深谷昌志・土橋稔・戸塚智・矢部崇・三枝恵子 (1992) 「子どもと家庭学習」 vol.11－11

深谷昌志・土橋稔・三枝恵子 (1996) 「学習塾」 vol.15－6

深谷昌志・戸塚智・島田美佐江・夏秋英房・三枝恵子 (2002) 「子どもの放課後」 vol.21－3

深谷昌志・土橋稔・戸塚智・三枝恵子・夏秋英房・木村治生 (2004) 「小学生にとっての『勉強』」 vol.24－1

1. 学校週5日制導入前の子どもの休日と地域

1) 生活リズム

首都圏の小学校5、6年生を対象に、学校週5日制実施前の1991年に休日の過ごし方を調べている (vol.11－7)。それによると、68.1%の子どもが休日に家庭で勉強をしており【vol.11－7 図5】、午前10時頃と午後8時すぎに勉強をしている子どもが多い【vol.11－7 図6】。また、5年生の1学級38名の日曜日の生活記録をもとに、7つのタイプ（外遊び型、室内遊び型、スポーツクラブ型、勉強型、テレビ・ビデオ型、おでかけ型、ぼけ～型）に分類している【vol.11－7 資料1】。

日曜日に楽しいと感じるのは、「友だちと遊んでいるとき」「どこかに出かけるとき」「趣味のことをしているとき」であるが【vol.

11－7 図17】、「どこかに出かけたが」「ゆっくり過ごしたい」「早く起きて遊びたい」「ゆっくり寝ていよう」など、活動的に過ごしたいとの思いと休息したいとの思いが、ないまぜになっている【vol.11－7 図18】。

休日の過ごし方を左右するのは遊び仲間の少なさや塾通いである。調査時点での「昨日」の日曜日に遊ばなかった子どものうち、8割近くが休日に学校の友だちと遊ばず（「あまり＋ぜんぜん」）、2割以上が平日も友だちとほとんど遊ばない。また、2割近くが休日にも学習塾に通っている【vol.11－7 表9・表10】。

では、このような状態で休日を増やすことが子どもたちのためになるのだろうか。

2) 母親調査から

学校週5日制が導入されるには、子どもの「受け皿」として地域の教育力の再生が必要だという前提から、母親の目を通して地域のあり方を捉えようとした調査が1990年に実施

された（vol.10－7）。親の目は自分の子どもだけに向けられており、自分もまた地域の教育力の一端を担うものだという当事者意識を欠いているように思われる【vol.10－7 図29・図30】。

2. 学校週5日制導入後の放課後や休日の過ごし方と地域

首都圏の公立小学校4～6年生を対象とした2001年の調査（vol.21－3）では、完全学校週5日制実施を目前にして、子どもたちは放課後や休日をどのように過ごしているのかを探っている。

1) 学校週5日制導入後の暮らし

表6－1によると、平日は学習塾やおけいごとなど何らかの予定がある子どもが毎日4割以上いるため、子どもたちは十分に群れて遊ぶことが難しい。日曜日でさえ36.5%の子どもが何らかの用事をこなしている。学校週5日制の導入によってかえって子どもは忙しくなっている。学習塾に通っているのは全体の42.3%で、土・日に通う子どもはごく少数である。おけいごとやスポーツクラブに通っているのは全体の77.4%で、土・日に通うのは女子よりも圧倒的に男子に多い【vol.21－3 巻末集計表】。スポーツ少年団やクラブなどで活動するためであろう。

調査日の「昨日」の放課後の生活時間を尋ねると、塾やおけいごとなどに行っていた時間が「1時間半以上」の子どもが39.4%にのぼる反面、家で勉強した時間が「30分以下」の子どもが52.8%もいる。放課後の学習は、もはや塾ぬきでは考えられなくなっているようである。遊びについては、「2時間半以上」外で遊んだ子どもが18.4%いる一方で、「30分以下」の子どもが52.2%もいる。気象条件にも左右されるだろうが、遊び盛りの高学年の子どもにしては短いものである。一方、テレビやビデオを「1時間半以上」見る子どもは47.5%にのぼる【vol.21－3 表1－11】[※]。さらにテレビゲームもすることが多いとなれば、子どもの遊びは屋内で少人数の細切れになった形で展開されていることが推測される。

※vol.21－3 表1－11①～⑤の時間区分「2時間以上」→「2時間半以上」に訂正。

■表6－1 1週間の予定（vol.21－3 表1－2）

								(%)
	月	火	水	木	金	土	日	行っていない
学習塾	14.7	17.1	9.5	13.9	19.4	7.0	2.7	57.7
おけいごとやスポーツクラブ	23.7	26.4	31.1	30.6	22.6	32.8	25.9	22.6
予定なし	58.9	54.5	56.2	53.8	56.1	54.5	63.5	—

(複数回答)

2) 放課後の生活の充実のために

では、どうすれば子どもたちの放課後の生活をより充実させることができるのだろうか。

1つのヒントが表6-2にみられる。親が地域活動に参加し、また楽しそうに参加する場合に、子どもの地域体験が豊かになることがわかる。地域は単に物理的な空間として存在するのではなく、子どもにとって人間的なかわりによって意味づけられた空間でもある。したがって、自分の親の地域とのかかわり方が子どもの地域とのかかわりのモデルともなり、また地域体験の触媒となる。それはひいては子どもの地域への定住志向や愛着の

形成につながってくる。

また、地域の人との接触が子どもにとって具体的な地域体験となるのである。地域のおとなと互いに知り合ったり、あいさつを交わしたりする人数が多ければ、子どもは地域で過ごすときに楽しいと思い、元気になると感じている【vol.21-3 図3-9・図3-10】。

地域生活の充実には、子ども自身が豊かな遊び＝自由空間を持つことや、地域社会で様々な行事や活動が展開されていることと同時に、子どもとおとなが様々な形でかわり、関係を結んで地域を再構成することが必要であろう。

3. 家庭学習と塾通い

1) 受験する子としない子

まず、全国の小学校6年生3,034名を対象にした1991年の調査(vol.11-11)では、通塾率は43.6%であり、通信教育は18.7%の子どもが受けている【vol.11-11 図6・図7】。私立中学を「受験する」子どもは13.0%、「受験しない」42.9%、「決めていない」44.1%で

ある。通学可能な私立中学が「ある」割合は65.2%であった【vol.11-11 図10・図12】。

私立中学を受験する子どもとしない子どもを対比させると、平日に学習塾に通っている回数は、受験しない子どもは、週3回までに9割近くが集中していて、平均2.36回であるのに対して、受験する子どもは週4回以上が

■表6-2 地域での体験 × 親の地域活動へのかかわり (vol.21-3 表4-8)

	親の地域活動への参加		親の地域活動の楽しさ		
	参加群	不参加群	楽しそうな群	どちらでもない群	楽しそうでない群
町内でする運動会やお祭りに参加した	59.4	33.8	57.5	41.7	34.7
近所の赤ちゃんに声をかけた	35.3	24.7	39.3	24.9	23.4
近所の家で夕飯を食べた	25.3	18.0	28.3	17.2	19.4
「かわいい子だね」とおとなから声をかけられた	22.9	18.2	25.3	17.7	17.1
近所のおとなとスポーツをした	20.1	13.1	22.7	12.2	14.4
いたずらをして、知らないおとなから叱られた	9.4	8.0	8.8	6.8	16.7
お年寄りの荷物を持ったりして助けた	9.4	5.1	11.3	4.7	4.6

(%)

「何度もある」割合 ———は最大値
<5ポイント以上 <<10ポイント以上の差

*親の地域活動への参加状況

参加群 「とてもよく+わりと参加する」
不参加群 「あまり+まったく参加しない」

*親の地域活動の楽しさ

楽しそうな群 「とても+わりと楽しそう」
どちらでもない群 「どちらともいえない」
楽しそうでない群 「あまり+ぜんぜん楽しそうでない」

4割近くもいて平均3.25回である【vol.11－11 表38】。これにさらに休日にテストや補習があることを考えると、受験する子どもは学習塾漬けの状態であることが推測される。

表6－3にみられるように、受験する子どもは、よい中学校や高校へ行くために、また将来つきたい仕事につくためや幸せな生活を送るために勉強するといった明確な目標がある。だから睡眠をとることやテレビやまんがをがまんし、計画を立てて自発的に勉強している割合が高い【vol.11－11 表43・表44】。ただし、受験する子どもは「なんとなく疲れやすい」「朝、なかなか起きられない」などの体の不調を訴える傾向がある【vol.11－11 表47】。受験に動機づけられてハードに学習に取り組む子どもたちや、勉強に自信が持てずに暗い未来を予感してやる気を喪失し、体の不調を訴える子どももいるのであろうか。

2) 学校と塾を比べて

学校と、進学塾・補習塾に行っている子どもの評価を図6－1の1995年のデータでみると、「友だちと話す楽しさ」が8割弱、「通う楽しさ」ではほぼ6割前後の子どもが学校の方を選んでいる（「ぜったい十かなり」学校の割合）。

しかし、授業の楽しさや教え方のうまさ、授業のわかりやすさとなると、数値が拮抗するか、塾が優位に立っている。進学塾に通う子どもの6割以上が、塾の先生の方が教え方がうまく、授業がわかりやすいという。また、補習塾に通う子どもの中にも、塾の先生の方が教え方がうまく、授業がわかりやすいと答えている子どもが4～5割いる。

これより11年前の1984年の調査(vol.4－8)では、調査対象に4年生が含まれるなど条件が異なるとはいえ、「先生の教え方が上手」や「勉強がおもしろい」では、学校の方が塾よりも圧倒的に支持されていた【vol.4－8 図20】。それから10年の間に、進学塾に通う子どもの多くにとって学校の魅力が低下して、また、補習塾に通う子どもも学校に満足できない割合が増えてきたようである。それからさらに10年経って、新しい学力観のもと、「生きる力」の育成とともに「個に応じた指導」を標榜して変革を進めてきた学校教育は、このような「学校ばなれ」の現象に歯止めをかけることができたのだろうか。

2001年の調査をみると、学習塾に通っているのは全体の42.3%で【vol.21－3 表1－2】、特に土・日に学習塾に通う割合は、4年生

■表6－3 勉強する目的 × 受験 (vol.11－11 表45)

	(%)		
	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
中学受験のため	73.6	>	3.2
行きたい高校に行くため	62.1	>	39.5
将来つきたい仕事につくため	59.9	>	44.5
将来幸せな生活を送るため	59.3	>	42.2
友だちに負けたくないから	55.9	>	35.0
両親にほめられたいから	28.0		24.6

「とても」＋「かなり」その割合

4.4%、5年生10.6%、6年生14.8%と学年が上がるにつれて増加する【vol.21-3 巻末集計表】。また、学習塾の楽しさを尋ねると、通っている子どもの7割以上が学習塾は楽しいと答えている【vol.21-3 図2-4】。

3) すすむ勉強ばなれ

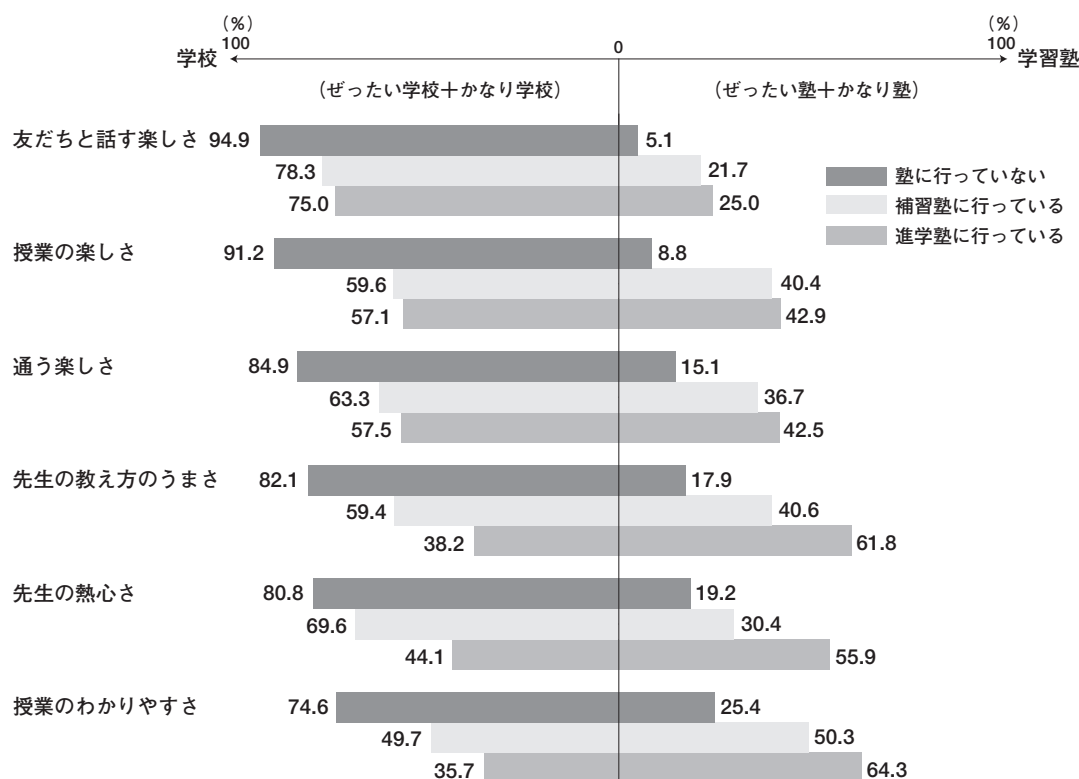
学習塾やおけいこごとが楽しい理由（「とても十わりと」そう思う割合）は、「新しい友だちが増える」77.2%、「得意なことが増える」75.3%、「勉強がわかったり、運動ができるようになる」74.4%など、学習塾やおけいこごとに積極的な意義を見いだしている子どもが多い【vol.21-3 図2-5】。

1991年のデータ（vol.11-11）と2003年のデータ（vol.24-1）とで6年生を比較してみよう。調査対象地域など条件の違いはあるが、「学校が楽しい（とても十わりと）」とい

う子どもは1991年の75.1%から2003年の65.0%に減少している。また、「家庭での1日の勉強時間」は、1991年には「30分以下（「30分くらい」も含む）」が24.5%、「2時間以上」が26.3%であったのが、2003年には「30分以下」が53.6%、「2時間以上」が12.1%へと著しく短縮している。その分、塾通いが増加しているわけではない。また、完全学校週5日制の導入やカリキュラムの大幅な改訂にもかかわらず小学生が勉強をする動機にはあまり大きな変化がなかった【vol.11-11・vol.24-1 巻末集計表】。

「楽しくなければ学校ではない」と言いながら、かえって学校は楽しくなくなり、また家庭では勉強をしなくなっている。小学生の学校ばなれが意識のうえで広がっただけではなく、勉強ばなれまでもが進んでいるとさえ言えそうである。

■図6-1 学校と塾のどちらが× 非通塾者・補習塾・進学塾（vol.15-6 図17）



7

養護教諭

斎藤浩子

保健室の役割が重要性を増している。かつては子どもたちのケガや病気など、身体のケアにあたる、いわば学校看護師的な仕事が期待されていたのだが、最近では心のケアが必要な子どもたちやクラスという集団の中で長時間過ごすことに耐えられなくて、避難場所が必要な子どもたち、息抜きやおしゃべりを楽しみたい子どもたちなどが、保健室を利用するようになってきた。ただし、学校によって、または養護教諭によっては、本来の目的（身体のケア）以外に利用されることを好ましく思わない場合もあって、子どもが足しげく出入りする保健室と、そうでない保健室とがある。

「小学生ナウ」では1991年と2000年の2回にわたって全国調査を行った。とりわけ2000年には新しい保健室の役割として、保健室登校、被虐待児の発見に養護教諭が果たしている役割をも探っている。

〈この章で用いた号〉

深谷和子・船越恵子（1991）「養護教諭」vol.11－9

深谷和子・斎藤浩子・及川研・岡村克志・吉野真弓・鈴木綾子（2001）「心のケアワーカーとしての養護教諭－10年後の全国調査－」vol.20－3

1. 保健室に来る子

どんな子が保健室に来室するかを尋ねたところ、表7－1の「たくさん来る」割合をみると、身体の問題で来室する子（「身体の弱い子（虚弱な子）」）は4番目で、「何の問題も持たない子」「情緒の不安定な子」「授業に耐えられない子」など、心の問題で来室する子が上位を占めており、保健室が広く心の相談室の役割まで果たす場所であることがみえてくる。「たくさん＋少し」来る割合をベテ

ランと若い養護教諭と比較すると、ベテランの方が、「何の問題も持たない子」以外の項目で心の問題でも身体の問題でも子どもの来室数が多い【vol.20－3 表2－11】。

子どもが相談室機能を求めて来室するときの相談内容を、1991年と2000年で比較して表7－2に示した。「友だちのこと」「先生のこと」「家族のこと」「性格のこと」を相談する子が増えている。

■表 7-1 保健室にはケガや病気以外にどんな子が来るか(vol.20-3 表2-10)

(%)

	たくさん 来る	少し 来る	あまり 来ない	ほとんど 来たことがない
何の問題も持たない子	32.2	38.6	14.4	14.8
情緒の不安定な子	19.9	52.4	11.0	16.7
授業に耐えられない子	13.5	42.7	15.1	28.7
身体の弱い子(虚弱な子)	13.2	51.1	15.0	20.7
不登校傾向のある子	8.6	40.8	18.6	32.0
学習障害・注意欠陥多動性障害の子	7.3	24.6	22.9	45.2
キレやすい子	4.2	29.1	30.0	36.7
いじめにあっている子	3.3	38.2	27.4	31.1
非行化傾向のある子	2.9	21.0	23.0	53.1
親から虐待されている子	1.0	13.6	15.2	70.2

■表 7-2 子どもの相談内容(1991年との比較)(vol.20-3 表2-13)

(%)

		よく ある	ときどき ある	よく十 ときどきある	たまに ある	ほとんど ない
友だちのこと	1991年	7.7	28.9	36.6	47.1	16.3
	2000年	23.1	37.1	60.2	28.3	11.5 ***
先生のこと	1991年	3.7	13.0	16.7	41.1	42.2
	2000年	14.2	28.5	42.7	32.6	24.7 ***
家族のこと	1991年	0.8	9.0	9.8	34.9	55.3
	2000年	4.5	25.1	29.6	36.5	33.9 ***
性格のこと	1991年	1.1	12.0	13.1	29.6	57.3
	2000年	3.3	20.7	24.0	32.0	44.0 ***
勉強のこと	1991年	3.6	15.5	19.1	36.7	44.2
	2000年	2.5	20.2	22.7	34.0	43.3
身体のこと	1991年	—	—	—	—	—
	2000年	28.6	37.6	66.2	25.5	8.3
学校に行きたく ないこと	1991年	—	—	—	—	—
	2000年	6.3	23.3	29.6	30.2	40.2

*** P<0.001

2. 運営の方針と自己評価

保健室で子どもが甘やかされて困るという担任の声も聞くが、子どもに対して、教室とあまり変わらない扱いをしている者とわりと自由にさせている者とが半々であり、極端に自由にさせていることは少ない。養護教諭と担任との態度の差は思ったより少ないのかもしれない【vol.20－3 表4－2】。

一般教諭（担任）と自分（養護教諭）とを比べて、1991年と2000年とで「とても十どち

らかといえば」その割合を比較してみると、「悩みなどを話しやすい」「子どもにやさしい」と積極的な自己評価をする者が2000年で増加しており、また「教育問題への知識が不足している」「人間の幅が狭い」と低く自己評価する者は減少している。養護教諭が近年、自信を持ちはじめたことがわかる【vol.20－3 表4－1】。

3. 保健室登校の実態

近年新しく加わった不登校の子どもへの保健室対応は、教室に入れない子どもを受け入れる場所としての役割であり、「保健室登校」と名づけられている。身体や心のケアを求めて出入りする子どものほかに、不登校寸前とも言い得る、教室に入れないで保健室にいる子どもを抱えて、養護教諭はどうしているのだろう。

まず、「保健室登校児」を抱えている保健室は意外に少なく5.7%である。「過去にいたが、現在はいない」が38.9%、「現在・過去ともいない」が55.4%である【vol.20－3 図3－1】。

保健室まで来られる子ども以外にも、学校には家でひきこもり状態になっている子、また適応指導教室やフリースクールなどへ行っている子もいるのであろう。

また表7－3によると、保健室登校児の在室期間は様々で、長い子は4年以上という場合もある。

平均来室日数は、毎日保健室登校をする子は6割弱で、あとは週1日から5日まで様々である【vol.20－3 図3－5】。なお、保健室登校をしている子は6年生が抜きん出て多い【vol.20－3 図3－4】。

■表7－3 保健室登校児の在室期間（vol.20－3 表3－2）

（％）						
1か月未満	1～3か月	3～6か月	6か月～1年	1～2年	2～4年	4年以上
14.3	10.7	21.5	14.3	17.9	14.3	7.0

平均在室期間 1年5か月

4. 被虐待児の発見

医師と教師は、親から虐待を受けている子を発見しやすい立場にいる。教師の中でも比較的養護教諭は、身体的虐待をよく発見できる立場にある。2000年の調査ではその点を見ている。27.3%が虐待を受けている子を発見したことがあり（図7-1）、そして、年齢の高い養護教諭ほどその割合が高い（表7-4）。長期間の経験があれば発見数が多いのは当然だが、よくみると若い世代はそれほど長くない在職年数にしては発見したことがある割合が高いこともみえてくる。また、研究会に所属しているかどうかによって、被虐待児の発見の有無をみると、所属している方が専門的な知識を持っているため、発見しやすい傾向がみられる（表7-5）。被虐待児に関する世の中の注意が喚起されて、教師が子どもを見る構えが違ってきているのかもしれない。

また、vol.20-3には養護教諭による自由記述が多数収録されているが、ある50代の養護教諭は、こう書いている。

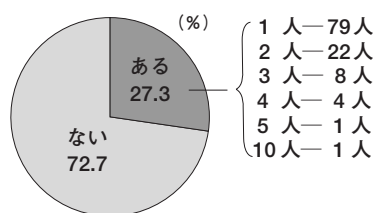
お母さんが夜中に2～3時間しかいなくて、

食べるものもあまりなくて、朝食は食べてこない、衣服もめちゃくちゃで寒さに震えている子もいた。直接虐待する親は少ないと思うが、育児放棄の数がどんどん増加していると思う。普通の子の多くが親とのスキンシップが少なすぎて（赤ちゃんのとき、まったく抱かないお母さんもいる）、学校で甘えるため、指導の時間の多くを母親役・父親役で取られているのが実状である。

またこの号には、第Ⅱ部として「最近の子どもと保護者について気になること」の自由記述も多数収録されている。

養護教諭は1991年から2000年の10年間で、いっそう心身にわたる相談教諭としての性格を強め、校内では他の校務分掌をも担うなど多忙さを増している。また、保健室登校のケアや被虐待児の発見の対応など、従来になかった新しい役割を担うようになってきている。このような状況を考えると、子どもの心身両面にわたるケアスキルを持った力量ある養護教諭の育成と、大規模校を中心にその複数配置の制度が今後望まれる方向であろう。

■図7-1 被虐待児に気づいたこと・その内訳（vol.20-3 図3-6）



■表7-4 被虐待児に気づいたこと
× 養護教諭の年代
(vol.20-3 表3-7)
(%)

	ある	ない
20代	21.6	78.4
30代	23.2	76.8
40代	31.1	68.9
50代	37.9	62.1

■表7-5 被虐待児に気づいたこと
× 研究会への所属
(vol.20-3 表3-8)
(%)

	ある	ない
所属している	32.7	67.3
所属していない	22.0	78.0

8

食生活

熊澤幸子

外食産業の繁栄で、食べ物をいつでもどこでも簡単に口にすることができる時代になったが、他方では孤食、多食、過食、食事内容の偏りを中心とした食生活の乱れ、食べ物の安全性への懸念、食事マナーの乱れなど、食をめぐる状況は混乱状態にある。そして食事は単に栄養摂取の観点だけではなく、心理的満足や人とのコミュニケーションの観点からも、問題にしなければならない。「小学生ナウ」で扱った子どもと食に関する調査を紹介する。

〈この章で用いた号〉

深谷昌志・土橋稔・三枝恵子（1994）「子どもと食生活」vol.13－6

深谷昌志・石川洋子・鶴巻景子・川上道子（1996）「おやつ」vol.16－2

1. おかずの好き嫌い

まず、表8－1で食べ物の好き嫌いをみていく。子どもの好きなおかずのベスト3は、「ハンバーガー」「フライドチキン」「焼き肉」であり、洋風のおかずが好まれている。西洋化した食事が健康面から憂慮されているが、次に述べるような伝統食を作る母親はいる。

しかし、子どもは母親の気持ちは感じていても好みではないようで、伝統食は表の最下部にずらりと並んでいる。かろうじて「すし」が4位に来ているが、日常食ではない。将来の生活習慣病の予防を考えれば、検討を要するところであろう。

2. 手の込んだ料理

外食やインスタント食品の利用が現在では当たり前になった時代だが、調査当時の頃も予想以上に母親は伝統食や手の込んだ料理に取り組んでいる【vol.13－6 表24】。そして、そうした料理が出される家庭の子どもは、幸せを感じている【vol.13－6 表50・表51】。料理の好きなお母さんは、子どもに

とって幸せ感を高めるお母さんなのかもしれない。

なお、家庭で作られる伝統食では、いちばんよく作られているのが「肉じゃが」で、次いで「野菜の煮物」「精進揚げ」「きんぴら」「ひじきの煮物」と続く【vol.13－6 表24】。また、母親の食事に対する考え方をみると、

子どもの健康に配慮し、献立を決めるときは「子どもの食べたいものを中心に」している母親が4割と多いが、「それぞれの好みに合わせて、別々に」献立を決めている家もやはり4割ある【vol.13－6 表32】。

なお、孤食が増加しているともいわれるが、

1993年の調査時点では孤食は夕食より朝食に多く、夕食では48.0%が「家族全員」で食卓を囲んでいる。1人で食べるのは1.9%でしかない。父親だけがいない食卓は35.6%と3分の1であった【vol.13－6 表36】。

■表8－1 食べ物の好き嫌い (vol.13－6 表33)

(%)

おかず	大好き	かなり好き	少し好き	好きでも 嫌いでもない	少し嫌い	大嫌い	食べた ことがない
ハンバーガー	70.6	15.1	7.0	3.9	1.9	1.2	0.3
フライドチキン	69.9	15.0	7.5	4.4	1.9	0.8	0.5
焼き肉	69.6	15.0	7.4	4.0	2.6	1.3	0.1
すし	67.2	16.1	7.9	4.9	2.3	1.5	0.1
グラタン	62.9	17.1	8.9	4.6	3.0	2.6	0.9
カレーライス	60.4	19.5	9.0	6.4	3.4	1.3	0.0
ハンバーグ	60.3	21.5	10.6	5.2	1.5	0.7	0.2
ぎょうざ	56.9	20.5	12.5	6.6	2.4	1.0	0.1
スパゲッティ	56.5	22.0	11.9	6.0	1.9	1.6	0.1
チャーハン	56.1	21.7	12.0	6.7	2.3	0.8	0.4
焼きそば	54.0	21.5	12.8	8.3	2.3	1.1	0.0
コロッケ	51.9	20.4	14.2	8.1	3.7	1.6	0.1
肉じゃが	51.8	20.0	14.8	8.2	2.9	1.7	0.6
たまご焼き	51.5	20.0	14.0	9.1	2.9	2.2	0.3
おでん	50.6	21.3	13.0	9.3	3.4	2.2	0.2
オムレツ	47.5	20.9	15.7	9.3	4.0	2.3	0.3
きんぴら	32.2	16.8	17.3	18.1	7.5	4.8	3.3
魚の煮つけ	28.8	16.9	18.2	17.7	9.9	7.2	1.3
ぬか漬け	22.6	11.6	14.7	20.1	10.8	9.0	11.2
ほうれんそうのおひたし	28.7	15.8	16.1	19.6	9.9	6.2	3.7
酢の物	25.2	12.6	14.6	19.3	12.6	11.7	4.0
ひじきの煮物	23.6	15.5	18.1	20.0	10.7	6.5	5.6
野菜の煮物	17.4	13.4	17.0	23.8	12.1	7.9	8.4
きりぼし大根の煮物	16.6	11.1	15.2	21.5	14.6	8.4	12.6
五目豆	13.1	10.8	13.9	23.1	14.6	8.3	16.2
おから	12.7	8.9	12.3	17.3	13.1	11.1	24.6

3. おやつ現状

おやつを食べる時間帯は、8割が学校から帰って夕食までの間だが【vol.16－2 図13】、夕食後8～9時頃にも3割が食べ、夜食をとる子も13.6%、また起床後朝食までに食べる子も16.4%いる。

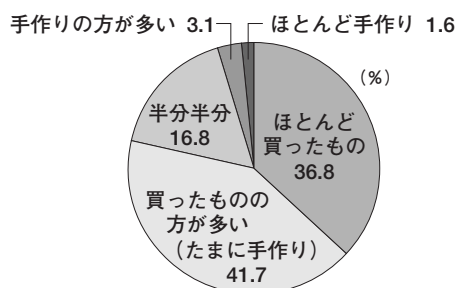
子どもが好きなおやつをみると、1位が「アイスクリーム」、次いで「ポテトチップス」「ガム」「スナック菓子」「チョコレート」「キャンデー、あめ」「クッキー」「おせんべい」と続く【vol.16－2 表22】。また飲物やデザート類は、1位が「牛乳、コーヒー牛乳」で、次が「くだもの」「缶ジュース、スポーツドリンク」「ヨーグルト、プリン、パバロア」「コーヒー、紅茶」と続く【vol.16－2 表18】。食事に近いものも食べており、「おむすび、やきおにぎり」「(カップ) ラーメン、うどん、やきそば」「たこやき、おこのみやき、ピザ」の順となっている【vol.16－2 表19】。

図8－1でみると、おやつの手作り派は非常に少数で、「ほとんど買ったもの」36.8%、「買ったものの方が多い」41.7%と、合わせると約8割が買ったものを主に食べている。また、表8－2の母親の職業別では、「専業主婦」「パートや内職」など、比較的時間が自由になる母親と「フルタイム」の母親間で手作り（「手作りの方が多い」＋「ほとんど手作り」）の割合に思ったほどの差がない。

また、食べた場所は「茶の間やリビングで」が多く【vol.16－2 表14】、おやつや間食の「ながら食べ」をみると、「テレビを見ながら」がトップで、「いつも＋わりと」そうの割合は5割もいる。次いで、「本やマンガを見ながら」「歩きながら」「勉強をしながら」と続く【vol.16－2 図29】。

最近、子どもたちの食生活の乱れが話題になっている。子どもの好みだけに応じた料理やインスタント食品やレトルト食品中心の栄養の偏った食生活では、子どもの成長や発達に影響を及ぼすであろう。子どもたちがバランスのよい食生活が送れるように、家庭や学校などで食育を広げていく必要性を感じる。

■図8－1 ふだんのおやつは手作りか (vol.16－2 図17)



■表8－2 母親の職業 × おやつは手作りか (vol.16－2 表24)

		おやつは手作りか買ったものか					(%)
		ほとんど買ったもの	買ったものの方が多い	半分半分	手作りの方が多い	ほとんど手作り	
母親の職業	フルタイム	42.5	38.8	14.1	3.2	1.4	
	専業主婦	30.5	46.7	18.2	3.2	1.4	
	自営業	37.2	41.3	19.8	1.7	0.0	
	パートや内職	35.8	45.0	14.4	2.8	2.0	
	その他	39.3	35.1	19.2	4.0	2.4	

9

子どもらしさ

深谷和子

子どもは、おとなの失ってしまった感覚をもっている。それが子どもらしさであろう。この章では、超自然的なものへの関心、子どもの自我意識の一部としての「おしゃれ」、子どものもつ願いなどをとりあげる。

〈この章で用いた号〉

深谷和子・三枝恵子 (1991) 「三つの願い」 vol.11-4

深谷和子・山根はるみ・池上雅子 (1992) 「おしゃれ (2)」 vol.11-10

深谷和子・石川洋子・山根はるみ (1995) 「おばけとジンクス」 vol.14-5

1. 超自然的なものを信じるか

1) 神仏を信じるか

「神仏がない」とする子はわずか7.1%。「ぜったいいいる」は44.6%だが、「もしかしたら、いるかもしれない」が48.3%と、多くの子どもは神仏がいるかもしれないと思っている。しかし、「神仏はぜったいいいる」とする子は5年生から6年生にかけて大きく減る【vol.14-5 図25・図26】。

図9-1によれば、子どもは何かと神仏に祈っている。いちばん多いのは「家の人が病気のとき」、次いで「テストがうまくいくように」「自分に悪いことが起きたとき」など、祈りは子どもにとってまだ無縁のものではないようであり、ジンクスも結構信じられている【vol.14-5 図22】。しかし、占いを「とてもよく当たる」と信じる子はわずかである【vol.14-5 図17】。子どもにとって未来は占いのように他人が決めるものではなく、自分で決めるものなのかもしれない。

2) お守りを持っているか

交通安全などのお守りを、カバンにぶらさげている子を見ることがある。「いつも学校に持っていく」子は4割で、「1個も持っていたことがない」子は、2割弱でしかない【vol.14-5 図18】。そのお守りを「自分で買った」子は1割強で、「両親から」が8割、「祖父母から」が5割弱となっている(複数回答)【vol.14-5 表4】。しかし、古いお守りを捨ててしまった子はわずかで、「捨てるバチが当たりそうなので、大切に持っている」または「なんとなく持っている」子がほとんどである【vol.14-5 図21】。お守りは厄除けの願いの現れであり、そのようなおとなの願いを子どもは感じとっているのかもしれない。またそのお守りを「ぜったいにききめはない」とする子は1割弱で、「ぜったいききめがあると思う」子は2割強、6割は「もしかしたら、ききめがあるかもしれない」と思っている【vol.14-5 図20】。

3) 不思議なことやおばけ

では日々の現実の中で、科学では説明できないこともあるのだと、子どもは思っているのだろうか。

妖精のようなファンタジックなもの信じている子は少ないが、「靈感の強い人」「霊視者」は8～9割が「ぜったいいいる十いるかもしれない十たぶんいるだろう」の割合も含めて信じている【vol.14-5 図9・図10】。「心霊写真」「たたり」などもそれに近い。テレビ番組の影響のせいだろうか。

さて子どもは、昔からおばけの話が好きな者たちであるがこの調査ではどうか。「とても十わりと」好きな割合では6割強になる。女子の方がおばけの話がやや好きなようで、学年を追うにしたがって少なくなっているのは、子どもの心性を失っていく過程を示

しているのだろうか【vol.14-5 図4】。

さらにおばけが好きな子どもの心理は、昔から、学校の怪談話の中にあることができる。ひと頃はそれに「花子さん」の名前がついて、本も出版され、映画にもなり、大ブームであった。はやりすたりはあるものの、現在もそれに近いのではなかろうか。1994年の調査時点で、7割強が「花子さん」の怪談を知っており【vol.14-5 図1】、自分の学校に「花子さん」の出る場所があると4割の子どもが言っている(図9-2)。その場所も、怪談の通り、トイレが圧倒的になっている(表9-1)。なぜか昔から学校のおばけは薄暗いトイレに出たものだったが、トイレが明るく清潔になった今も、おばけたちはトイレを好むものらしい。

■図9-1 神仏に祈るか (vol.14-5 図30)

	よく祈る	たまに祈る	祈らない (%)
家の人が病気のとき	36.7	39.1	24.2
テストがうまくいくように	32.7	29.5	37.8
自分に悪いことが起きたとき	30.5	37.4	32.1
自分の病気がひどいとき	22.6	41.3	36.1
友だちがかわいそうなとき	22.1	39.5	38.4

■図9-2 学校に「花子さん」の出る場所があるか (vol.14-5 図2)

	ある	ない	よく知らない (%)
全 体	40.7	21.6	37.7
男 子	31.9	25.4	42.7
女 子	49.5	17.9	32.6
4 年	46.0	20.1	33.9
5 年	46.2	17.8	36.0
6 年	29.9	26.7	43.4

■表9-1 「花子さん」の出る場所 (vol.14-5 表1)

	トイレ	階段	理科室	音楽室	プール	教室	校庭	その他
(%)	95.6	21.9	20.5	19.5	11.9	8.7	7.9	16.1
	(複数回答)							

2. 自我の芽生えとしてのおしゃれ

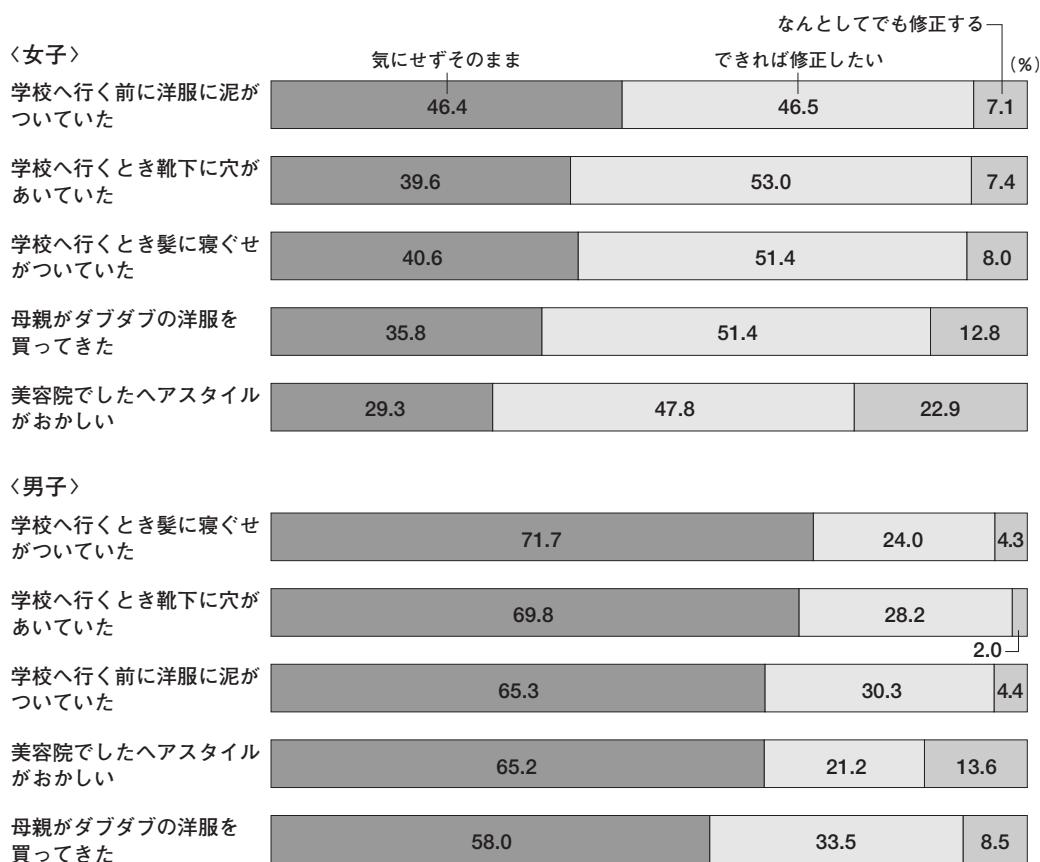
外見を気にする心情は、子どもが社会的存在としての自分を自覚し始めたことを現すものであろう。おしゃれをすることは、基本的な生活習慣の形成ともかかわっているが、また子どもが自己中心性から脱却し、他人の眼差しを意識し始めたことを意味している。

おしゃれ以前に、子どもが「身だしなみ」にどのくらい気を配っているのか。この年齢の子どもが毎日しているのは、毎日の洗顔や手洗いくらいで、おしゃれ心の芽生えは多少女子にみえる程度である【vol.11-10 図16・図17】。

図9-3では、それをもう少し掘り下げている。ここでも性差は大きい、多少ではあっても「人目を気にする」様子が芽生えかけていることもわかる。また、身につけるものを買うときに、どのくらい自己主張するかをみると、学年と共に自己主張が強くなる様子がわかる【vol.11-10 図32・図33】。

最後に「不潔、デブ、センスがない」の3つを掲げて、どのような悪口に、子どもが一番腹を立てるのかをみている。子どもにとって「不潔」が一番仲間から言われたくない言葉のようである【vol.11-10 図2】。

■図9-3 あなたならどうする？ (vol.11-10 図19)



3. 三つの願い

1) 自分への願い

人は誰でも願いを持っている。子どもはおとなより未来が大きいだけに、またおとなより人に依存して生活している存在だけに、願いも多く多様であるに違いない。「もし魔法使いが本当にいて、あなたのお願いを何でもかなえてくれるとしたら、何と何と何を願いますか」と尋ねた結果をみてみよう。

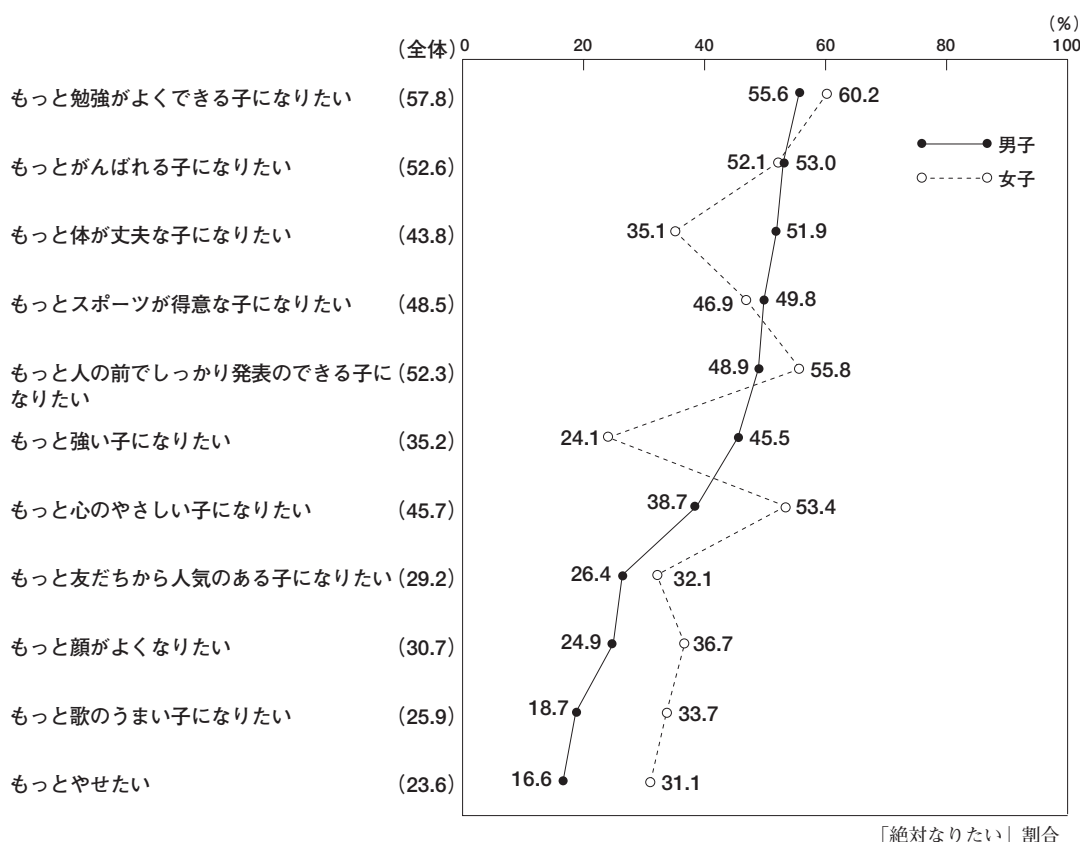
はじめに図9-4は、「どんな子になりたいか」との自分への願いである。1990年の調査時点では性差があって、男子は女子より「もっと体が丈夫な子になりたい」「もっと強

い子になりたい」と願い、女子は男子より「もっと心のやさしい子になりたい」「もっと顔がよくなりたい」「もっと歌のうまい子になりたい」「もっとやせたい」と願っている。今はどうなったか。

2) 魔法使いへのお願い

図9-5は自由記述を分類したものだが、「おこづかいや物がほしい」が2番目にあるものの、総じて抽象的な願いが上位にある。のどから手の出るほどほしい物や食べ物、してみたいことが切実にあるならば、「願い」

■図9-4 どんな子になりたいか×性 (vol.11-4 図7)



はもっと生活に密着した内容になるのではないか。満ち足りた時代が、今の子どもの上にあるのだろうか。

3) 親への願い

子どもの周囲にいて、子どもの生活に一番影響を及ぼす人が親である。その親に対して子どもが持っている願いはどのようなものか。

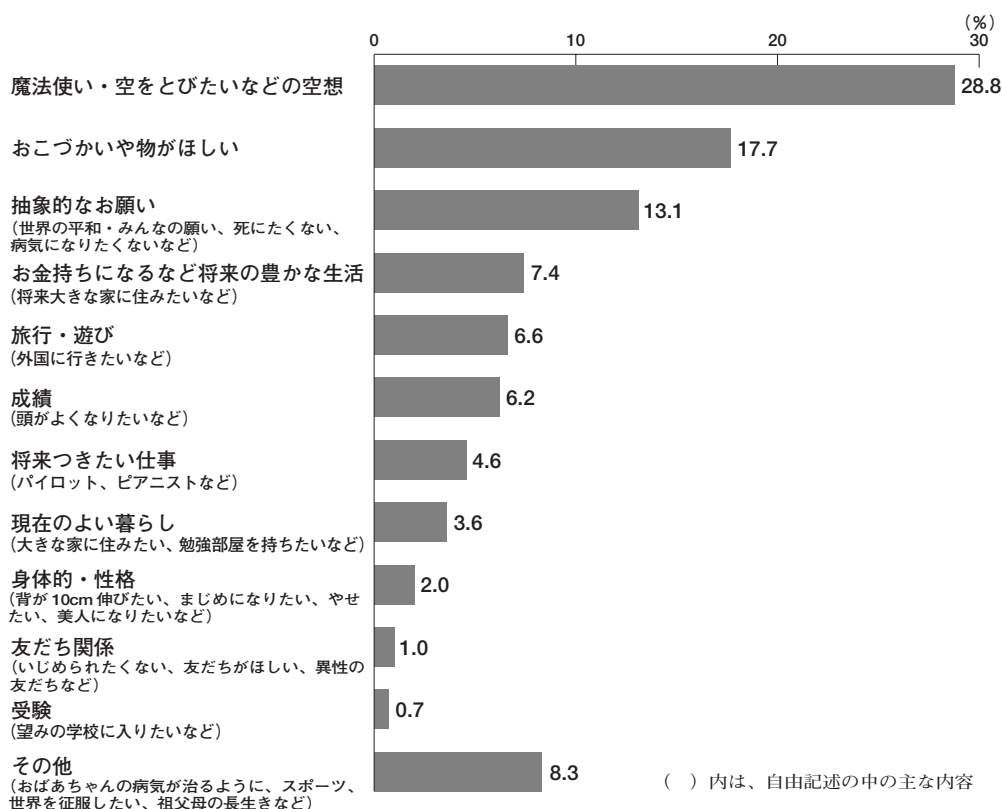
親への願いは、父親母親共に男子の方に願（親への注文）が多い【vol.11－4 図10・図12】。父親へは「もっとお金持ちになってほしい」「もっと子どもの気持ちをわかってほしい」「休日にもっとデパートやレストランに連れて行ってほしい」が上位を占めている。母親に対しても同様だが、「もっとおこづかいをください」「細かいことをいちいちうるさく言わないでほしい」「勉強しろと

言わないでほしい」「あまり家事に手ぬきをしないでほしい」が、父親に対する願いとは違うようである。また、これまで言われた一番いやな言葉を掲げておいた【vol.11－4 表25・表26】。

4) 先生や友だちへの願い

子どもは先生への願（注文）をたくさん持っている。その注文は男子の方に多い【vol.11－4 図14】。中でも「もっと宿題をへらしてほしい」は無理な注文かもしれないが、「クラスの中でひいきをしないでほしい」「あまり叱らないでほしい」「もっとわかりやすく教えてほしい」などの注文には、できるだけ応えてやりたいものである。また、男子から女子へ、女子から男子への注文では、子どもらしく、ほほえましい願（願い）がみられる【vol.11－4 表23・表24】。

■図9－5 魔法使いにお願いしたいこと－1番目のお願い－（vol.11－4 図8から）



10

生活と体験

小川正代

学校から子どもの生活時間がどんどん削り取られている現状がある。

公立学校の完全学校週5日制の実施に伴って休日が増えた分、学校での生活時間が凝縮され、様々な面でゆとりが失われている。例えば、友だちとの他愛のないおしゃべりをする時間、元気な子どもたち同士と一緒に思いっきりスポーツを楽しむ隙間の時間、また委員会活動や学級の仕事をする時間やそのための話し合いの時間など、一見ムダに思えるけれど子どもの生活と心を整えるには、なくてはならない時間と場がますます少なくなっている。

友だちや社会とのコミュニケーションという滋養の場を削ぎ落とされ学校の生活が忙しくなった今、子どもたちの家庭生活はどうだろうか。忙しい時間の流れに押されながら、平日の子どもたちはどんな過ごし方をしているのだろう。

この章では子どもの毎日を振り返る。

〈この章で用いた号〉

深谷昌志・深谷和子・土橋稔・戸塚智・矢部崇・広森滋・新井誠・森川浩珠・上杉賢士・中原美恵(1989)「アルマナック子ども」vol.9-6

森川浩珠(1990)「生活時間」vol.10-4

深谷和子・広森滋(1990)「基本的生活習慣(2)」vol.10-8

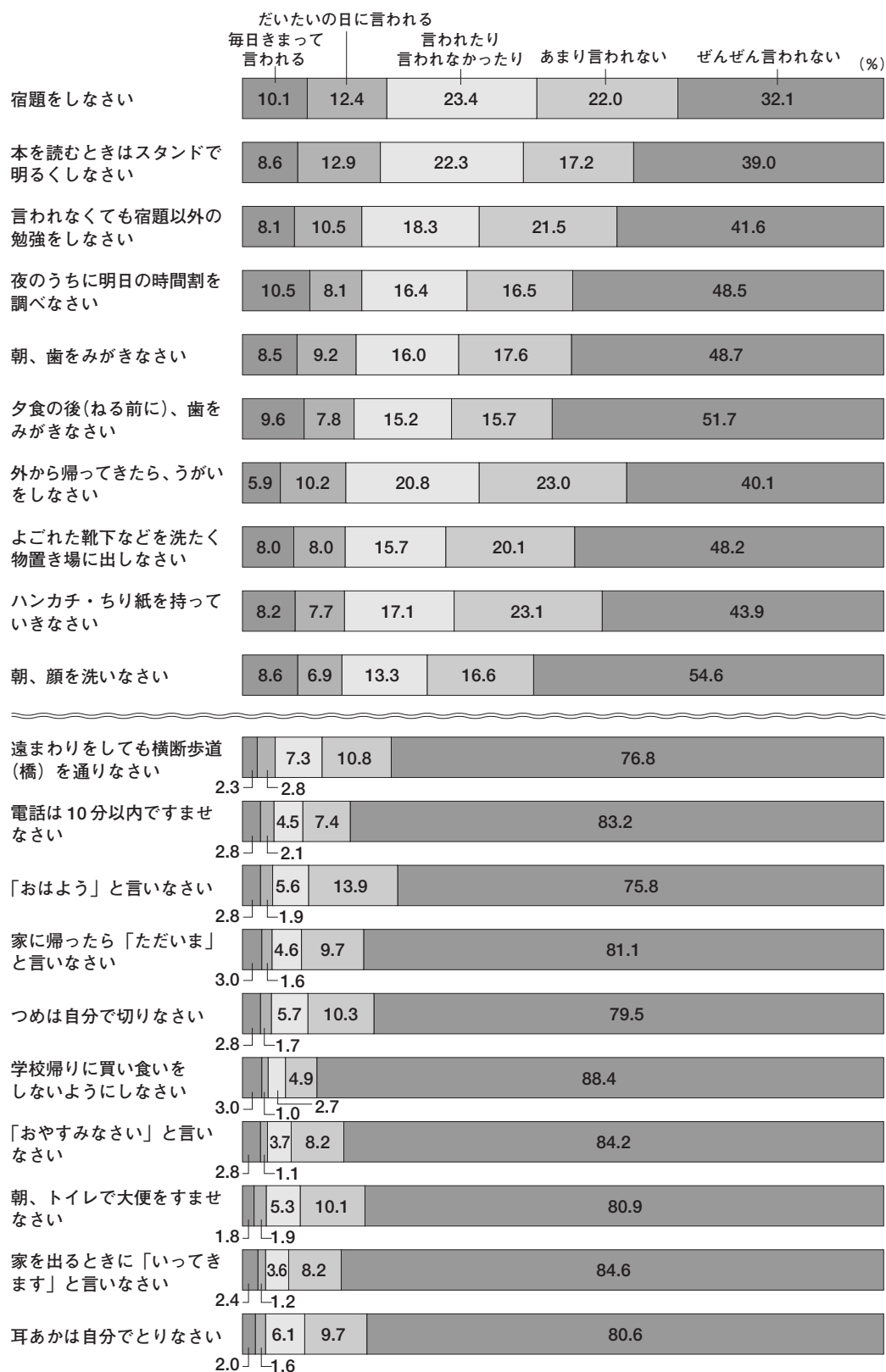
1. 家の人とのかかわり

子どもの適応力は素晴らしい。彼らはどんなに忙しくなっても楽しみを見つけて生活している。環境の違いはあってもそれなりに居心地のよい家庭があり、心置きなく勉強する場所も確保されている。図10-1では家の人とのかかわりを聞いている。

子どもは、何を差し置いても「勉強しなさい」と言われていることがわかる。「宿題を

しなさい」から「夜のうちに明日の時間割を調べなさい」まで勉強にかかわる項目が多く並んでおり、それ以下の項目は全て基本的な生活習慣のしつけである。親にとっては自分の子どもに勉強をする姿勢をしつけること、すなわち勉強させることもしつけのうちと考えているのかもしれない。

■図10-1 家の人から言われること (vol.10-8 図13)



2. 生活体験

それではしつけとかかわる子どもの日常の生活体験は、どのように変化しているのだろうか。また、全国的な都市化への進行、そしてますます進む生活様式の変化と利便性の向上の中で、今、子どもはどんな生活体験を重ねているのだろうか。

小学校3～6年生に生活体験を聞いた調査(1982年)では、女子に比べ男子は家の手伝いをほとんどしていない割合が高い。女子も「家のふき掃除」や「洗濯物を干す」など必要な家事以外の手伝いはあまりしていない【vol.9-6 図4-8】。では子どもたちの体験領域はどこか。学校が中心のようである。

各教科の時間の内容はもとより、低学年は「生活科」が重要な体験学習の場となっている。また2002年度から「総合的な学習の時間」が設置され、中学年以上は生活体験をはじめとして、自然体験、文化体験など、地域の達人や著名人をゲストティーチャーとして招き、この時間が様々な体験を学ぶ場になった。おとなから教わり、そして楽しく活動している子どもの姿がある。

学校と家庭と地域が一体となって子どもたちに「生活する力」をつけていく必要性が求められる時代になってきているといえよう。

3. 勉強に柔順な子ども

子どもたちの勉強ぶりをみてみよう。

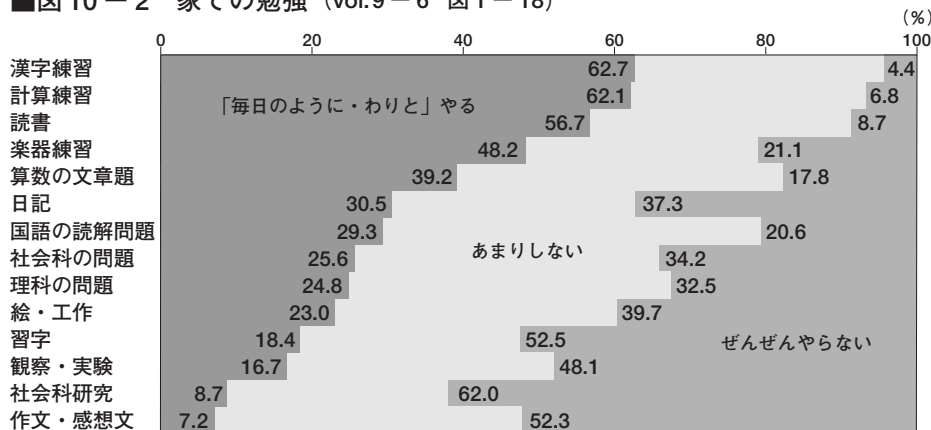
筆者は5年生担任の教師であり、学校で宿題・課題を出すと、多くの子どもはきちんとやってくる。忘れたときはもちろん、体の具合が悪かったりその他の都合でできなかったときも、申し訳なさそうに宿題を忘れたことを言う。子どもたちは「課題や宿題がきちんとできる自分」という強い誇りを持っているのではなからうか。

少なくとも「勉強」という二文字が、子ど

もの気持ちと生活の大半を占めていることは確かと思われる。

図10-2で勉強の種類をみたところ、「漢字練習」と「計算練習」が上位を占めている。毎日の課題・宿題として出している学校も多いが、自分の家で購入したワークやドリルなどをやっている子も多いようである。生活の中で学習の習慣化を図るには、取り組みやすい勉強といえるだろう。

■図10-2 家での勉強 (vol.9-6 図1-18)



4. 学校生活と過密なスケジュール

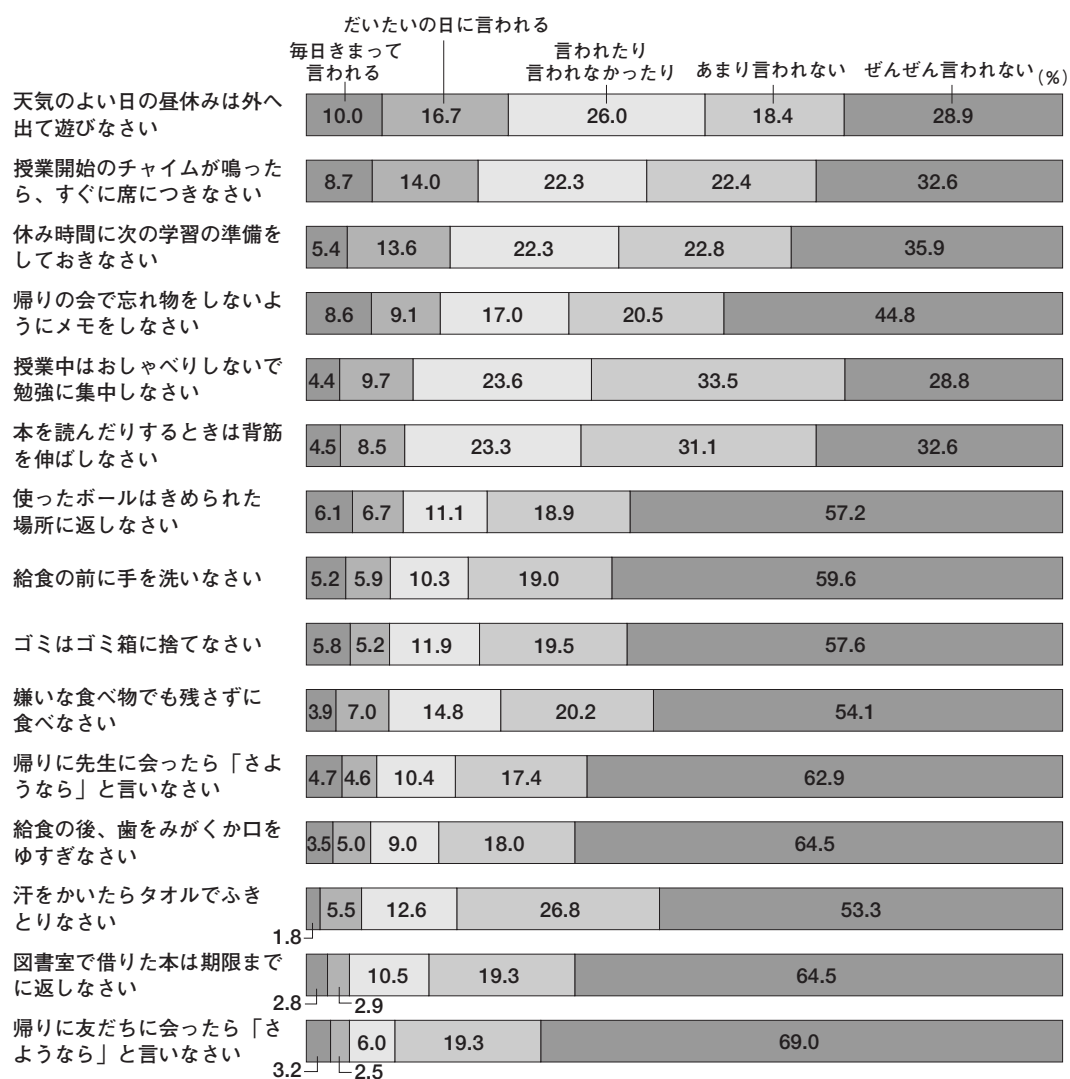
少ない自由時間の中で子どもたちを目一杯遊ばせたいと、どの教師も思っている。図10-3から先生たちは「天気の良い日の昼休みは外へ出て遊びなさい」と声かけをしていることがわかる。

子どもたちは、それとばかりに手に手にボールやなわを持って飛び出していくが、その前に「次の授業の準備をしておきなさい」

と声がかかる。そうして休み時間、汗だくになって帰って来たたん、余韻を楽しむ暇もなく「チャイムが鳴ったら、すぐに席につきなさい」と教師から注意される。

分刻みで流れていく子どもたちの学校時間。たくさん遊んで帰って来た後、または、その遊びの時間を委員会活動など仕事に当ててきた後は、ゆっくりさせてやりたいと思っ

■図10-3 学校の先生から言われること (vol.10-8 図16)



ている教師も多いと思われる。

授業への子どもの気持ちをみると、多くの子どもが休み時間からの気持ちを切り替えて、教師の話を生懸命に聞き、参加してい

る。黒板に書かれたことをしっかりノートに写している様子が見える【vol.10-4 図15】。ここから、勉強に対するまじめでひたむきな小学生の姿勢も浮かんでくる。

5. 宿題への意識の変化

宿題を歓迎する子どもはいないだろうが、20年以上前とは、多少意識が変わってきているのだろうか【vol.9-6 図1-19】。土曜、日曜が休みになって、学習時間が少なくなり、学力低下の原因になったとする強い危機感を持ちはじめたのか、実際に保護者が学校に宿題を要求するようになってきた。

保護者の話では、地域のスポーツ活動などで土曜、日曜ともフルに練習をしている子どもの親も試合や練習が終わった後は、勉強をさせたいと思っているようである。子どももそれなりに状況を受け止め、「休みが増えた分家で勉強をする」という意識を持ってきているようだ。

6. 叶えてやりたい、ささやかな子どもの希望

表10-1 から子どもたちのささやかな願いをみてみよう。「自由に使える2時間があったら」という問いに半数以上の子どもが「友だちと外で遊ぶ（「ぜひ十かなり」やりたい）」と答えている。「2時間」といえば、学校では20分くらいの隙間時間が休み時間である今の子どもの現実からすると、とてつもなく長い時間であろう。

また、「好きな本をのんびり読む」「のんびりテレビを見る」「のんびりマンガを読む」

とあるように、時間に縛られずに自分の世界に没頭したいと答えている子どももいる。システム化された日常生活の中で、自由な時間と空間と仲間を求めている子どもたちの姿が見える。

「ゆとりの教育」をうたって四半世紀。子どもたちが心からのびのびと「ゆとり」を楽しめる生活環境を皆が真剣に考えていくときがきている。

■表10-1 もし2時間くらい暇ができたらやりたいこと（vol.9-6 表2-3から）

	やりたい				したくない		わからない
	ぜひ	かなり	小計	やや	あまり	ぜんぜん	
友だちと外で遊ぶ	39.7	17.8	57.5	18.8	11.1	4.4	8.2
好きな本をのんびり読む	24.1	17.5	41.6	25.2	15.5	9.0	8.7
のんびりテレビを見る	13.6	16.0	29.6	23.8	25.8	14.5	6.3
のんびりマンガを読む	14.7	14.2	28.9	25.5	19.5	17.6	8.5
友だちと室内で遊ぶ	11.1	13.3	24.4	20.3	26.0	19.2	10.1
予習が復習をする	3.1	5.7	8.8	17.1	32.2	28.0	13.9

11

生活としつけ

河村真理子

日本の子どもたちのモラルの低下や規範意識の消失が問題になっている。これは子どもだけの問題ではない。日本の社会全体が善悪の判断基準をどこに置いていいのかわからず、自信をなくし、そのための不安感であろうか。子どもはおとなの背中を見て育っている。

この章では、おとなが子どもに対してどのようにモラルを教えているかについて、叱り方、ほめ方、しつけ等の具体例をあげ、それらのデータから、子どもたちとどのように向き合っていけばよいのかを考えてみたいと思う。

〈この章で用いた号〉

深谷和子・石川洋子・中原美恵・土橋稔・戸塚智・矢部崇（1992）「ほめ方・しかり方」vol.12－2

深谷和子・石川洋子（1993）「しつけ」vol.12－5

深谷和子・戸塚智・矢部崇（1993）「もったいない感覚」vol.13－3

田村毅・石川洋子（1999）「ほめられ体験・叱られ体験」vol.18－3

1. しつけ

はじめに、おとなが子どもに対して行っている「しつけ」の現状を把握しておこう。幼児に対して母親が実際どのようなしつけを行っているかという調査をみてる（表11－1）。

生活習慣を身につけさせるためには、それほど厳しいしつけは行われていないようである。しかし、ケンカとなると、母親の約4割が、「自分の子にがまんさせる」や「やめさせる」などして、介入している。もちろん状況にもよるが、まわりのおとなが、「おたがいさま」という気持ちで、見守りあえる土壌が育ってくれればと思っている。子どもにとって、ケンカも生きる力を獲得する貴重な体験になり得ることがあるからである。気になる

のが、公共の場面でのしつけである。「電車で席が空いていたら、おとなを押しのかけて座ったとき」に、「そのまま」と「お年寄りがいなければそのまま」を合わせると7割以上である。「スーパーからガムを持ってきたことに気づいたとき」に「あやまらせる」母親は約65%である。これをどうみるか。

しつけとは、実母から受けたしつけの影響が受け継がれている傾向がみられるように【vol.12－5 表7】、その人の生育歴や性格、倫理観から生じてくる行為といえる。しつけをするには、倫理観だけではなく、大変な根気がいるので、面倒に思えばなかなかできない。「子育てがとても好き」な母親はそうでない母親より「自分のしつけに自信をもって

いる」割合が高い【vol.12-5 表12】。
子育てには、子どもに何を伝えたいか、ど

う育ってほしいかという思いと、忍耐強くか
かわるエネルギーが必要のようである。

■表11-1 しつけ×性 (vol.12-5 表5) (数値は4～8歳児のみ)

〈寝る時間でも遊んでいるとき〉 (%)

	そのまま	強制しない	布団に入れる	その他
男 児	0.7	35.5	58.5	5.3
女 児	0.8	36.2	59.6	3.4

〈嫌いなものを残すとき〉 (%)

	強制しない	少し食べれば 許す	必ず全部 食べさせる	その他
男 児	19.1	70.1	3.6	7.2
女 児	16.3	73.6	2.8	7.3

〈遊んだおもちゃを片づけようとしないとき〉 (%)

	おとなが 片づけてしまう	大部分本人に 片づけさせる	1人で全部 片づけさせる	その他
男 児	11.0	76.0	9.9	3.1
女 児	10.8	75.4	10.8	3.0

〈1つ年上の子とおもちゃのとりあいでケンカを始めたとき〉 (%)

	そのまま	相手の子に 貸してねと 納得させる	自分の子に がまん させる	やめさせる	その他
男 児	52.3	1.2	31.1	8.1	7.3
女 児	47.5	1.6	35.1	8.5	7.3

〈よそのおばさんに注意されて「バカ」と言い返したとき〉 (%)

	親が あやまる	子どもが黙って いてもそのまま	必ず あやまらせる	その他
男 児	5.7	12.6	70.5	11.2
女 児	6.3	12.9	69.2	11.6

〈電車で席が空いていたら、おとなを押しのかけて座ったとき〉 (%)

	そのまま	お年寄りがいな ければそのまま	立たせる	その他
男 児	3.2	72.0	21.2	3.6
女 児	2.7	68.5	24.0	4.8

〈スーパーからガムを持ってきたことに気づいたとき〉 (%)

	一応叱るだけ	母親が返す	あやまらせる	その他
男 児	4.5	24.7	65.7	5.1
女 児	4.6	24.1	65.5	5.8

2. ほめること・叱ること

子どもたちに「してよいこと」「してはいけないこと」を教えるためのしつけについて、小学生への具体的な対応をみてみよう。子どもたちに物事の道理や社会のルールを教えるために、私たちは、ほめたり叱ったりする。しかし、ほめてばかりで必要なしつけができなかったり、不適切な叱り方で、一部の虐待の問題も生まれてきている。子どもの「ほめられ体験・叱られ体験」の様相を探った調査をみてみよう。

どんなときに叱られ、ほめられているか。母親、父親で違いは多少みられるが、ほめられることも、叱られることも、家庭生活や達成にかかわることが高く、社会的な項目が低いように思える【vol.18-3 図1-1・図1-2・図1-3・図1-4】。他人から叱られることが少なくなった今の世の中で【vol.18-3 図6-1】、社会生活をスムーズに気持ちよく過ごす方法を親がもっと教える必要があるのではないだろうか。

それでは、親との関係はどうであろう。表11-2では「あなたのことを親は大事にしてくれる」と思っている子どもは、叱られると「これから叱られないようにがんばろう」と思っている。「大事にしてくれない」と思っている子どもは「うるさいと思う」や「かえってやる気がなくなる」と思うようである。やはり日々の生活の中で、愛情と信頼関係を作り上げていくという積み重ねがあってこそ、叱る効果があるということであろう。

6年生の男子が、「ほめられて一番うれしかったこと」の質問に、「何もいわれなくても手伝いをしたとき、母親から『まー、うれしー、ありがとー』といわれたこと」と答えている【vol.12-2 表2-7】。

叱ることもほめることも、子どもへの愛情から生まれた素直な気持ちの伝え合いと考えればよいのかもしれない。おとなが尊大に構えずに、子どもを尊重する精神をもってすれば。

■表11-2 叱られて思うこと × あなたのことを親は大事にしてくれる
(vol.18-3 表5-4)

	あなたのことを親は大事にしてくれる			
	とても そう	少し そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
叱りすぎだと思う**	9.0	13.7	24.8	68.8
親の機嫌が悪いから叱られていると思う**	7.0	10.1	13.6	46.9
うるさいと思う**	12.9	24.1	33.3	78.1
かえってやる気がなくなる**	17.4	22.0	28.0	75.0
親がひどくにくらしくなる**	7.5	11.8	26.0	60.6
叱られても仕方がないと思う**	31.8	15.4	12.7	12.9
これから叱られないようにがんばろうと思う**	43.4	21.9	15.9	6.3

「いつもそう思う」の割合
**は1%水準で有意差あり

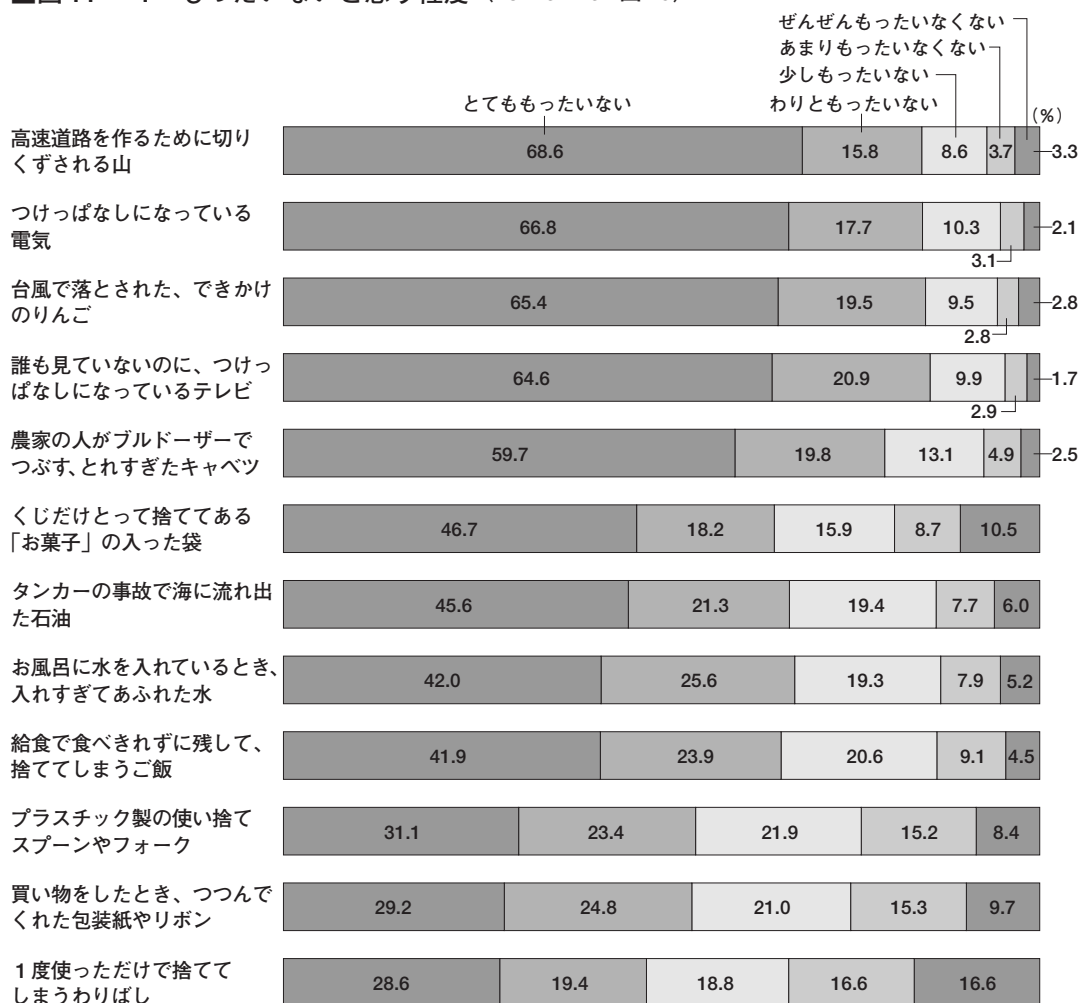
3. もったいない感覚

それでは最後に、日本人が古くから当然のモラルとしてもってきたものの一つである「もったいない感覚」について取り上げてみる。一時期は「使い捨ての時代」と言われていたが、最近は「資源の大切さ」や「リサイクル」の必要性が問い直されている。もったいない感覚について、子どもたちへの調査をみてみよう。

図11－1 はもったいない（「とても十わり」と）と思う程度を聞いたものである。同じ食べ物についての質問に「台風で落とされた、

できかけのりんご」や「農家の人がブルドーザーでつぶす、とれすぎたキャベツ」の方が「給食で食べきれずに残して、捨ててしまうご飯」よりも「もったいない」と感じている。もちろん、世の中の出来事に対しての関心や共感は大切である。しかし、日々の生活の中で「もったいない」という感覚が実感できないのであれば、これも問題ではないだろうか。私たちおとなが、日ごろからどのような言動をしているか、振り返ってみる必要があるそうである。

■図11－1 もったいないと思う程度（vol.13－3 図10）



12

親と家族

三枝恵子

晩婚化、結婚しない男女の増加、また結婚しても子どもを持たない夫婦など、人のライフスタイルも多様化している。1989年に合計特殊出生率が1.57と低下し、さらに2003年には1.29まで減少し、少子化の流れに歯止めはかかりにくい。そうした少子化傾向の背景には高学歴化をふまえた職業を持つ女性の増加や子育ての将来に明るい見通しを持ちにくいことなどが考えられる。さらに、豊かな社会の出現、地域社会の崩壊、流動的な価値観、情報化社会の進展等の社会構造的な大きな変化は家族のあり方や親像に影響をもたらししている。ここではこうした社会的背景をふまえ、親のあり方や子どもとのかかわり方、子どもの成長に果たす親の役割など、変化する家族像をまとめた。

〈この章で用いた号〉

子ども調査／深谷和子・中原美恵・新井誠・広森滋・石川洋子（1992）「日本のお父さん」vol.11－12

深谷和子・広森滋・中原美恵・新井誠・畠山滋・石川洋子・田村毅（1993）「日本のお母さん」vol.13－1

深谷和子・斎藤浩子・吉野真弓・持田恭子（2003）「居場所としての家族」vol.22－3

親調査／深谷和子・山根はるみ・石川洋子（1995）「少子化時代の子育て」vol.15－1

深谷和子・熊澤幸子・石川洋子・夏秋英房・河村真理子・中澤智恵（1997）「母親は変わったか―若い世代のお母さん―」vol.17－1

深谷昌志・三枝恵子・遠田瑞穂（2001）「小学生の親子関係―母親調査から―」vol.21－1

1. 変化する父親像・母親像

「友だちパパ」「ニューファミリー」などの語が流行し、父親像・母親像の変化が指摘された80～90年代、「小学生ナウ」では1991年に「日本のお父さん」（vol.11－12）、1992年には「日本のお母さん」（vol.13－1）をテーマに全国調査を実施し、子どもの目を通した父親像・母親像を探っている。

1) マルチ・ロール型の父親

まず、子どもが父親をどう思っているかを

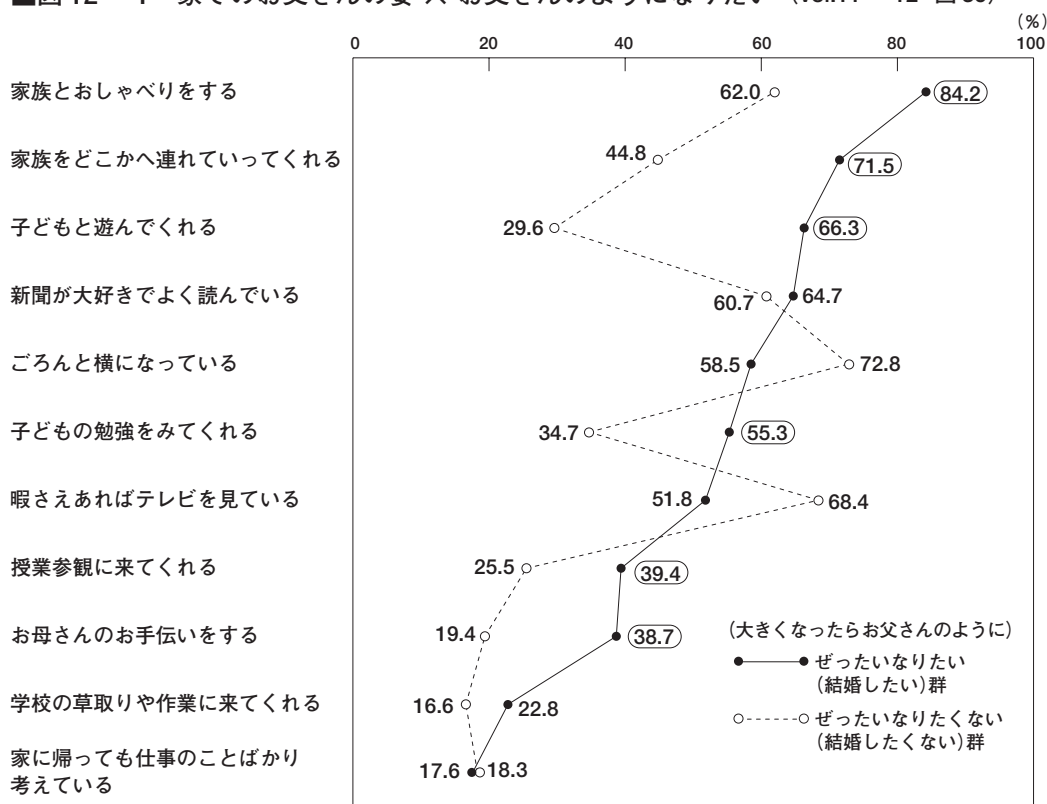
みるために、父親について自慢できることを尋ねてみた。自慢できることのトップは「仕事をがんばっている」ことで、「とてもそう」55.0%、「わりとそう」を合わせるとほぼ9割に達する。次いで、「やさしい」や「いろいろなことを知っている」が8割弱、「スポーツが得意」「お金をたくさんもうけている」「人の上に立つ仕事をしている」も5割を超える【vol.11－12 図33】。子どもたちにとって父親は、「お金をたくさんもうける」ことや「人

の上に立つ」など、社会的にビッグな存在ではないが、自分や家族にとって「仕事をがんばり、やさしくて物知り」な存在のようだ。父親の家庭での姿は、「家に帰っても仕事のことがばかり考えている」は「とても十わりと」そう思う割合を合わせても2割弱と少なく、「家族とおしゃべりをする」が7割を超え、「家族をどこかへ連れていってくれる」が6割、「子どもと遊んでくれる」「子どもの勉強をみてる」が5割くらいと、多分に家庭的な父親像が浮かんでくる【vol.11-12 図17】。

図12-1は、父親が子どもの成長モデルになりうるのかをみてみた。成長モデルになりうる父親とは、家族や子どもの世話をする父親であり、子どもは家族や自分とのかかわりの中で父親を評価し、自分の「モデル」として取り入れようとしている。ここから、今日的タイプの父親像として、「子どもの世話

を細やかにして家族に尽くし、評価を得る父親」となる。このタイプの父親は、「力強く頼もしい」父親イメージを持ちながら「やさしい」や「明るい」という、いわばかつての母親的イメージも合わせ持った父親像として子どもの中に根づいている【vol.11-12 表7】。すなわち、かつての父親役割に加え母親役割もこなす「マルチ・ロール型の父親像」が見いだされる。このマルチ・ロール型の父親は、家庭内で力を持ち、リーダー的役割を果たし、信頼され、社会的にも人格的にも高く評価されている【vol.11-12 図39】。「父親が見えなくなった」と言われるが、不在でも見えなくなったのでもなく、新しい父親「マルチ・ロール型の父親像」として子どもの側にいると考えるべきで、このマルチ・ロールを果たす父親が子ども自身の同一視の対象としても十分機能している。

■図12-1 家でのお父さんの姿 × お父さんのようになりたい (vol.11-12 図36)



「とても十わりとそう」の割合

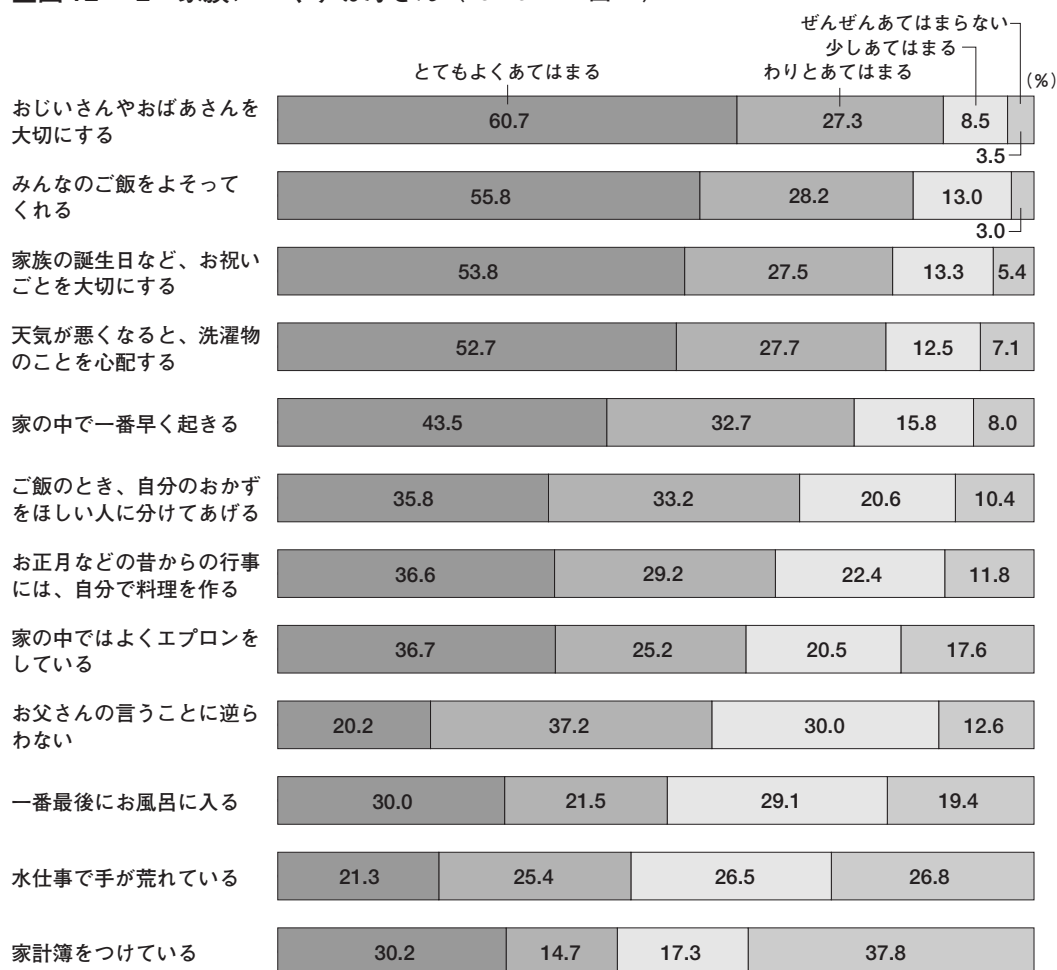
○ は「ぜったいなりたくない(結婚したくない)群」が10ポイント以上高い項目

2) 「つくし型」から「楽しみ型」にシフトする母親

今日的な父親像として「マルチ・ロール型父親」の存在が明らかになった。では、母親はどのような役割を担っているのだろうか、その姿を全国調査で追ってみた。この全国調査では母親たちの73.6%が仕事を持っており、母親が仕事を始めた時期は育児が一段落する「子どもが小学生になってから」が42.5%、「子どもがずっと小さい頃から」働いている母親も39.1%おり、女性の社会進出が増えつつある状況の中で、仕事と家庭の両立を図っている【vol.13-1 図20・図22】。

では子どもからみた母親の行動様式を図12-2、図12-3でみてみよう。「とてもよく十わりと」あてはまる割合の高い順にみると、図12-2では、「おじいさんやおばあさんを大切にする」「みんなのご飯をよそってくれる」「家族の誕生日など、お祝いごとを大切にする」「天気が悪くなると、洗濯物のことを心配する」が8割を超え、いわゆる昔風の「家族につくす母親」の姿がみられる。一方、図12-3で現代的な母親のライフスタイルを想定した「生活を楽しむ」項目で尋ねると、「友だちがたくさんいる」が8割、次いで「長電話をする」が6割、「いつもきれ

■図12-2 家族につくすお母さん (vol.13-1 図17)

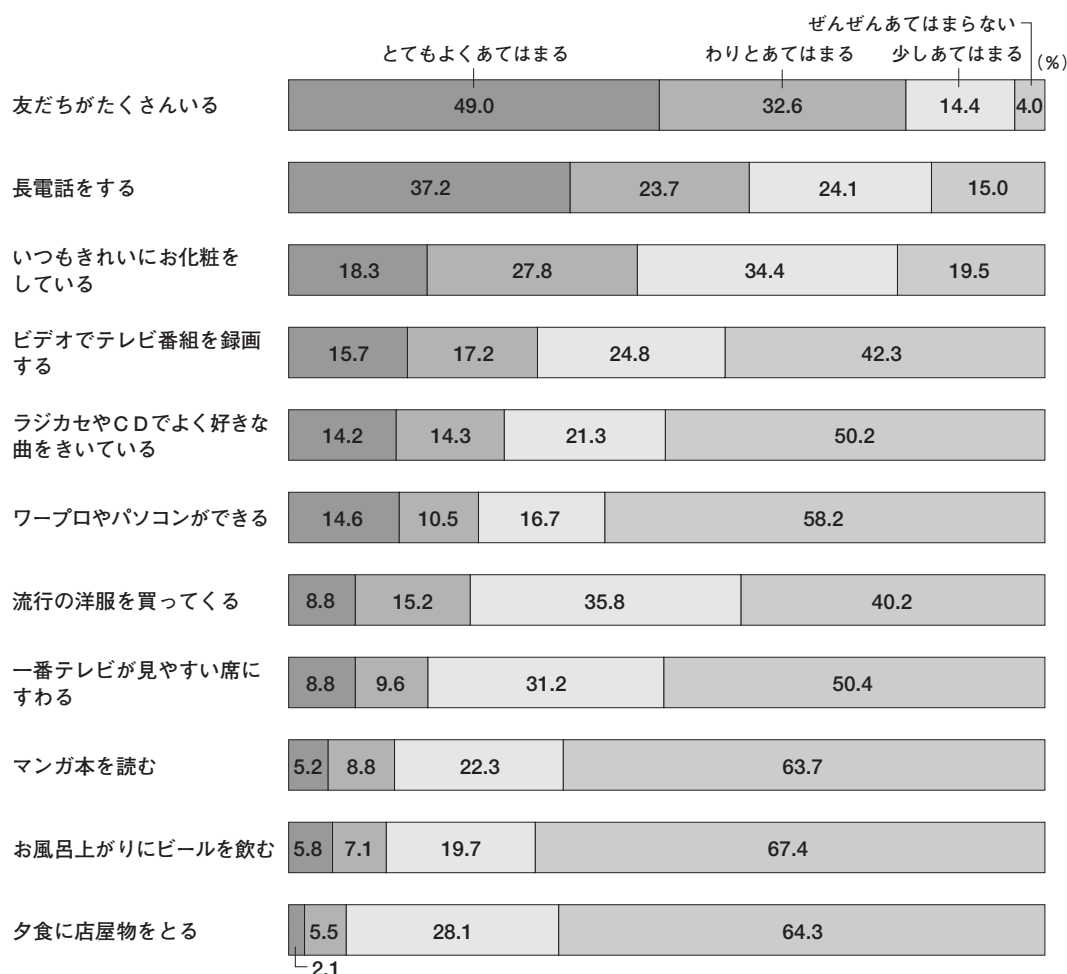


いにお化粧をしている」が5割弱と、交友関係が多くおしゃれをするなど「自分の生活を楽しむ母親」の姿も認められる。「つくす母親」は子どもの身の回りのことや気持ちの変化に敏感に反応しているようである。また一方でPTA活動に参加したり友だちとお茶や食事を楽しんだり、趣味やおけいごとをするなど社会的活動にも積極的である【vol.13－1 表6】。一方、「生活を楽しむ母親」は、積極的に家庭の外に出て行き行動半径も広く、また、家族のお祝いごとを大切にし昔からの行事食を作るなど家族の世話もしている【vol.13－1 図52・図53】。すなわち、家庭

を大切に家族につくす行動様式を持ちながら、生活のバランスを崩さない程度に自分の生き方を大切にしながら生活を楽しむ現代的な新しい母親の出現といえる。そうした母親を子どもたちは自慢に思い、高く評価している【vol.13－1 図48】。

新しい時代の母親たちも、子どもが小さいうちは家族に「つくす母親」の部分が大きく、子どもの成長と共に時間的・経済的ゆとりを得て次第に自己の啓発や社会参加へと、「生活を楽しむ母親」にライフスタイルをシフトする「シフト型の母親」に変容している。

■図12－3 自分の生活を楽しむお母さん (vol.13－1 図18)



2. 親子関係と母親意識（母親調査を通して）

子ども調査（全国調査）では「マルチ・ロール型の父親」と、「つくす母親」から「生活を楽しむ母親」にライフスタイルをシフトする「シフト型の母親」が新しい親像として明らかになった。ここでは母親調査を通して、少子化時代の子育てや親子関係、母親意識をみていく。

1) 子どもを世話する母親

子どもとの関係を、母親が子どもの世話をどのくらいしているかに視点を当て示したのが表12-1である。母親が「いつもする」ことは、「朝、子どもを起こす」「子どもが朝食をすぐ食べられるように整える」「学校へ行くとき、子どもを見送る」「子どもの洗濯物をタンスにしまう」「寝るときは子どもに声をかけて寝る」が6割を超える。さらに「いつも十たまに」する割合を合わせた数値でみるとほとんどの項目で6割を超え、子どもに気を配りながら世話をするやさしい母親の姿が浮かんでくる。

では、母親たちはどのような子どもの世話が大切だと考えているのだろうか。「とても大切だと思う」ことは「一日の出来事を聞く」が8割、次いで「寝るときは子どもに声をかけて寝る」「学校へ行くとき、子どもを見送る」が7割を超える。学校に行くとき見送ったり、寝るとき子どもに声をかけることはいつもしているし、とても大切だと思っている。しかし、子どもに一日の出来事を聞くことは大切だと思いつつも「いつもする」割合は45.2%と低く、大切だと考えながらもなかなか思うようにできない状況のようである。

母親たちは子どもの世話をいつ頃まで続けようと思っているのだろうか。母親の心づもりでは、子どもの日常生活の世話は中学校卒業頃まで、経済的支援は社会人になる頃まで、同居し子どもの夕食を作るのは結婚するまでと、基本的には子どもが結婚するまで世話をするつもりである【vol.21-1 表2-7】。

■表12-1 次のようなことをどのくらいしているか、親としてとても大切だと思うか
(vol.21-1 表2-1・表2-2から)

	いつも する	たまに する	あまり しない	まったく しない	(%) とても大切 だと思う
朝 朝、子どもを起こす	66.3	21.5	9.0	3.2	16.0
学校へ行くとき 子どもが朝食をすぐ食べられるように整える	73.0	16.1	8.5	2.4	36.7
子どもが学校へ出かける前に、忘れ物がないか確かめる	24.1	38.4	24.6	12.9	12.9
玄関で子どもの靴を並べる	13.2	25.1	27.7	34.0	4.4
学校へ行くとき、子どもを見送る	65.0	23.2	8.3	3.5	71.1
雨の日は学校まで子どもを送っていく	2.2	7.0	10.1	80.7	0.4
昼 忘れ物を学校まで届ける	2.9	31.9	33.6	31.6	1.7
学校で、仲間外れやいじめにあっていないか気にする	14.5	47.1	30.2	8.2	48.6
子どもの習いごとや塾への送り迎えをする	23.8	27.0	14.9	34.3	6.1
子どものベッドメイキングやふとんを片づける	41.1	33.1	16.2	9.6	3.5
夜 夕食は子どもの好きなメニューにする	7.0	66.2	22.0	4.8	2.1
子どもの洗濯物をタンスにしまう	60.9	19.5	11.2	8.4	3.9
入浴後の子どもの着替えを準備する	21.4	16.0	16.8	45.8	1.8
一日の出来事を聞く	45.2	48.3	6.1	0.4	80.3
寝るときは子どもに声をかけて寝る	77.2	13.7	5.9	3.2	76.5

2) 母親のライフスタイルと生き方

「食事は手作りが多い」は「とても十わりと」そうを合わせると90.8%、そして「年に1、2回の家族旅行に行く」67.4%、「ゴミの分別や環境問題に配慮している」87.1%など、子どもの世話をしながらもバランスの取れたライフスタイルの母親も多い【vol.21-1 表3-9】。とくに一人っ子の母親には、洗濯や掃除、料理も好きで夫の世話もよくする一方で、外出や仕事も積極的でおしゃれでもある。家庭内と家庭外の生活をうまく両立させている傾向がみられ、少子化時代の新しい子育てスタイルといえそうである【vol.15-1 表25】。また、将来「子どもとの同居を望まない（「あまり同居を望まない＋まったく同居を考えていない」）」親は77.2%、「将来、介護が必要になっても、子どもに頼らない（「あまり＋まったく」みてほしいと思わない）」親も62.7%と子どもにつくすが子どもに頼らない生き方を望んでいる【vol.21-1 表4-13・表4-14】。

表12-2でこのようなライフスタイルを持つ母親たちの生活の満足感（「とても十わりと」満足している割合）をみると、夫や子どもとの関係では「子どもの成長（性格面）」「夫と妻との関係」について7～8割の高い満足感を持っている。自分の生き方について

も「友人関係」「母親として」「妻として」の満足感は7～8割と高い。しかし、自分の生き方に自信があるかを尋ねると「とても自信がある」3.7%と「わりと自信がある」25.3%を合わせても3割にも達しない【vol.21-1 表3-18】。母親の生活の満足度は経済的ゆとりやジェンダー観とも関連している【vol.17-1 図6-1・図6-2・図6-3・図6-4・図6-5・図6-6】。少子化の進行によって母親たちはかつての「子育てだけの人生」から解放された。しかし、母として、妻としての満足感実感できるものの、自分の生き方に充実感や自信が持てないで戸惑っている姿がうかがえる。

前節では子どもからみた父親像・母親像の変化を追った。図12-4では母親からみた父親像（夫像）・母親像（自己像）を示した。全体としては両親で協力し子育てをしている印象をうけるが、父親は「がんばりや」「経済力に自信がある」「政治経済や社会的な関心が高い」で母親の数値を大きく上回っており、一方、「子ども好き」「子どもの教育に熱心である」としており、「家庭も仕事も」を実践している父親像が浮かんでくる。この結果は子どもの評価するマルチ・ロール型の父親像と重なる。

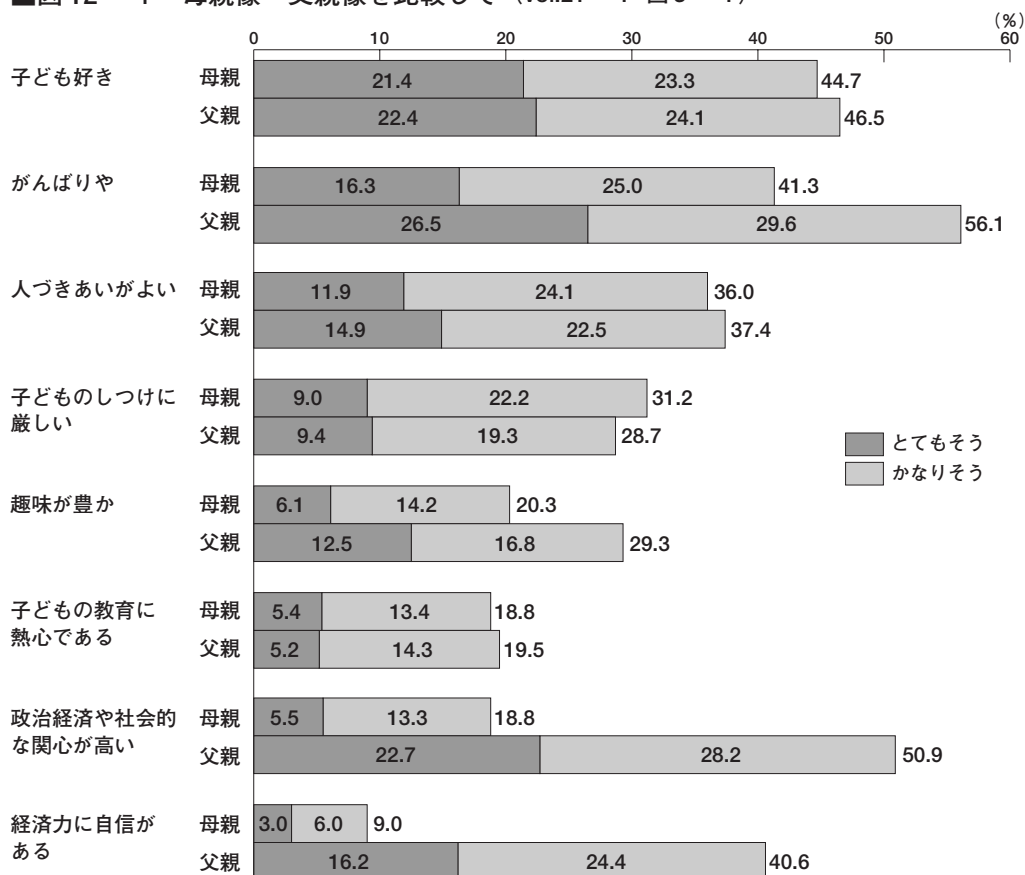
■表12-2 子育てや夫婦、今の自分の生き方についての満足感

(vol.21-1 表3-16・表3-17)

	とても満足している	わりと満足している	小計	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない
子どもの成長（勉強面）	9.7	60.1	69.8	26.1	4.1
子どもの成長（性格面）	18.2	64.6	82.8	16.1	1.1
夫と妻との関係	16.7	57.0	73.7	19.5	6.8
夫と妻の家事分担	10.3	48.9	59.2	29.3	11.5
妻として	10.1	59.7	69.8	25.1	5.1
母親として	11.9	66.5	78.4	20.3	1.3
友人関係	15.8	62.7	78.5	18.8	2.7
趣味や余暇の時間	9.7	41.8	51.5	38.4	10.1
自分の仕事（している割合）	12.5	53.5	66.0	28.8	5.2

(%)

■図12-4 母親像・父親像を比較して (vol.21-1 図3-1)



3. 居場所としての家族

1) 子どもにとって家族とは

子どもにとって家族の範囲は、父親・母親・きょうだい以外は同居しているかどうか
が境界線となる。一方、家で飼っている動物
や世話をしている植物などを家族と考える子
も3割おり、身近で愛情を持って世話するこ
とで擬似的な家族意識を持つようだ【vol.22-
3 図2-1】。祖父母との距離では、「同居」
を希望する子は約3割にすぎず、「隣の家」
と「近距離（徒歩で10分か15分くらい）」が
合わせて4割を超え、「遠距離（車で20～30
分以上）」が3割である【vol.22-3 巻末集
計表】。

次に、子どもが捉える自分の家族について
尋ねた。「私はこの家の子どもに生まれてよ

かった」に「とても十まあ」そうと答えた子
は9割を超え、次いで「家の人が家に帰って
くると、みんながうれしい気持ちになる」
「嫌なことがあっても、家の人たちと一緒に
いると元気が出る」「私の家では、みんなが
自由に意見を言える」「私の家の人たちは、
みんなで一緒におしゃべりをするのが好き
だ」「うちの家族はまとまっている」「私の家
の人たちは、みんなで一緒に何かをするのが
好きだ」が6割を超える。両親の関係も「私
のお父さんとお母さんは、仲がいい」が7割
を超え、家族の仲がよく、家族で一緒にいる
ことを好んでいる傾向がみられる【vol.22-3
図2-5】。

2) 居場所としての家族

図12－5は、家の居心地をみるために、家族に対して感じている否定的な感情を子どもに尋ねた。「とても十わりと」その数値に着目すると、「親は自分の気持ちをわかってくれない」36.6%、「友だちの家がうらやましい」24.7%、「親の機嫌が悪く、家の中が暗いことがある」19.8%、「家ではがまんばかりしている」18.2%、「家出したいと思うことがある」18.0%と、多くの子どもたちが家族に居心地の良さを感じているなかで、親の感情や気分に関心していることもうかがえる。また、「自分は親から大事にされていない」、すなわち親に愛されていないと感じている子も1割いる。

さらに、家で子どもが落ち着く時間を尋ねてみた。「家の人たちみんなで食事をしているとき」「家の人たちみんなでテレビを見ているとき」「親とおしゃべりをしているとき」「自分の部屋にいて何かしているとき」が落ち着くと、8割の子は答えている【vol.22－3

図4－6】。そして、家族が危機に陥ったとき、親は「ぜったいがんばれる」48.3%、「たぶんがんばれる」44.3%を合わせると9割以上の子が親を信頼し危機を乗り越えられると感じている【vol.22－3 図4－9】。

近年虐待の増加など家族崩壊が進み、子どもの健やかな成長が妨げられている印象があるが、調査結果からみると家庭はおおむね安定し、悩むことはあっても自分の家族が好きで、自分の家は子どもにとっての居心地のよい居場所になっている。また、子どもが親を「仕事が好きでよく働き、家族を一生懸命支えてくれる」と感じるとき、子どもが家族の中に居場所を見いだし安定感を持って育っていくということは、時代が変わっても普遍的なようである。そうした中で、1割程度の子どもたちにとっては、家庭にいても落ち着かず不満を持っている。家族から大切にされないと思うなど、一部の子どもにとっては必ずしも家族が居心地のよい居場所にはなっていないことに不安を感じる。

■図12－5 家の居心地 (vol.22－3 図4－1)

	とても十わりとそう	少しそう	ちがう (%)
親は自分の気持ちをわかってくれない	36.6	30.5	32.9
友だちの家がうらやましい	24.7	30.0	45.3
親の機嫌が悪く、家の中が暗いことがある	19.8	25.1	55.1
家ではがまんばかりしている	18.2	23.9	57.8
家出したいと思うことがある	18.0	24.7	57.4
親の間で、ケンカが多い	16.3	24.0	59.7
自分の家族は気持ちがバラバラだ	15.3	29.8	54.9
家にいても落ち着かない	14.2	20.5	65.3
自分の家はつまらない	11.7	22.3	66.0
自分は親から大事にされていない	11.7	14.9	73.4

13

子どもの病理

深谷和子

近年、子どもの中には様々な種類の不適応問題が生まれ、また、種々の社会的状況の中で、「被害者」「加害者」の立場に身を置く子どもが出てきている。この章では「いじめ」「不登校」「虐待」をとりあげる。

〈この章で用いた号〉

深谷和子・中原美恵（1991）「登校拒否—母親調査から—」vol.11—3

深谷和子・杉山和義・遠田瑞穂・熊澤幸子・中原美恵（1996）「いじめ」vol.15—5

深谷和子・斎藤浩子・熊澤幸子・石川芳子・吉野真弓・持田恭子（2002）「チャイルド・アブユース—親による適切でない扱いの影響—」vol.22—1

深谷和子・斎藤浩子・熊澤幸子・羽矢節子・出水衣絵（2003）「『いじめ』の残したもの」vol.23—2

1. 母親の語る不登校

不登校は、最近の子どもの不適応問題の中でも最大のもののだが、学校を忌避する感情は、昔から多少ともあったに違いない。母親に自分の生育歴の中で、学校への「行きしぶり」傾向がなかったかを尋ねている。

1) 母親の行きしぶりとその原因

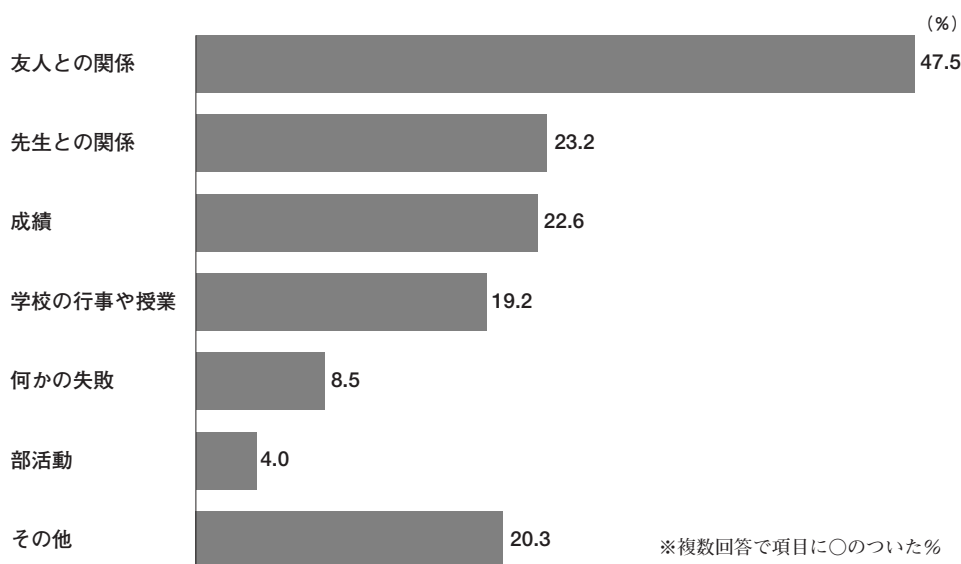
子ども時代に母親自身、学校への行きしぶり（登校したくない感情）がなかったかをみると、1割近くが「はっきりあった」、4割強が「少しあった」と答えている。それが親を困らせるほどだった（「はっきり十少し」あった）と答えた者も24.9%いた【vol.11—3 図1—2・図1—3】。今日ほどではなくても、学校はいつの時代も、時にはあまり「行きたくない場所」であったのだろう。そして、図13—1にあるように、きっかけの最たるものは、自分の子どもと同様に「友人との関係」

だったことがわかる【vol.11—3 図2—6】。また、母親の子ども時代の行きしぶりの原因を聞いてみると、「性格的にひ弱だった」が4割を超えている【vol.11—3 図1—5】。

2) 子どもの場合

自分の子どもに「行きしぶり」がなかったかを母親に聞いてみると、「はっきり十少し」あったと答えた者は44.1%にもなっている【vol.11—3 図2—4】。「行きしぶりが、はっきりあった」子のその期間を聞いてみると、「1週間以内」が19.9%だが、「1年以上長期にわたって」続いた子も13.3%いる。1か月以上行きしぶりが続いたケースは55.6%にも及ぶ【vol.11—3 図2—7】。行きしぶりを乗り越えさせるための親の努力が、本格的な不登校を防ぐ場合が多いのであろうか。

■図13-1 学校不適応のきっかけ（母親の子ども時代）（vol.11-3 図1-4）



2. いじめ

いじめに関しては2回扱われている。1995年5月～7月と2002年11月～12月に行われた、大学生対象の回顧的調査である。

1) 小・中学校時代のいじめ体験

1995年調査で小・中学校時代にクラスでいじめがあったと答えた大学生は、小学生時代で60.7%、中学生時代で53.1%である【vol.15-5 表2】。自分が被害者だった者は、小学校時代で11.6%、中学校時代で8.2%もいる【vol.15-5 表3】。中学校ではいじめは減る傾向がみられるが、いじめは悪質さの度を高めるようになる【vol.15-5 表7】。

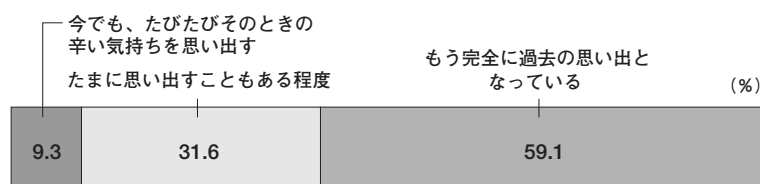
いじめられた子には「弱点や性格の特徴があった」とみる者が7割を超える【vol.15-5 表12】。いじめている集団にいじめをやめるように働きかけた者は約3割（「少ししたが、断念した十かなりしたが、失敗した十働きかけて成功した」割合）で、そのうち働きかけを「少ししたが、断念した」割合は約2割と高い【vol.15-5 表10】。

2) いじめが残したもの

ここからは、2002年の調査で扱った、いじめられ体験の後遺症を扱う。

図13-2は、今に残るいじめの体験の深刻さである。いじめられた体験を持つ者の1割は「今でも、たびたびそのときの辛い気持ちを思い出す」としており、「たまに思い出すこともある程度」を合わせると、4割が心に傷を残している。表13-1は、当時いじめられていた子がその後どうなったかを聞いてみた割合（周囲に「いじめ」がまったくなかった者を除く）だが、「仲間に戻って、元気にやるようになった」子は3割でしかない。3割弱の子が何らかの不適応を引きずっていく。「クラスが替わったり卒業などで、その後は知らない」という中に、深刻なその後をたどった者がいたに違いないだろう。いじめを軽くみてはいけなことを痛感させられる。

■図13-2 「いじめ」にあった記憶 (vol.23-2 図1-1-1)



■表13-1 「いじめ」の被害者のその後 (vol.23-2 表1-1-6)

	(%)
仲間に戻って、元気にやるようになった	30.7
不登校になった	10.0
学校に来ていたが、教室には入れなかった	1.7
「いじめ」がなくなっても、クラスにはとけ込めなかった	13.3
転校していった	3.3
後に自殺したと聞いた	0.2
小 計	28.5
その他	13.0
クラスが替わったり卒業などで、その後は知らない	27.8

3) いじめの渦中にあった当時の心身症状と対処

図13-3は、いじめにあっていた者の当時の心身状態である。食欲や睡眠などへの身体症状、不登校やひきこもり傾向、抑うつや不幸せ感、学業への影響、攻撃性の発揮など、少なからず深刻な状態が起こっていたことがわかる。その深刻な状態に、親や教師は気づかなかったのであろうか。「気づいていた」と「たぶん気づいていた」の数値を合わせても、親については53.3% (男性)、57.0% (女性)、担任については44.3% (男性)、38.0% (女性) でしかない【vol.23-2 図1-2-3・図1-2-4】。

いじめに対する対処行動は、「空想にふけた」「テレビに熱中した」「ゲームに熱中した」

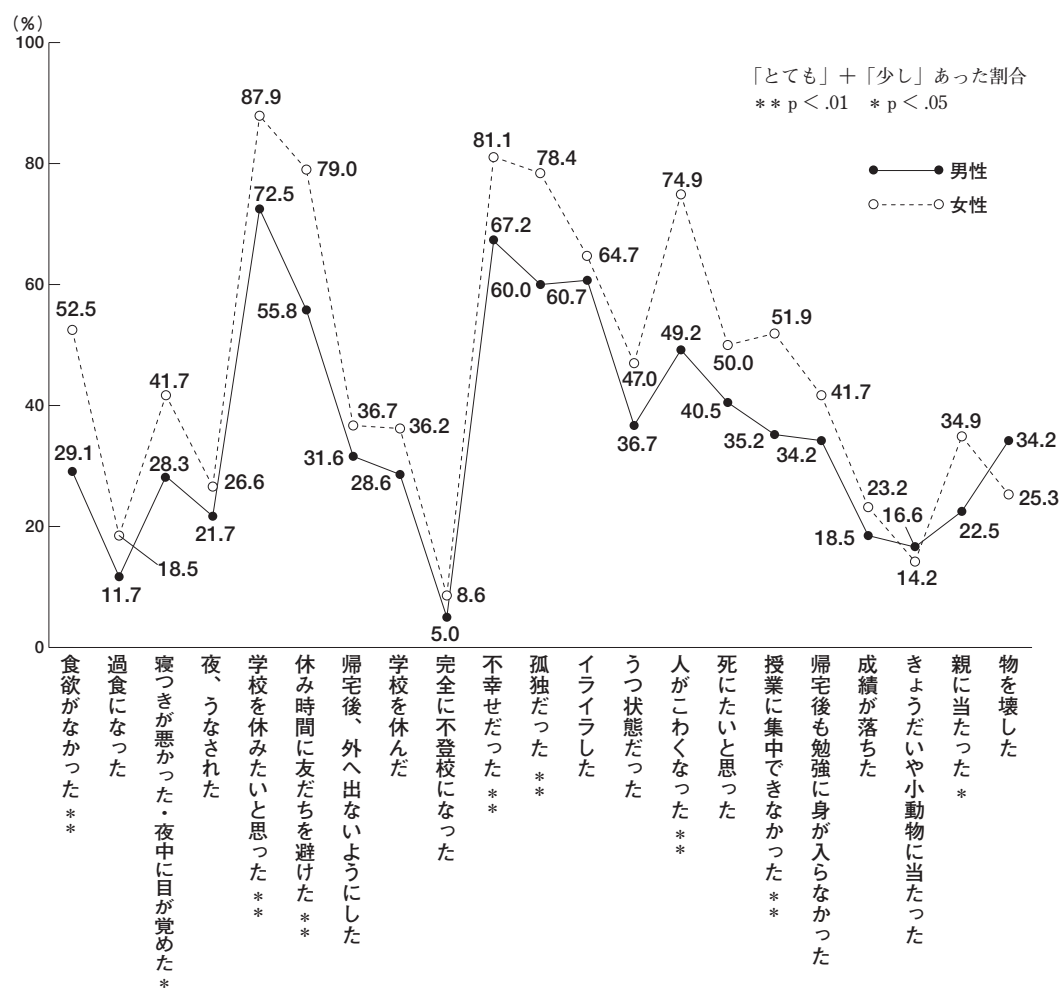
「よく音楽を聴いた」などである【vol.23-2 図1-2-2】。本人が必死に様々な方法で対処しようとしていたことがわかる。

4) いじめを受けた心理的後遺症

いじめから受けた心の傷は、いじめ集団が解散してもそう簡単になくなるわけではない。被害者の中に、後までも深刻な傷痕を残す場合が多い。性格、対人関係、人間観などの歪みの発生が、表13-2に示されている。

いじめが日常化している中で、それに誰もが慣れ過ぎて、対応を怠っていないだろうか。虐待同様、いじめが治癒の難しい心の傷を生み出すことを、もう一度考えてみなければならぬ。

■図13-3 一番辛かった「いじめ」のときの体験×性 (vol.23-2 図1-2-1)



■表13-2 「いじめ」のネガティブな影響×性 (vol.23-2 表2-1-1)

	(%)		
	全体	男性	女性
つきあう友だちを選ぶようになった	43.3	42.2	43.6
人と話すのに神経を遣うようになった*	39.5	29.5	42.2
人を信じられなくなった	33.5	32.8	33.7
心が傷つきやすくなった	35.7	30.6	36.9
自分に自信が持てなくなった*	42.1	30.6	45.1
何かと人に合わせるようになった**	36.5	24.6	39.6
人間関係が苦手になった	33.2	29.7	34.1
みんなの中に入るのがこわくなった	30.3	23.1	32.2
頼れるのは自分だけだと思うようになった**	23.1	30.5	21.1

「とても」+「わりと」そうの割合
** p < .01 * p < .05

3. 子どもへの虐待

1) 3種類の虐待をめぐって

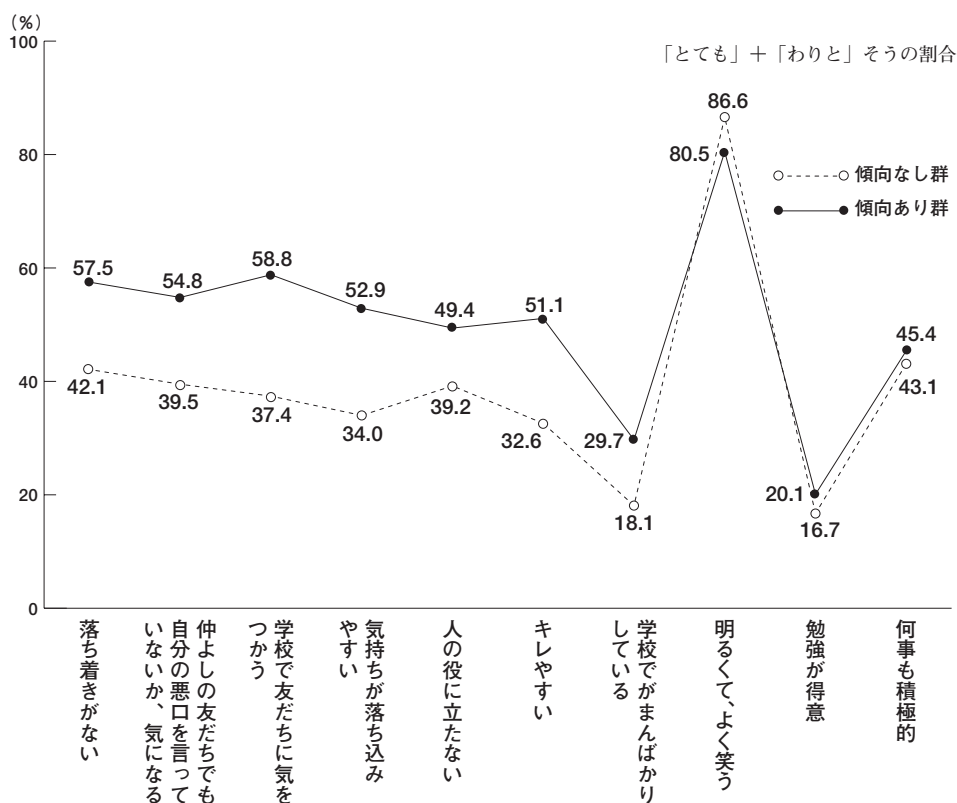
児童虐待は4種類に分けられるが、そのうち身体的暴力、精神的暴力、ネグレクトについて、中学生に、小学生の時期までに親からどんな養育をされてきたかを聞いた調査である。「頭や体のどこかをなぐられた」「ほほをたたかれた」など身体的暴力についての具体的な項目とその体験を示した【vol.22-1 図2-1】。他の虐待も、ほぼ同様な頻度で、虐待的行為を受けた子どもがいる【vol.22-1 図2-2・図2-3】。調査サンプルの824人の中には表面化しなかったものの、明らかに親から深刻な虐待を受けていた子どもが数人も含まれていた。

2) 自己像との密接な関連

3種類の虐待の構成項目を加算して得点化し、「傾向あり」と「傾向なし」の2群に分けて、自己像の各側面との関連をみたところ、虐待はどの種類であれ、子どもの自己像を否定的で暗いものにする結果がみられる。

図13-4は身体的暴力傾向と自己像の関連であるが、他の2種類の虐待についても全く同様であった。臨床のケースの中では、幼児期に親から虐待を受けた場合に、その人格発達に長く悪影響が残ると報告されているが、このアンケート調査の結果からも、虐待の深刻な影響をみることができる。

■図13-4 自己像 × アブユース傾向有無（身体的暴力）(vol.22-1 図3-3)



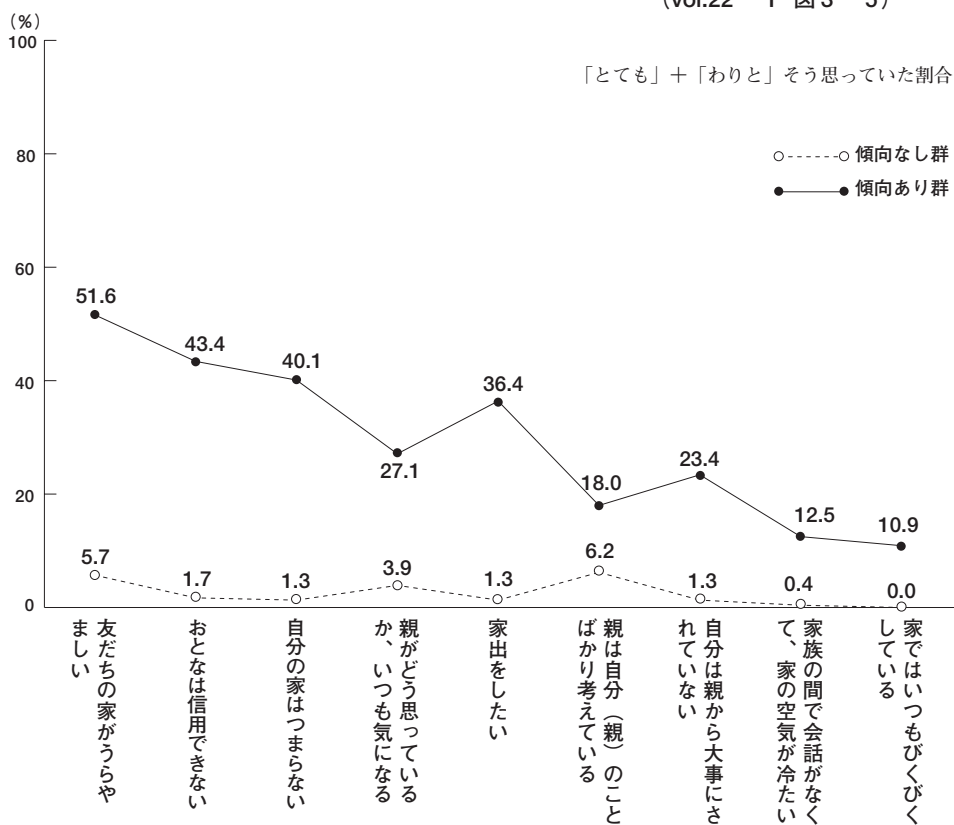
3) 家庭と親に対する感情

図13-5によると、受けていた精神的暴力傾向と子ども時代に持っていた家族への感情は密接な関連がある。他の虐待も同様である。また親への愛着をみるために、親の老後を自分で世話したいかを聞いた表13-3によると、ネグレクト傾向にあった者は、親の世話

を他人に任せようとする。他の虐待も同様であり、虐待を受けると親への愛着が育たないことが示されている。

家庭という密室の中での親の行為には、不適切な養育の仕方でも多分に含まれている。子どもの人権を守るために、何らかの方法で、外部からもっと目を届かせる必要がある。

■図13-5 子ども時代の家族感情 × アビュース傾向有無（精神的暴力）
(vol.22-1 図3-5)



■表13-3 将来の親の世話 × アビュース傾向有無（ネグレクト）(vol.22-1 表3-10)

	将来の親の世話（％）		
	同じ家に住んで、親の世話をしたい	親の家から遠くないところに住んで、できるだけ世話をしに行きたい	老人ホームなどの施設で、専門家に世話をしてほしい
傾向なし群	50.5	46.3	3.2
普通群	41.6	53.6	4.7
傾向あり群***	26.6	55.6	17.8

*** p < .001

14

子どものからだ・ ストレス

及川 研

ここでは現代の子どものからだをめぐる問題やストレスについて考察する。

〈この章で用いた号〉

中原美恵 (1991) 「子どもとストレス」 vol.10-12

田村毅 (1994) 「子どもの疲れ」 vol.14-3

深谷和子・石川洋子・中原美恵 (1995) 「心配と不快体験」 vol.15-3

深谷和子・及川研・小川正代・猿田恵一・吉野真弓 (2000) 「運動の苦手な子」 vol.20-1

深谷和子・及川研・平野真穂・石川芳子・小川正代・市川薫子 (2001) 「子どものやせ願望—見た目を気にする子どもたち—」 vol.21-2

1. 運動の苦手な子

vol.20-1「運動の苦手な子」の調査でわかったことからみていく。まず、苦手意識を持っている子が多い運動は大別して2つある。マラソンのように身体的に苦しくなりやすい運動と、サッカー・ドッジボールのように上手な子に追従できないと痛かったり怖かったりつまらなかったりする運動である。自分ができるできないの問題ではなく、しんどいことの受け止め方やできる人との関係の方が苦手意識に影響を与えているように感じられる。

さらに、興味深い結果がみられたのは、運動の得意・苦手と小さい頃の遊び経験との関係についてだ。小さい頃に「高いところののって遊ぶ」「いろいろなところによじ登る」「いろいろなところにぶら下がる」「少し高いところから飛び降りる」など、高さの変化を伴う遊びを多くした者は運動が得意な子に多

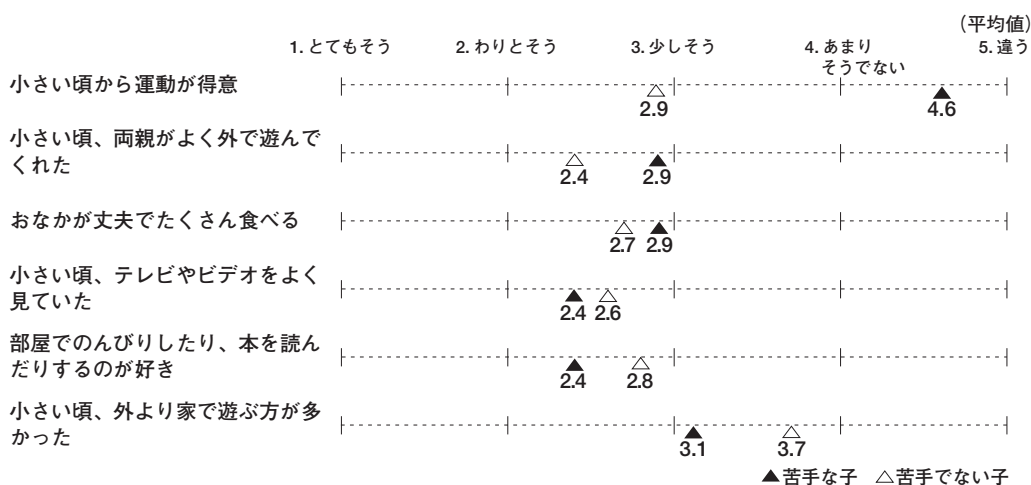
く、苦手な子はその逆である傾向がみられた【vol.20-1 図4-8】。小さい頃から、このような高さの変化を伴う動きに親しんでいる子は活動的なのであろう。運動の得意・苦手を自覚するより前の幼少の段階で、そういった動きに馴染む機会を与えるか、「危ないからやめなさい」と遠ざけてしまうかで、子どものその後は大きく異なる可能性があるように思われる。

それを裏づけるようなデータがある(図14-1)。運動が苦手な子は「小さい頃、両親がよく外で遊んでくれた」経験が少なく、「小さい頃、外より家で遊ぶ方が多かった」「部屋でのんびりしたり、本を読んだりするのが好き」などの経験が多い傾向にあった。親が子どもに対してどうかかわるか、直接の触れ合いがあるか、外で体を動かすような遊び方を肯定的に捉えるかどうか、といったこ

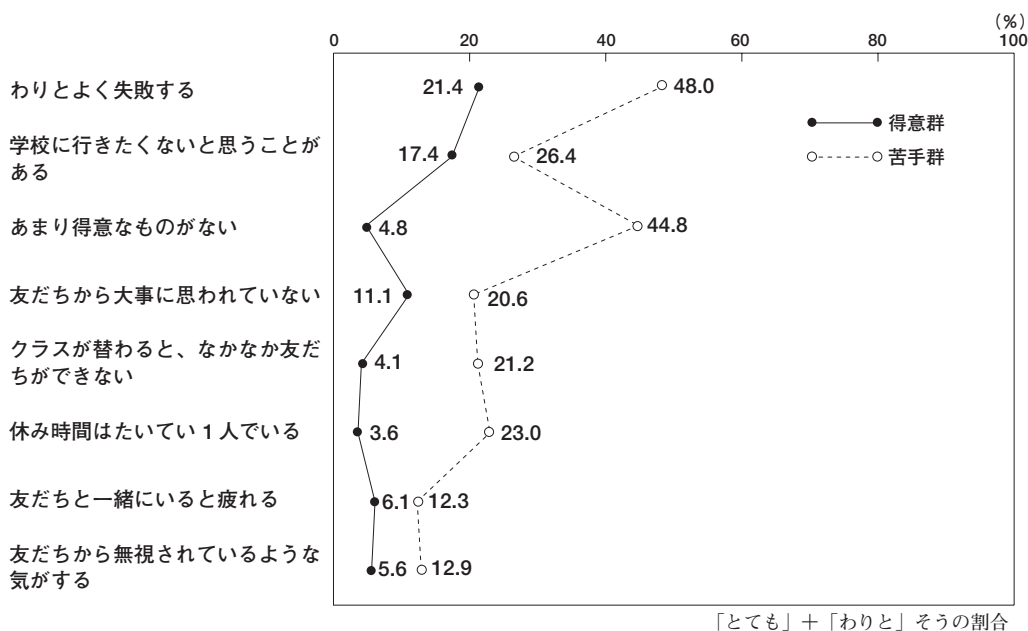
とが、子どもの成育にとって重要な意味を持つことが推察できる。また、運動が苦手な子にみられる傾向として、図14-2の「友だちから大事に思われていない」「休み時間はたいてい1人でのいる」などで、「とても十わりと」そうと答える割合が高く、学校での人間

関係がネガティブであったり、「あまり得意なものがない」「わりとよく失敗する」のようにネガティブな自己イメージを持つ割合が高かった。学校が、疲れるところ、行きたくないところになっていく過程が透けて見えるような結果であった。

■図14-1 「運動種目による苦手群」と「それ以外」での「過去の経験や自分の傾向」の差 (vol.20-1 図4-6)



■図14-2 学校での友人関係 × 運動得意・苦手 (vol.20-1 図5-2)



2. 物事に取り組む姿勢・対人関係をうまく作る力

「運動が苦手な子」についての考察から、現代の子どもの「運動が苦手」という現象は、単に運動だけの問題にとどまらず、日常の外遊び、両親の接し方などに関連があることが再確認できる。そしてそのような経験・成育環境が、運動能力をはじめとしメンタルな部分や友だち関係にまで影響を及ぼしていることに気づかされる。

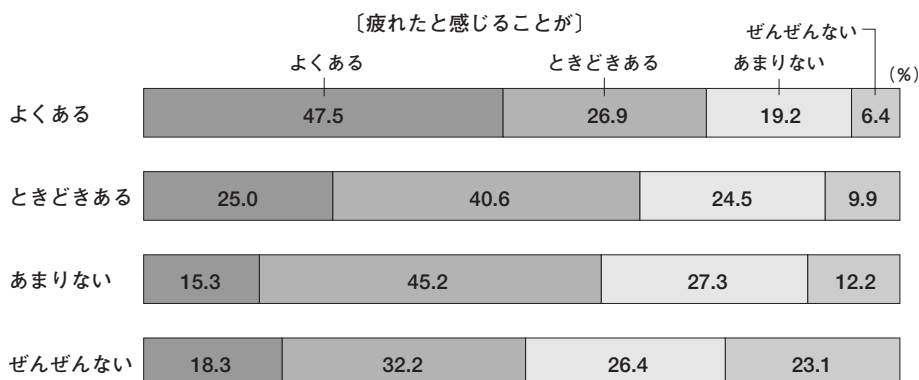
「小学生ナウ」の他の号など様々な調査の結果も参照すると、子どもの成育にとって意義のある経験として、①「自分の興味関心に添って、自分の意志で取り組む活動」、②「子ども同士の交流を通じた対人関係の経験」、③「周囲のおとながよい手本となっていること」の3点があげられると思う。そして、それらの経験を通して「物事に取り組む姿勢」や「周囲の人との関係をうまく作る力」が育っていることが望まれるのであるが、現代の子どもたちはこの2つが未発達である場合が多いように見受けられる。キレる子、殺人などを犯す子、学級崩壊などのような問題

の根っこにもそれらの点があると考えられるケースが多い。

ごく普通の子の場合でも、物事に取り組む姿勢があって自分の興味関心に基づいて様々なことを楽しんだり学んだりしている子どもは、結果がどうあれ充足感を得やすいと考えられる。成功のためにがまんがいるようなことも、自分がこれをやりたいという動機がある場合はがんばりがきく。しかし、人から「これをしなさい」とか「これをやってみたら」とか「こちらの方がおもしろいよ」と言われるままに遊んだり学んだりしていたらどうだろうか。たいしておもしろくなくればすぐ飽きるし、ちょっとうまくいかなければ投げ出したくなるだろう。上々にできたとしても、自分がうれしいと思うよりも、勧めた人の反応を気にすることになると予想がつく。

粘りが無い、すぐあきらめる、がまん強さが無い、感動しない、責任感がないなどのありがたくない評価のウラにも、そんな事情が

■図14-3 友だちとうまくいかない×疲れ (vol.14-3 図21)



隠れていると考えることができる。

また、まわりの人との関係をうまく作る力が育っているかどうか、子どもにとって大切な点である。人との間でコミュニケーションがとれる、許すことや思いやることにより行き違いや対立がないように工夫する、思い通りにいかないときやトラブルのときに適切な対処ができるというのであればストレスも少なくすむのだろうが、現代の子どもたちはこういった力が不足している。

子どものストレスや疲れをみていくと、これらの点が要因となっているものが多くあることがわかってくる。

実際に、子どもがどんな場面で疲れを感じるかをみてみよう。「授業中イライラする」という子どもは、楽しく授業に取り組めていない子と考えられるが、彼らの感じる疲れはイライラしない子に比べて大きいことがわかる【vol.14-3 図22】。

やりたいこと、楽しいと感じることに取り組んでいれば「疲れ」や「飽き」とは縁遠いだろうが、子どもが意欲を持ちにくい現状では、授業も苦痛となって教える方とて簡単ではないだろう。

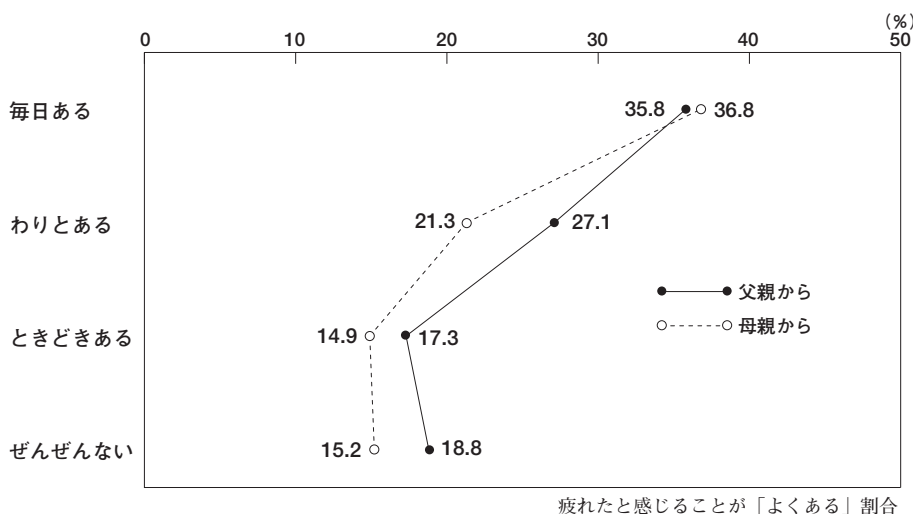
また「友だちとうまくいかない」という思いを持った子ほど「疲れ」を感じる頻度が多いことがわかり（図14-3）、「友だちからいじめられる」「友だちから無視される」という思いを持つ子についても同様の結果であった【vol.14-3 図19・図20】。

「まわりの人との関係をうまく作る力」が自分も相手とともに未発達であれば、子ども同士のつきあいの中でストレスfulなことが頻繁に起こるのも無理はないと思われる。

一方、家庭においても、親には自分のサポーターでいてほしいという気持ちが無意識のうちにあると思われるが、両親から注意されることが多い場合（図14-4）や両親が頻繁にケンカをしている場合【vol.14-3 図28】のように、子どもの期待と逆行する親の言動によってストレス・疲れが生じるようである。

子どもと親密なコミュニケーションをとっていること、言動や考え方の手本を示していることなど、親にとって大切なポイントを外している場合が少なからずあるように推察できる。

■図14-4 両親から注意される頻度 × 疲れ (vol.14-3 図25)



3. 見た目を気にする子どもたち

発達心理学では、自己中心的なのが子どもの特質だとされてきたが、最近では「他者から自分がどうみられるか」が自分の存在価値を決める重大な関心事になってきている傾向がみられる。

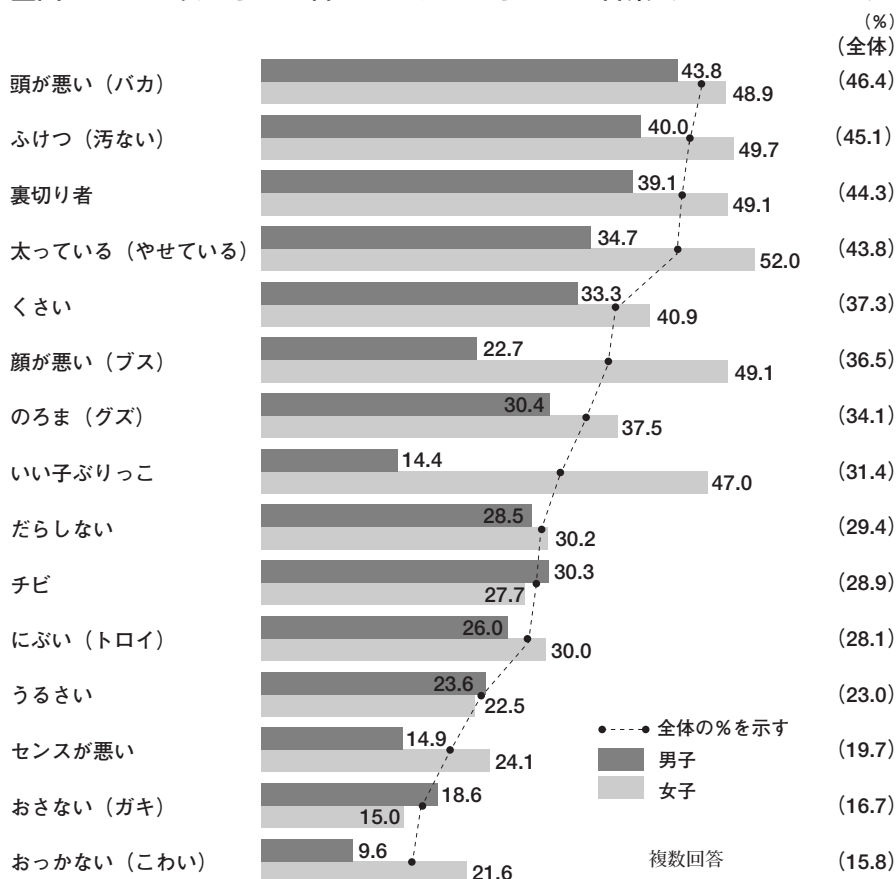
vol.21-2「子どものやせ願望」のデータの中にも、そうした現代の子どもの姿を垣間見ることができる。「自分が自分としてどうか」よりも「人にどう見られるか」「どう見られたいか」に重きを置く子どもが増えている。そうした中で、「やせ願望」が子どもの間にも広がってきている。とりわけやせ願望の強い子には、学校での友人関係や家庭での

親子関係が問題として浮かび上がってきている傾向がみられ、「運動や遊びをよくする子」「自分自身を持っている子」との違いが際立つように感じられる。

再び、ストレスや疲れについて目を向けると、「どう見られるかが気になる」現代の子どもたちが、人から評価される場面では、異常なまでに神経をすり減らし「疲れている」様子が読みとれる【vol.21-2 図5-11・図5-12】。

また「友だちから言われたら“おちこむ”言葉」(図14-5)をみると、容姿などをけなす言葉や人格を傷つけそうな言葉まで、随

■図14-5 友だちから言われたら“おちこむ”言葉 (vol.10-12 図19)



分と口悪く使われているようにみえる。かつての漫才ブーム以来、攻撃的な言葉で平然と人を揶揄する文化が、子どもの間にも定着しているかに思われる。そのような言葉を浴び

せられないように、友だちに気を遣いながら、見た目を気にして、悪くみられないように、恐る恐る学校生活を送っているのだとしたら、残念なことである。

4. 足りないものは何か

以上から、現代の子どもの育つ環境で不足するものを考えてみる。たびたび指摘されてきたことだが、外で仲間と体を動かす遊びが減少し、地域の中での仲間集団・群れ遊びもなくなってきていることが第一であろう。運動が苦手になる、ストレス・疲れ（身体的・精神的）も多く感じられるなどの他、半健康・不定愁訴などもその影響とあってよい。「何となく疲れた」「眠くなる」「学校へ行きたくない」などのデータをみるにつけ、現代の子どもたちの、やる気・意欲・興味関心の弱さとの関係が思い浮かぶが、遊び体験の不足にその根があると思えてならない。

また、精神的粘り強さ、ストレス処理能力、対人関係能力の低下、他人の目を気にする気質なども、仲間遊びの中での対人関係の経験不足と関連があるのは確実と思われる。上記のような群れ遊びを多く経験していれば、自然と身についていくはずのものだと思うと残念である。

もう一点は、子どもに対するおとなの接し方である。親が子どもとの間で親密なコミュニケーションをとっていない、親が子どもに直接かかわらないとか触れ合おうとしないと

いったケースが少なくない。遊びも運動も勉強も外注化したり、機械に頼ったりするのが一般的になっていて、親から子どもに伝わるものが乏しい。このようなことの積み重ねが、子どものストレス・疲れの原因となったり、情緒の安定にマイナスとなっているのであろう。

親自身が遊びを知らない、親が生活の手本を示せない、親がケンカして子どもにストレスを与えるなど、親の未熟さが指摘されることもある。「子ども中心」より「親中心」の生活を優先したり、「子どもは未完成なもの」「迷惑をかける存在」であることに寛容でないおとなたちから、半人前であることを許されない子どもは、「子どもらしい子ども」ではなく「おとな的な子ども」を演じることになる。その結果、望ましい育ちができずに結局「子どものようなおとな」になる心配も増えている。

子どもたちの未来を考えると、子どもの育つ環境のうちの望ましくないところは修正して、「子どもらしい子ども」時代を過ごせるようにしてやりたいと願わずにはいられない。

15

国際比較

深谷昌志

1. 学校の楽しさ

世界のいろいろな都市を訪ねると、それぞれの社会を反映した学校に出会う。アメリカの町へ行くと、いかにものびのびとした明るい雰囲気の学校がある。ドイツには、アメリカと比べると、秩序のとれた学校がみられる。そこで、外国との比較の中で、日本の学校の特色を捉えてみたい。特に子どもの目から学校の意味を国際的に捉えてみたい。そうした考えで、これまでに数回にわたって国際比較調査を行ってきた。

その中に、子どもにとって、教師がどういう役割を果たしているのか、国際比較調査を行ったことがある。この調査で、学校へ通う楽しさについて質問しているので、その結果を引用してみたい。

表15-1に示したように、東京（日本）、ソウル（韓国）、北京（中国）、ミルウォーキー（アメリカ）、オークランド（ニュージーランド）、サンパウロ（ブラジル）の6都市の小学5年生（11歳の子どもたち）を対象として1995～1996年に調査を行ったのだが、表中の数値が示すように、学校へ行くのが「とても楽しみ」なのが、北京そしてソウルとなる。残念ながら、東京の学校に通う楽しさは、「とても楽しみ」が18.8%で、2割を下回る。その結果、楽しさは、6都市中の最下位である。

表15-2を紹介しよう。表15-1と反対に、

「朝、学校に行きたくない」と感じるかどうかを示している。「学校に行くのを嫌がる」のを、「行きしぶり」と言うことが多いが、行きしぶり（「いつも十わりと」朝、学校に行きたくないと思う割合）の1位はミルウォーキー、2位はオークランド、3位がサンパウロとなる。そして、東京は「行きたくない」と思う割合は相対的に低く、6都市中の5位にとどまる。東京の学校は、楽しくはないが、嫌という感じでもないというのであろうか。表15-1（「とても十わりと」楽しみな割合）と表15-2（「いつも十わりと」そう思う割合）とを重ね合わせて、学校の楽しさを考えると、以下の通りとなる。

北京＝学校が楽しく（①）、行きしぶりが少ない（⑥）

ソウル＝学校は楽しく（②）、行きしぶりも少ない（④）

オークランド＝まあ楽しいが（③）、行きしぶりの気持ちも強い（②）

ミルウォーキー＝オークランドと似ている（④と①）

東京＝楽しくないが（⑥）、行きしぶりも少ない（⑤）

サンパウロ＝楽しくなく（⑤）、行きしぶりの気持ちもある（③）

（ ）内の数値は6都市中の順位

2つの表から判断すると、最も楽しそうな学校は北京、次いで、行きしぶる気持ちは多少あるが、それでも楽しいのがソウルとなる。

そして、表15－3の時間ごとの楽しさでも、北京の学校が最も楽しく、次いで、ソウル、楽しくないのが東京という結果である。

■表15－1 学校に通う楽しさ（第5回 国際教育シンポジウム報告書（1997）表9）

	東京	ソウル	北京	ミルウォーキー	オークランド	サンパウロ
とても楽しみ	18.8	35.2	61.6	26.5	25.5	31.9
わりと楽しみ	36.4	41.3	32.7	32.9	39.5	25.9
小 計	⑥55.2	②76.5	①94.3	④59.4	③65.0	⑤57.8
少し楽しみ	28.6	10.5	5.3	27.0	25.5	32.1
あまり楽しみでない	12.0	9.5	0.4	8.2	6.9	6.3
ぜんぜん楽しみでない	4.2	3.5	0.0	5.4	2.6	3.8

①～⑥は6都市中の順位

■表15－2 朝、学校に行きたくない
（第5回 国際教育シンポジウム報告書（1997）巻末集計表から）

	東京	ソウル	北京	ミルウォーキー	オークランド	サンパウロ
いつもそう思う	6.1	8.4	5.5	14.8	13.2	13.3
わりとそう思う	10.1	9.9	4.1	17.3	13.8	10.5
小 計	⑤16.2	④18.3	⑥9.6	①32.1	②27.0	③23.8
たまにそう思う	35.7	28.3	9.1	33.3	28.9	32.7
あまりそう思わない	25.6	20.9	9.4	24.3	24.0	18.8
まったくそう思わない	22.5	32.5	71.9	10.3	20.1	24.7

①～⑥は6都市中の順位

■表15－3 時間ごとの楽しさ（第5回 国際教育シンポジウム報告書（1997）表2から）

	東京	ソウル	北京	ミルウォーキー	オークランド	サンパウロ
授業の始まる前	⑥10.2	28.4	①38.4	26.9	26.5	27.0
算数の時間	⑥12.6	23.1	①46.5	32.1	31.6	22.7
体育の時間	⑥47.4	①76.6	57.5	67.8	56.3	72.9

「とても楽しい」割合
①は6都市中の第1位、⑥は第6位を示す

2. 子どもの生活と学校

調査にあたって、各都市の学校を訪ね、学校の状況を聞くと同時に、調査にも立ち会った。そうした印象からすると、子どもからの評価と筆者の見た学校の楽しさとの間に開きを感じられる。もちろん、筆者は6つの都市の学校を比較して順位づけしているのに対し、子どもたちは他所の都市の学校などを知らないから、自分の学校だけを見て評価を下す。したがって、比較教育的に学校を捉える見方はともあれ、子ども自身の判断では、一番楽しく学校へ通っている子どもが多いのは北京なのであろう。

しかし、筆者の目に映ったのは、子どもが最も楽しそうなのはミルウォーキーの学校、次いで、オークランドの学校だった。学校がカラフルで、全体に明るく、子どももののびのびとしている。教師もきめ細やかに子どもに接している。どの子どもも充足感を持ってそうな学校だった。

それに対し、北京とソウルは、教師が学級で一斉授業をするスタイルである。日本の学校と共通している部分が多いので、違和感は少ないが、それでも、子どもは静粛に授業を聞いているだけで、どう考えても楽しいという感じの学校ではない。

こうした調査を行ってみると、子どもの置かれている状態が学校の居心地と関連しているのがわかる。協力してくれたサンパウロの小学校は調査当時、午前7時、11時、午後3時、7時の4部制だった。慢性的に教室不足のため、1つの教室を4回に分けて使う。学校は教室だけで、運動場はむろん、理科の実験室も音楽室もない。同じ教室を1日に4回使うので、教室に子どもの絵を飾ったり、壁新聞をはったりできず、教室は殺風景だった。

午前は働かないでいい子どもの学校、午後は昼間働く子どもの学校である。そして、町には学校へ行けない子どもの姿が見られた。

それだけに、子どもたちは、学校へ行けるだけで幸せに思えるのであろう。

北京の学校も当時、建物は立派ではなく、授業を見ていても楽しいとは思えなかった。しかし、北京では、親たちの世代は文化革命の影響で学校へ行けなかった経験を持っている者も多く、最近まで、社会主義の雰囲気が強かった。自由な感じで学校へ行けるようになったのは調査当時からここ10年来のことだという。そう考えると、子どもたちが学校は楽しいというのも理解できるような気がする。こうした国際比較的な視点で捉えてみると、学校での居心地は、社会の中で学校が占める位置と関連しているのがわかる。

日本でも子どもをめぐる状況が厳しく、就学するのが困難だった時代には、質素で何もない学校でも、学校へ通えるだけで、子どもは十分に幸せな感じを持てた。学校にいる間は働かなくてよい。それだけでもうれしいが、その上、勉強ができて、習得したものを職業に生かしていける。日本の明治期や大正期の学校も、現代と比べた場合、学校がそれほど充実し楽しかったとは思われない。ただ、当時の子どもたちは、学校へ行けるだけでもうれしかったのではないか。

それと同時に、開発途上の社会にとって学校は、社会の先進地域である。すでにふれた明治期の学校が持っていた革新性の多くは、西欧をモデルにしたものだった。そして、実際にも、西欧のスタイルを取り入れれば、現状を打破する革新的な性格を持ちえた。

しかし、社会が成熟してくると、家庭や地域の条件が整備されてくるので、学校だけが楽しいという状況は失われる。それと同時に、産業化された社会では企業やマスコミなどが先進地域となるので、学校が社会をリードする構図は成り立ちにくい。

3. 教師の指導の型

現在の日本は高度に成熟した電子メディア社会下にある。不況といっても、子どもたちは学校へ通うのは当たり前という感覚を身につけている。少なくとも、ほとんどの子どもが小学校から高校までの12年間就学し、大学進学すらも普通の行為になりつつある。そうなると、子どもたちは通学に新鮮な喜びを見いだしにくくなる。というより、長い期間学校へ行かねばならないという義務感の方が強まる。

さらにいえば、グローバル化が進む現在、欧米の情報が日本にも同時に伝えられる。したがって、欧米をモデルに学校を作っても、明治期や大正期の頃のようなインパクトを与えにくいのではないか。そうかといって、次の世代をリードするような新しい学校システムの開発は言うは易く、行いにくい。

このように考えてくると、一昔前なら学

校へ行くだけで、子どもは幸せだった。そして、社会的にも、少しがんばれば先を見通せた学校づくりが可能だった。それだけに、学校での充足感などを考える必要はなかった。しかし、すでにふれたように、現在では、通学が当然になり、むしろ、行かねばならないという義務感を伴う。しかも、学校へ行っても、胸躍らせるものがない。それにしては、子どもは多くの時間を学校で過ごさねばならない。そうした背景から学校内での居心地が低下する。

それだけに、学校が社会の中でどのような機能を担うことができるか。換言するなら、学校は子どもに何を与えることが可能なのか。そうした観点で、学校のあり方を考えることが重要となる。

学校のこうした姿は、教師のあり方とも関連してくる。表15－4は担任に対する子どもの評価を示している（「とてもそう」の

■表15－4 担任のタイプ（第5回 国際教育シンポジウム報告書（1997）表22から）

	東京	ソウル	北京	ミルウォーキー	オークランド	サンパウロ
えこひいきをしない	*⑥32.6	55.4	51.4	①59.5	49.4	36.2
熱心に教える	⑥28.6	*①84.6	*78.5	46.2	31.4	68.8
教え方がうまい	⑥26.8	①80.4	73.0	*78.6	*62.5	*70.0
授業中、冗談を言って笑わせる	26.4	①35.2	33.9	24.9	21.7	⑥8.4

(%)

「とてもそう」の割合

*はその都市内の最大値

①は6都市中の第1位、⑥は第6位を示す

割合)が、「熱心に教える」のがソウルと北京である。それに対し、表15-5の先生からしてもらったこと(「しょっちゅうある」割合)によれば、「『がんばったね』と励まされた」や「悩みを聞いてもらった」など、子どもを励ます役割はミルウォーキーやオークランドの教師が果たしている。

図式化すると、ソウルや北京の教師は、熱心に教えるという伝統的な役割をきちんと果たしているし、ミルウォーキーやオークラン

ドの教師は、励ましたり、悩みを聞いたりという子どもを支える役割を担っている。しかし、東京の教師は、教える役割に懐疑的だが、支える役割を果たすまで至っていない。そうした意味では、現在の教師は過渡期の迷いの中にいるのかもしれない。そして、ここ数年の学校をめぐる諸問題も明治的な学校から21世紀の学校へ至る過渡期の混乱と思うと納得できるような気がする。

■表15-5 先生からしてもらったこと
(第5回 国際教育シンポジウム報告書(1997) 表20から)

	(%)					
	東京	ソウル	北京	ミルウォーキー	オークランド	サンパウロ
先生からほめられた	⑥6.3	12.3	24.3	①30.6	10.3	11.2
勉強のわからないところを個人的に教えてもらった	⑥6.2	28.3	40.0	①44.3	38.0	38.7
「がんばったね」と励まされた	⑥5.9	17.0	36.0	①75.2	52.0	9.3
悩みを聞いてもらった	⑥3.0	11.9	10.9	①43.3	27.3	18.6

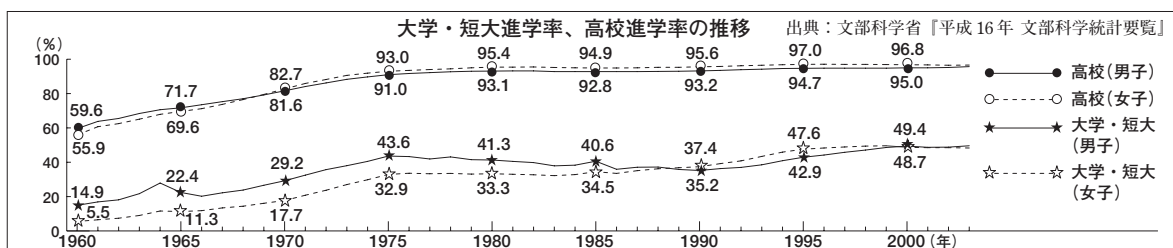
「しょっちゅうある」割合
①は6都市中の第1位、⑥は第6位を示す

〈この章で用いた号〉

深谷昌志・グロリア・ラドソン・ピリングス・ピーター・ステイン・梁泰植・加藤幸次(1997)「第5回 国際教育シンポジウム報告書『子どもにとっての教師～国際比較を通して教師のあり方を考える～』」別冊モノグラフ・小学生ナウ

モノグラフの子どもたちの時代環境

	S35 1960～	S40 1965～	S45 1970～	S50 1975～
社会一般 経済・産業	東海道新幹線開業 (64) 東京オリンピック (64)	いざなぎ景気 (65) 三億円強奪事件 (68)	万国博覧会 (70) 「よど号」ハイジャック事件 (70) 浅間山荘事件 (72) 沖縄返還 (72) 札幌オリンピック (72) 日本列島改造論 (72) オイルショック (73)	ロッキード事件 (76) 日本赤軍日航機乗っ取り (77) 日中平和友好条約 (78) 第2次オイルショック (79)
教 育	高学習指導要領告示 (60) 文部省全国一斉学力テスト (61) 教科書無償制 (63)	教科書裁判提訴 (65) 小学習指導要領告示 (68) 大学紛争 (68～69) 中学習指導要領告示 (69)	高学習指導要領告示 (70) 中教審四六答申 (71)	主任制度化 (75) 小・中学習指導要領告示 (77) 高学習指導要領告示 (78) 教育委員準公選制度 (東京・中野区) (78) 国立大学共通一次試験実施 (79)
食生活・健康		初のレトルト食品 ボンカレー発売 (68)	カップヌードル発売 (71) マクドナルド第一号店 開店 (71) 日本初のコンビニ開店 (74)	ファミリーレストラン (78)
電化製品・生活用品など	カラーテレビ放送開始 (60)	電子レンジ初登場 (66) 3 C (カー・カラーテレビ・クーラー) (66)		ウォークマン (79) パソコン、PC8001 発売 (79)
流行・遊び・ アミューズメント	ダッコちゃん流行 (60) ツイスト (62)	スーパーボール (65) 電子ブロック (65) リカちゃん人形 (67) 人生ゲーム (68) グループサウンズ	ボーリングブーム (71) オセロ (73) 超能力・オカルトブーム	「およげ! たいやきくん」(75) スケートボード (76) ピンクレディー旋風 (77) キャンディーズ解散 (78) インベーダーゲーム (78) 竹の子族 (79) ディスコブーム
テレビ・映画	「ロンパールーム」(63) 「鉄腕アトム」(63)	「ウルトラマン」(66) 「魔法使いサリー」(66) 「巨人の星」(68) 「ひみつのアッコちゃん」(69) 「サザエさん」(69) 「8時だよ! 全員集合」(69)	「あしたのジョー」(70) 「ルパン三世」(71) 「仮面ライダー」(71) 「太陽にほえろ!」(72) 「ひらけ! ボンキッキ」(73)	「ザ・ベストテン」(78) 「3年B組金八先生」(79) 「西部警察」(79) 「ドラえもん」(79) 「機動戦士ガンダム」(79)
雑誌・マンガ	「おそ松くん」(62) 「少女フレンド」(63) 「マーガレット」(63)	「天才バカボン」(67) 「少年ジャンプ」(68)	「an・an」(70) 「non・no」(71) 「びあ」(72) 「ベルサイユのばら」(72) 「花とゆめ」(74) 「宇宙戦艦ヤマト」(74)	「コロコロコミック」(77) 「キン肉マン」(79)
子ども関連の事件				落ちこぼれ問題浮上 家庭内暴力顕在化



大学・短大進学率…大学(学部)・短大(本科)への進学率(浪人を含む)
高校進学率…高校の通信制課程(本科)への進学者除く

S55 1980～	S60 1985～	H2 1990～	H7 1995～	H12 2000～
東北・上越新幹線開業(82) グリコ森永脅迫事件(84)	日航ジャンボ機墜落事故(85) 男女雇用機会均等法施行(86) 地価高騰(86) 国鉄民営化(87) エイズ社会問題化(87) 消費税実施(89) セクハラ問題化(89)	湾岸戦争(91) バブル崩壊(91) 育児休業法(91) Jリーグ開幕(93)	阪神淡路大震災(95) 地下鉄サリン事件(95) 大手金融機関の破綻相次ぐ(97) 長野オリンピック(98) 東海村臨界事故(99)	九州・沖縄サミット(00) えひめ丸沈没(01) 同時多発テロ(01) 完全失業率、初めて5%まで上昇(01) 住民基本台帳ネットワーク開始(02) 日韓共催W杯(02)
放送大学開学(83) 臨教審発足(84)	単位制高校制度化(88) 初任者研修制度(88) 小・中・高学習指導要領告示(89)	大学入試センター試験実施(90) 学校週5日制(毎月第2土曜日が休日)(92) 業者テスト廃止(93)	学校週5日制が月2回に(95) 小・中学習指導要領告示(98) 高学習指導要領告示(99)	大学・大学院への飛び入学の促進(01) 「学びのすすめ」(02) 完全学校週5日制(02) 小・中学習指導要領実施(02) 国立大学法人化(04)
ボカリスエット発売(80)			O-157 猛威を奮う(96)	SARS、鳥インフルエンザ流行(03)
CD(82)		ポケベル流行 ノートパソコン カーナビ 液晶テレビ	Windows95(95) 携帯電話 MDプレーヤー デジカメ	カメラ付き携帯電話(00)
ルービックキューブ(80) チョコQ発売(80) なめ猫(81) 東京ディズニーランド開園(83) ファミリーコンピュータ(83) エリマキトカゲ(84)	スーパーマリオブラザーズ(85) おニャン子クラブ(85) ビックリマンチョコ(86) ドラゴンクエスト(86) ミニ四駆(86) バンドブーム(89) ゲームボーイ(89)	UFOキャッチャー流行(92) カラオケBox(92) ジュリアナ(93)	コギャル・ルーズソックス・顔黒・茶髪(95) プリクラ(96) たまごっち(97) ハイパー・ヨーヨー(97) ダンスダンスレボリューション(98) 遊戯王(98) キックボード(99)	東京ディズニーシー開園(01) USJ開園(01) お笑いブーム 韓流ドラマブーム
「オレたちひょうきん族」(81) 「Dr.スランプアraleちゃん」(81) 「E・T」(82) 「おしん」(83) 「スクール☆ウォーズ」(84) 「風の谷のナウシカ」(84)	「となりのトトロ」(88)	「ちびまるこちゃん」(90) 「クレヨンしんちゃん」(92) 「セーラームーン」(92) 「家なき子」(94)	「名探偵コナン」(96) 「ポケットモンスター」(97)	「ハリー・ポッター」(00) 「千と千尋の神隠し」(01) 「ロード・オブ・ザ・リング」(01)
「CanCam」(81) 「北斗の拳」(83) 「DRAGON BALL」(84)		「SLAM DUNK」(90)	「犬夜叉」(96) 「ニコラ」(97) 「ONE PIECE」(97) 「NARUTO」(99)	
校内暴力・いじめ・登校拒否が社会問題化	中野区中学生いじめを苦に自殺(86) 幼女連続誘拐殺人事件容疑者逮捕(89)	校門圧死事件(90) 山形マッド死事件(93) いじめ自殺多発(94)	学級崩壊問題化(97) 神戸連続児童殺傷事件(97) 黒磯市教師刺殺事件(98)	新潟少女監禁事件(00) 出会い系サイト関連事件頻発(01) 大教大附属池田小学校児童殺傷事件(01) 長崎県幼児誘拐殺人事件(03) 佐世保小6女児殺害事件(04)

合計特殊出生率の推移

出典：厚生労働省
『平成15年人口動態統計』
